

蒼穹のファフナー～
ファフナーに選ばれな
かった男の戦い～

n a o m i

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は孤独であった。

父は男が生まれる前に死に、母はある日家を出たきり帰ってこなかった。

男は自分の無力さに絶望していた。

同級生は真実を知って島のために戦ったが、男は真実を知らされるまで知ることが出来なかった。後輩達は力に目覚め島のために己の力を使って戦ったが、男は彼らを支援することしか出来なかった。

男は知らなかった。自分に秘められた力が敵をそして味方をも恐怖に陥れることが出来ることを……

*略称 『蒼穹のファフナー F S M W』

目次

蒼穹のファフナー

第一話	「始まり」	1
第二話	「真実」	8
第三話	「決意」	15
第四話	「現実」	20
第五話	「憤怒」	25
第六話	「再会」	32
第七話	「存在」	41
第八話	「和解」	45
第九話	「乙姫」	52
第十話	「来訪」	57
第十一話	「任務く亮介く」	62

第十二話	「任務く恵く」	69
第十三話	「変化」	75
第十四話	「追想」	80
第十五話	「無力」	91
第十六話	「祈り」	95
第十七話	「自答」	99
第十八話	「告白」	105
第十九話	「危機」	111
第二十話	「訣別」	118
第二十一話	「紅音」	123
第二十二話	「感謝」	130
第二十三話	「明日」	134
蒼穹のファフナー	HEAVEN AN	

D EARTH

第二十四話	「穏やかな日々」	144	第三十四話	「世界で生まれし人類の希望」	189
第二十五話	「忘却の来訪者」	149	第三十五話	「家族会議」	199
第二十六話	「言葉を学んだ敵」	156	第三十六話	「船出のとき」	204
第二十七話	「奪われた自由」	161	第三十七話	「初めて見る世界」	208
第二十八話	「すれ違う心」	165	第三十八話	「目覚める力、目覚めた命」	213
第二十九話	「訪れた危機」	170	第三十九話	「突きつけられた現実」	216
第三十話	「再始動する作戦」	175	第四十話	「希望を求めて」	223
第三十一話	「甦る存在」	179	第四十一話	「救世主」	227
第三十二話	「共に歩む」	185			
蒼穹のファフナー	EXODUS				
第三十三話	「掴み取った平和」				

第四十二話「還ってきた少女」	231	第五十一話「運命の地」	284
第四十三話「旅の始まり」	235	第五十二話「それぞれの苦悩」	292
第四十四話「見守る者達」	241	第五十三話「暗闇の旅路」	296
第四十五話「相手を知ること」	246	第五十四話「愛すること」	301
第四十六話「東の間の安らぎ」	252	第五十五話「旅の終着」	304
第四十七話「訪れたそのとき」	257	第五十六話「悲しき合流」	308
第四十八話「決意の瞳」	264	第五十七話「遺された者」	313
第四十九話「渴望」	267	第五十八話「新天地へ」	317
第五十話「近づく脅威」	279	第五十九話「前を向く」	321
		第六十話「記憶と記録」	325
		第六十一話「決戦」	331
		第六十二話「追憶：叶」	337

第六十三話 「追憶：真実」 |

第六十四話 「追憶：去る者」 |

第六十五話 「追憶：祝福」 |

最終話 「約束」 |

358 354 345 341

蒼穹のフアフナー

第一話 「始まり」

「亮介、亮介ってば。」

紅の太陽が沈みかけるなか、いつもの声が俺の耳に響き渡る。

「……なんだ恵か。」

「なんだじゃないわよ。またこんなところで居眠りしちゃって、風邪ひいても知らないからね。」

「……。」

「……今日はどうだった。」

「相変わらずだ。滅多に船は通らねえし、通つてもよく見る漁師のおじさん顔だ。」

「そっか。あれから1年になるんだね……。」

1年前から、俺の母は出かけてくると言っただけで帰ってきていない。風の噂では母は行方不明だと聞かされた。

静かな風とさざ波が恵の声を遮る。

「戻ろ。お母さんが亮介のこと心配してたよ。」

「この夕日が沈むまで待つてくれないか。」

恵は俺の隣で座り込み、黙つて夕日を眺め続けた。

「ただいま。」

辺りが真つ暗ななか俺達は当たり前のように家に帰る。

「『ただいま』じゃないわよ、あんたたち今何時だと思つてるのよ。」

「ごめんお母さん。」

「いつものアレなのかい。」

「そうだよ……………」

「そうかい……………ほどほどにね。」

お婆さんの気遣いが逆に辛かった。

「おく二人ともお帰り。今日はどおだった。」

「ちよつとアンタ。」

「今日も相変わらずおじさんの漁船しか見ませんでした。今日の漁はどうでしたか。」

「うんあ、今日もダメだったよ。最近全然いなくてよ。」

「そうなのかい。なんかいやな感じだね。」

「まあそうゆうこともあらくがな。そんなことより飯にしようぜ。腹減ったよ。」
「もお、お父さんつたら。」

椎名家のこの何気ないやりとりは、身寄りのない俺にとつてとても支えになり、恵の幼馴染とはいえ、娘と同年の年頃の男をなんのためらいもなく家に迎えてくれた恵の両親の懐の大きさには、ただ感謝しかなく、助けられた。そんな和やかな日々がいつまでも続くと思っていた。そして

その日は突然やってきた。

その日、俺は学校にいた。

「ねえ、亮介」

休み時間後ろから恵がつついてきた。

「僚くんと裕未さん今どうしてるか知ってる。」

「最近会ってないな。」

「ちようどあの二人と会わなくなったのって1年前なんだよね……。関係あるのかな」

将陵僚と生駒裕未。俺と恵のクラスメイトで生徒会で活動していた優等生。

僚は生まれつき身体が弱くほとんど学校で見たことはなかったが、町中で会っては、たわいのない話して朝から晩まで一緒にいるような仲だった。

裕未は the 優等生といわんばかりの美貌と教養で学校のマドンナ的存在……と俺は認識していた。

「偶然じゃねえか。」

ふと恵を見ると申し訳なさそうな顔をしていた。アノ話しに関連づけたことに少し罪悪感があるようだった。

「そんな顔すんな。別に気にしてないから。」

「ほんと、ゴメン。」

「だから、気にして……。」

ウーン、

突然町中にサイレンが鳴り響く。ざわつく教室

「静かにしなさい。」

教室内に狩谷先生の声が響き渡る。教室が静まり返る。

「皆、私についてきなさい。」

先生に言われるがまま付いて行く俺達。

「先生、なにがあつたんですか。」

恐る恐る先生に尋ねる恵に「貴方たちは知らなくてもいいこと」と誤魔化されてしまった。

先生に付いて行くと、そこは巨大なシエルターだった。島にこんなものがあるのかと途方に暮れていると

「・・・島、霧島。」

「はっ、はい。」

先生に呼ばれていた。気がつけば、シエルターの入り口で突っ立っていた。

「もお、さっさと進んでよね、後ろつかえてるんだから」

恵に言われなかに入ると、町中の人々がすでにシエルターになかにいた。

「恵、亮介君、無事だったのね。」

おじさんとおばさんもすでにシエルター内にいた。

「お父さんお母さん何が起きてるの。」

恵が不安げな顔でおばさんに抱きつく。

「大丈夫だよ、すぐに終わるから。」

優しい声をかけるおばさんの表情は明らかに何かに怯えていた。

周りを見渡すと大人達の表情は優れなかった。すると

「嫌だあの子も一緒じゃなきゃ嫌」

女の子の泣きじやくる声が響く。すぐに見張りの人が近づく。

「どうしました。」

「すみません。気にしないでください。お気に入りの人形を家に置いて来ただけなので」

女の子の母親は必至に女の子をなだめるが落ち着く様子はない。

「よければ、代わりに僕が取りに行きましょうか。」

「亮介?」

外の様子が気になってしょうがなかった俺は、ちようどいい口実だと思ひ話しに入っていた。

「ダメだ、外に出ることは許さん。」

厳しい口調と表情で見張りの人がこちらを見る。

「女の子はそれがないとダメみたいですし取りに行きます。」

「ダメだ。」

「行きます。」

急に見張りの人が黙り込んだので俺はその隙にシエルターの外へ出た「待ちなさい」と聞こえた気もしたが無視して走って行った。

「亮介。」

恵が追いかけてきていた。

「お前、ついてくるなよ」

「連れ戻しにきたのよ。早く戻って……」

すると突然爆発が起こり、俺達の身体は吹き飛ばされた。

咄嗟に恵を守るように抱きつく。彼女は無事だった。

「イッター何なの。」

爆発した方向を見ると、さっきまであった壁が綺麗に無くなっていた。

動揺する二人、光が差し込んでいて空を見上げると見たことのない金色の物体が宙を浮いていた。

あまりの美しさに目を奪われているとどこからか声が聞こえてきた。

「あなたはそこにいますか」と。

第二話 「真実」

「なにアレ……」

私達の目の前には、謎の金色の物体が宙に浮いてじつとしていた。

「綺麗だ……」

隣にいる亮介はその物体に見とれていたが、私は危険な感じしかなかった。すると「あなたはそこにいますか。」

突然聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「(ハハ)にいるぞ。」

亮介は何の疑いも持たずその声に答えた。

「……」

しばらくの沈黙の後、亮介の身体が緑色の結晶に覆われ始めた。

「亮介。」

私は亮介の身体に触れようとする。

「近付くな。」

強い口調で身体に触れようとする私の動きを止めた。

緑色の結晶が亮介の首まで到達した時。

突然緑色の結晶は砕け散った。

亮介の身体は無傷である。

「亮介大丈夫なの。」

「大丈夫だ。……アイツ俺と一つになろうとした。」

「えっ、どうゆうこと。」

「恵!!逃げるぞ」

亮介が私の手を引っ張る。金色の物体は黒い球体を作り始めていた。

私は死ねんじゃないかと思った。

「やべー。」

流石に亮介も生命の危機を感じたようだった。

するとそこへ見たことのない巨大なロボットが現れた。

「なんだアレ……。」

その場から離れようとしていた亮介の足が止まる。

ロボットは苦戦しながらも、なんとか金色の物体を倒した。

「警報解除。」

町中にアナウンスが流れた。

これが私達の初めての彼等との接触だった。

その後、この島『竜宮島』を管理する責任者 A l v i s 司令代理真壁史彦によつてこの島に住む全ての人々に『真実』が知らされた。

2146年現在、私達の住む星地球が金色の生命体『フェストウム』によつて壊滅的被害を受け、私達が住んでいると思つていた日本国は28年前の2118年に消滅した(こと)。

この島を守り続けている『A l v i s』言われる組織とこの島の心臓『ミール』の存在を。

「お父さんお母さんどうゆうこと。何日本が消滅したつて、何フェストウムつて、何 A l v i s つて何ミールつて。」

家に戻ると私は真つ先に両親のもとへ向かった。

「恵、落ち着きな。」

「落ち着けるわけじゃないじゃない。いろいろありすぎてなにがなんだかわかんないよ。」

「真壁司令代理の言つたとおりだよ。」

「じゃあ、俺達が見た金色の物体がフェストウムつて奴か。」

「亮介くん。どうゆうことだい。」

両親は、血相を変えて亮介に詰め寄る。亮介は私達が遭遇した出来事を淡々と語った。

「同化されたのか……亮介くん。」

「同化？おじさん同化ってなんですか。」

「緑色の結晶が身体を纏ったと言ったね。それは奴等の攻撃手段の一種だ。私達の存在を自分達に取り込むんだ。取り込まれた人間は結晶の塊になって消滅するんだ。亮介くんはよく無事だったね。運が良かった。」

「わかったと思うけど、フェストウムは危険な存在なの警報が出たら勝手なマネはしちゃダメだからね。」

ここからお母さんにじっくり搾られた。

数日後、私達は狩谷先生に両親から聞きそびれたことを尋ねたが、まずはキツイお叱りを受けた。

「あんた達が見たロボットは『ファフナー』と呼ばれるフェストウムに対抗できる唯一の兵器よ。」

「ファフナー……。」

「奴等は私達の行動や心理を読み解く力を持っている。私達はそれを『読心能力』と呼ん

でるわ。ファフナーはミールが生み出したフェストウムと同じ力を持つ『コア』を取り込んでいるからその読心能力を無効化できるのよ。」

「すげー。」

「なにも凄いいことはない。ファフナーにはあなた達のような子どももしか乗れないし、ファフナーに乗るのは常に同化現象に陥る危険性がある。」

「そうなんですか……。」

「私が答えられるのはこれくらいよ。さあさつきとおいき私は忙しいんだから」

私は不意にアノことを聞いてみた。

「先生は将陵くんや生駒さんがどうしてるか知ってますか。」

それは聞くべきではない質問だった。

「……。」

しばらく黙りこむ先生。

「知りたい。」

「はい。」

「そう……。ついて来なさい。」

案内された場所へ付いて行くと

「ここはA i v i sの内部。今からのことは誰にも話さないように。」

先生は黙って歩き続け、とある部屋に私達を案内した。

「ここはなんですか先生。」

「ここには、A i v i sのこれまでの活動記録が残っているわ。．．．．これを見なさい。」

先生はある情報にアクセスした。

「L計画．．．．．。なんですかこれ。」

「1年前に極秘に行われた作戦よ。この作戦のおかげで私達は猶予を与えられて今回のような事態に備える準備が出来たわ。」

「嘘だろ．．．．．。」

亮介がある記録を見て動揺していた。

L計画参加メンバーの一覧表。全員死亡と書かれたその記録には、将陵くんと生駒さんの名前があった。

何を思ったのか先生は、ある音声記録を流した。

声の主は．．．．．将陵くんだった。

膝から崩れる亮介、私は受け入れられず呆然としていた。

「彼等に感謝しなさい。彼等のおかげで私達は今、生きているのだから。」

追い討ちをかける狩谷先生。

私は、もう一度一覧表に目を向けてさらに知るべきでなかった真実に遭遇した。一覧表の一番最後。

霧島叶・・・・・・・・亮介のお母さんの名前がそこにあつた。

第三話 「決意」

「そういうことだったのかよ……」

俺は、僚と最後の会話を思い出していた。

なんの変哲もないいつもの会話だと思っていた。あの時は。

約束を果たさなかった悔しさと自分の愚かさが混じり合い、やるせなくなっていた。

「彼等に感謝しなさい。彼等のおかげで私達は今、生きているのだから。」

狩谷先生の言葉が重くのしかかる。

パサッ

恵の手からメンバーの一覧表が落ちる。

「亮介ダメ。」

手に取って目にしたのは、霧島叶……俺の母の名前だった。

「どういふことだよ。」

目の前の情報の真偽がもはや俺にはわからなくなっていた。

「霧島叶さん……とても優秀で信頼に足る人物だったわ。」

先生はそう言い残して俺達二人を部屋に残し出て行った。

俺達は押さえていた感情を爆発させた。

「ゆきつぺこんなところでどうしたの。」

「弓子……………」

「ここつて確か。Alvisの活動記録が保管されてる場所よね……………。貴女!？」

「私つてホントつくづく嫌な女よね……………」

「……………。それが、貴女なりの優しさだつてことを私は知ってるわ。」

「!?!……………弓子胸を借りていいかしら。」

「ええ、好きなだけどうぞ。」

Alvisをあとにした俺達は家に帰ることにした。

「霧島先輩に椎名先輩どうしたんですかこんなところで。」

気が付くと目の前には後輩の真壁一騎がいた

「真壁くんこそどうしたの。」

「親父に呼ばれてAlvisに向かうところです。お二人は。」

「野暮用かな。」

「そうですか……。俺はこれで失礼します。」

足早に一騎は去って行った。

「悪いな恵。」

「いいよ、私より貴方のほうが辛かったのは明白だし。」

「俺、フアフナーパイロットになる。」

「えっ。」

「狩谷先生言つてたよな、フアフナーに乗れるのは、俺達のような子どもだけだつて、僚と祐末もフアフナーに乗つてこの島のために戦つたんだ。俺だつて戦えるはずだ。」

「……。私もやるわ。」

「恵……。。」

「なにをやるんだ。」

気が付くと家の前についておじさんが話しかけていた。

「おじさん。俺フアフナーパイロットに志願したい。」

「私も。」

「!?。お前達どうゆう風の吹き回しだ。」

一連のことを恵と一緒におじさんとおばさんに話した。

「そうか……。知ってしまったんだな」計画について」

「はい。おじさん達は知ってたんですか。」

「この島にいる大人は皆知ってるよ」計画について」

「母が参加していたこともですか。」

「……ああ。黙っていてすまなかつた。」

「いいですよ。今のこの現状を知ってからそのことを知ったからまだ受け入れられてます。もしもあの頃話したところで信じてませんよ、きっと。」

静かな時が流れる……

「パイロットの件だが、ハッキリ言っただけ私達は反対だ。」

「……」

「しかし、二人の人生は二人のモノだ。自分自身で決めなさい。」

「お父さん……」

「生半可な覚悟なら、今のうちにやめておくんだ。」

「俺は、いや俺達は僚や祐未が命を賭けて守り通したこの島をアイツらの分まで守りたい。」

「恵もなのか。」

恵は深く頷いた。二人の表情は今にも泣き崩れそうだった。

「そうか。わかった、母さんアレを持ってきてくれ。」

「はいよ……。」

おばさんが持ってきたのは、お酒だった。

「私達、まだ未成年よ。」

「これは、儂らなりの卒業式だ。」

「!?!」

「お前達二人を大人として認めるための儀式だと思えばいい。」

卒業式……。二人は多くの人に見送られ大人へと認められた。でも俺達二人には目の前にいる二人が祝ってくれるだけで充分だった。

「霧島亮介。椎名恵。二人をこの島を支える大人と認めるものとし、この盃を酌み交わすとする。……乾杯。」

あたりの明かりが一つ、また一つと消えるなか俺達は大人の階段を一つ昇った。

第四話 「現実」

私達二人の卒業式を終えた翌日、私達は再び Alvis に向かった。

「霧島亮介くんと椎名恵くんだね。話しは、恵くんの両親から聞いているよ、座りたまえ」

とある部屋の一室、Alvis の最高責任者である真壁史彦司令が話しを聞いてくれた。

「君達二人は、ファフナーパイロットに志願したいということだったね。」

「はい。」

「この話しにいく前にこちらから尋ねたいことがある。」

真壁司令の放つ緊迫感に唾を呑む。

「まずは、今回フェストウムが襲来した際、一般住民はシエルター内にいてフェストウムについてあの段階では見ることが出来なかつたはずだが、なぜ君達は見ている。」

初めてフェストウムと遭遇したあの日の出来事を亮介が説明した。

「勝手に外に出たのは軽率でした。すみません。」

「私も、彼を止めることが出来ませんでした。ごめんなさい。」

「ふむ。どのみちこれからフェストウムは嫌でも目にすることになる。それはたいして気にしてはいない。」

「？」

「ファフナーとL計画……。ファフナーに関して言えば、君達はすでに見ているということだから深く問うつもりはないが、L計画は誰から聞いた。」

「!？」

「L計画については、私は話していない。極秘機密であつて知るよしの無かつた情報だ。誰から聞いた。」

「真壁司令にL計画を知つた経緯について話したら狩谷先生が私達のせいで処罰される……。そう考えてしまった私は俯いた。」

「行方不明になつていた同級生を探す手がかりがあると思ひ、この施設に忍びこみ調べて知りました。」

「つまり君達だけで情報を手にしたと……。」

「俺だけです。恵は俺をずっと止めようとしていました。」

「亮介は先生だけでなく、私まで庇おうとした。」

「そうなのかね恵くん。」

「私は嘘をついた。」

「そうか……。そういうことにしておこう。」

真壁司令は明らかに嘘を見抜いていたが不問としてくれた。

「では、本題に移るがファフナーパイロットは本来、パイロット適正や機体との相性など厳密な審査をしたうえでこちらから選抜することになっている。それにできれば多くの子どもたちを戦いの場に送りたくないという思いもある。」

「真壁司令……。」

「しかし、現状ではパイロットは一人、選抜も難航している。今回は特例として許可しよう。」

「ありがとうございます。」

「しかし、君達に適正があるかの検査はこちらでしっかりとやらせてもらう。いいね。」

「はい。」

こうして、私達のファフナーパイロット適正検査が始まった。

「私があなた達の適正検査の監督を担当することになりました。遠見弓子ですよろしく。」

「遠見先生よろしく願います。」

「先生。」

「どうしたの恵ちゃん。」

「このスーツピッタリしてて着心地が……」

「まっ、まあフアフナーに乗るためにはこれくらい身体にフィットしていたほうがいいのよ。それじゃあ早速始めるわよ。」

シユミレーターに案内され動かし方を学んだ。

フアフナーは自分がフアフナーと一体化して自分の身体を動かしているというイメージを持つことが重要だというなんともザックリな説明だけで、すごい早さで適正検査は進んでいった。

約半日かけて検査は終了した。

「恵。お疲れ。」

控え室で亮介にドリンクをもらった。

「どうだった。やってみて。」

「そうね、慣れるのに時間がかかって正直向いてないかも。亮介は。」

「俺もなんともいえない感じだよ。」

二人でお互いの検査の進み具合を話していると

「二人とも、検査結果が出たは付いてきて。」

案内された部屋には、真壁司令に医療部門代表として遠見千鶴先生、メカニック部門代表で羽佐間容子さんと小楯保さんと他に要澄美さんもいた。

結果は・・・私は適正なしだったがA l v i s の情報部門で真壁司令ほかアルヴィス上層部およびオペレーターが戦局を判断し、命令を下すCDCと呼ばれる総合管制司令室のオペレーター候補生として迎えてくれるということだった。

悔しかったが、亮介が適正検査に通ったことで悔しいより嬉しい感情の方が大きかった。

「残念だったな恵。」

帰り道亮介は慰めの言葉をかけ続けてくれた。

「亮介が通っただけでも良かったわ。おめでどう。」

「オール平均値だったけどな。ありがとう。俺、恵の思いと一緒にこの島を守るぞ。」

「亮介・・・・・・・・。明日は機体との相性を見る検査だったよね。私も見に行くから。」

「おう。」

私達はこれから待つ微かな望みに期待を抱いた。

しかし、現実是非情であった。

現段階で完成している全てのファフナーが亮介を乗せて起動することはなかった。

第五話 「憤怒」

「マークアイン……起動せず」

あれから毎日、俺は適応検査に志願した。

しかし、どのファフナーも起動することすら無かった。

保さんの声だけが虚しく響き渡る。

「亮介くん。今日はこれまでにしよう」

「ダメですよ。羽佐間と春日井が抜けたんです。早く俺の乗れるファフナーを見つけな
いと」

「しかし、あれから毎日検査している。検査とはいえファフナーに乗れば乗るほど同化
現象の危険性が高まるんだ。原因を突き止めてからやらないと君の命に関わるんだ。」

「わかりました。また明日もお願います」

「亮介くん……」

「にしても。春日井はともかく、なんで羽佐間は出撃したんですか。適正が高いからつ
て寝たきりのやつが貴重な機体を無駄にして」

思わず溢れてしまった胸の内。

「亮介くん。黙っておくから容子さんの前では決してその発言をするんじゃないぞ」「すみません。失礼します」

珍しく保さんが口調をキツくした。

「亮介」

部屋を出ると、恵が待っていた。あの日以来気まずい空気になり自然とお互いが距離を取るようになっていた。

「恵お疲れ、まだオペレーターの訓練か」

「うん。」

「先に帰ってるよ。頑張れよ恵」

恵の話したそうな表情に目を背け、俺はAlvisを後にした。

帰り道、千鶴先生が院長を勤める島唯一の診療所『遠見医院』に寄った。

「どうですか先生」

「身体上の問題はこれまで通りありません。でも相変わらずファフナーは起動しないの

よね」

「はい」

「ファフナー自体に欠陥があるとは他のパイロットを見る限り考えにくいわね。現時点

では、原因を突き止めるのは非常に難しいわ」

「そうですか」

「あなたがこれが関係あるんじゃないかと思いついた節はある？」

「実は……」

俺は、初めてフェストウムに遭遇したときのアノ事について話した。

「同化されそうになったの」

千鶴先生は驚愕していた。

「でも、突然砕け散りました」

「その事について誰かに話した」

「その場にいた恵が知っていて恵の両親にしか話してません」

「そう……。それも考慮して調べてみるわ。」

「お願いします。あの真壁司令には秘密に」

「あなたの意思は尊重するけど、必要となれば報告すると思っでいて。現時点ではまだ話すつもりはないわ。」

「ありがとうございます。」

「亮介くん。どうしてファフナーパイロットに拘るの。」

「えっ。どうしてと言われても……。死んでいった仲間の想いの分までこの島を守りた

いのと島の役に立ちたいからです。」

「そう。これだけは覚えておいて。『戦うことだけが島の役に立つ方法ではない』ってことを。」

遠見医院を出ると

「霧島。話しがあるわ。」

狩谷先生が待っていた。

そのまま喫茶店『楽園』に案内された。

「あなた、外の世界に興味ない。」

「外の世界ですか。」

突然の質問に呆気を取られていると心を揺さぶる言葉を投げ掛けられる。

「フアフナーに乗れるようになるわ」

「えっ。どうやってですか。」

耳を疑うような言葉に思わず勢いよく立ち上がる。

「竜宮島の外にはね。新国連と呼ばれる世界的な組織と人類軍と呼ばれる新国連を支えている軍隊があるの。そこでもフアフナーの研究が進められていて竜宮島のフアフナーよりも乗れる可能性があるわ。」

「本当ですか。」

「どう私と一緒に……。」

チリンチリン

店のドアが空くと

「マスターいつもの」

酔っぱらいのオッサンが入ってきた。

「おつ狩谷。生徒と二人きりでなにしてんだ。」

「チツ。溝口……。霧島今の話し考えておいてまた返事を聞きにいくわ。」

狩谷先生は足早に楽園を出た。

「お前さん名前は。」

酔っぱらいのオッサンが話しかけてくる。

「霧島亮介です。」

「お前さんが……。そうか噂は聞いているぞ。ファフナーのパイロットに志願してるんだってな」

「はい。」

「あつ。俺は溝口恭介ってんだ。よろしくな亮介。」

「よろしくお願ひします。溝口さん。」

「お前は戦いたいのか。」

「はい。島のために戦いたいです。」

「そうか。ファフナーパイロットがダメなら竜宮島の防衛隊はどうだい。」

「島の防衛隊ですか。」

「おう。軍隊つてやつだ。そりゃファフナーパイロットに比べれば、軍隊なんてこれっぽっちも力になれないかもしれないが。軍隊だからこそ出来る島の守り方つてのがあんだよ。」

「……………」

「まあ無理強いだと思ふことわねーぞ。決めるのは亮介自身だ。参考になるかわわからんがそういう道もあるつてこつた。」

「はい……………」

溝口さんは突然小声で

「俺に言ってくれればいつでも紹介してやるぞ。」

そう言い残して楽園を後にした。

家に帰ると家の前で狩谷先生が立っていた。

「その様子だと決心したみたいだね。」

「俺は……。世界がどうか、外の世界のことは何も知らないけど。今は竜宮島のために戦いたい。」

「そう……。見損なったわ。」

狩谷先生はそのまま立ち去った。

「亮介遅かったじゃない。どこ行ってたの。」

「恵。ちよつといろいろ」

「お父さんもお母さんも心配してるよ。早く。」

「ああ……。」

俺は狩谷先生の後ろ姿を見送った。先生の後ろ姿はなんだか悲しげだった。

翌日、狩谷先生が竜宮島を裏切り島を出ていった。フアフナーパイロットの真壁一騎と共に。

俺は、やり場のない怒りを周囲にぶつけることしか出来なかった。

第六話 「再会」

「恵、亮介くんって何かあったの。」

「なんで。」

「最近、学校に全然来てないからどうしたのかわらなくて。」

「知らない。」

「そう……。」

クラスメイトに聞かれても、私はこう返すしかない。

狩谷先生が島を出ていった日、亮介は怒りに身を任せあらゆる人やモノに当たった。

同行者に真壁くんがいたと聞いてそれが原因かと思つたが、彼の怒りようから根の深さを感じた。

その日は大変だった。

私に溜まっていた不満を怒りとともにぶちまけて、止めようとした両親をも巻き込み。母は泣き崩れ、父は亮介を殴り、亮介が殴り返したことで殴り合いに発展した。

翌朝の机には「探さないでください。」という書き置きを残し、それから家には帰らない。

私達は空いた穴をなんとか埋めようと気丈に振る舞った。

けれど、毎朝の重く苦しい空気は変わらず、夜には両親が喧嘩をすることが多くなつた。

私は解ろうとした。亮介の苦しみを、でも答えは見つけられないでいた。

その日は、CDCでのオペレーター訓練がなくなりすぐに家に帰った。

「お帰り。」

「ただいま、お母さん出掛けるの。」

「そうなんだよ。恵悪いけど店番頼んでいいかい。」

「いいよ。行つてらっしゃい。」

店番をしていると、

「椎名先輩、珍しいですね。どうしたんですか。」

よく見かける少女が店の前にやってきた。

「真矢ちゃん。そうよ意外かしら。」

遠見真矢。彼女は真壁一騎の同級生でAlvisでCDCでオペレーターを勤める

こともある。

「店番するの久しぶりじゃないですか。」

「そうね……。最近Alvisにいることも多いし」

「それより前からしてなかったと思いますよ」

「そうかな。それより今日はどおしたの。」

「・・・・・・・・。翔子のお墓に添える花を」

「そう・・・・・・・・。定期的に行つてるの。」

私は墓参りにあつた花を探す。

「はい。春日井くんもいなくなつちやたし、翔子のおばさんと私くらいかもしれないです。」

「そうなんだ。・・・・・・・・ねえ、真矢ちゃんは不安。」

私はカーネーションを手渡し真矢ちゃんに尋ねた。

「なんのことですか。」

「真壁くんのこと。」

私は、気まずいことを聞いてしまったのではと思つたが彼女の返事は早かつた。

「一騎くんのこと信じてますから。」

その瞳は真つ直ぐとしていた。

「そう・・・・・・・・。強いね真矢ちゃん。私なんか行方くらまりましただけでもう・・・・・・・・。」

「きつと大丈夫ですよ。霧島先輩を信じましょう。」

その力強い言葉に私は力をもらった気がした。

「真矢ちゃんありがとう。ちよつと待ってて」

私はとある花を真矢ちゃんに送った。

「この白い花は。」

「ヒヤシンスって言う花で『心静かな愛』って意味を持つてるの。」

「えっ。」

「その調子で頑張つて。」

「……………失礼します。」

真矢ちゃんは顔を赤くすると足早に店を後にした。

「真矢ちゃんどうしんだんだい、顔を真っ赤にして。」

出かけていた母がちよつと帰ってきた。

「お互い頑張ろうね。」

母は不思議そうな顔をしていた。私はその日から立ち直ることができた気がした。

そんな時、Alvisは緊迫した雰囲気にもまれていた。

竜宮島近海に人類軍が展開していたのだ。

竜宮島は普段、偽装鏡面を展開して世界から姿を消している。

そのことから、内部にスパイがおり誰がスパイなのかと調べた結果疑われたのは島を出ていった狩谷先生と真壁くんだった。

しかし、スパイ探しをしてもなにも意味はなさない。

人類軍はA l i v i s に武装解除と竜宮島の明け渡しを要求。

その猶予が刻一刻と迫っていた。

真壁司令が出した結論は……竜宮島を明け渡すことだった。

徹底抗戦を唱えるものもいたが、真壁司令の『島の人々に人殺しはさせない。』という

強い思いからの決断だった。

島になだれ込む異物。島の大人達は子ども達には触れさせまいと睨みをきかした。

A l i v i s 上層部の人達は軟禁されてしまい。竜宮島は事実上人類軍に占拠された。

その夜、絶好の機会といわんばかりにフェストウムの大群が竜宮島に襲来した。

人類軍は竜宮島の武装も使用し抵抗しようとしたが

島のコントロールは何者かによりロックされており、島のファフナーは人類軍には扱

える代物では無かった。

自分達の武装やファフナーでは太刀打ちできず混乱する人類軍。

その間に真壁司令達A l i v i s 上層部は島のコントロールを取り戻し直ぐ様防衛態勢と島民への避難指示を出す。

しかし今回襲来したフェストウムの親玉はこれまでのと比較すると格段と強くなつており次第に追い込まれていった……。

私はA l v i s上層部が島のコントロールを取り戻したと聞き、A l v i sに向かった。すると

「貴様動くな。」

人類軍の兵士に見つかり銃口を向けられた。

「どこに行くつもりだ。」

「A l v i sです。いけませんか。」

「ここから先は通す訳にはいかん。立ち去れ。」

「人類軍は島のコントロールを失い、今はA l v i sが指揮を取っています。貴方たちに止められる筋合いはないと思いますが。」

「貴様、我々をバカに」

「よしなさい。」

それは少し前までよく耳にした声だった。その人は人類軍の軍服を着ていた。

「この子は私に任せて、アレを探しなさい。」

人類軍の兵士が散らばる。

「狩谷先生……。なんで……。」

「そんなことは、どうでもいいわ。椎名さん貴女コアの居場所知ってる。」

「コアの居場所って。ワルキューレの岩戸じゃないんですか。」

「いないから聞いてるのよ。」

「えっ。そこ以外は知りません。」

「そう。．．．．．残念だわ。」

狩谷先生から銃口を向けられる、私は目の前の現状に理解できず。動くことが出来なかつた。

バーン

銃声が鳴り響く。

（私、死んだのかな。こんな死に方やだよ．．．．．誰かの声がある。誰。）

目を開けると私は撃たれてなかつた。目の前で狩谷先生が手を押さええてうずくまっている。

「大丈夫か恵。」

それは暫く見てない顔、聞いてない声だった。

「亮．．．介．．．。」

よく見ると亮介は武装をして狩谷先生に銃を向けていた。

「霧島貴方。」

「残念だよ先生．．．．．いや狩谷。本当に寝返ったんだな。」

亮介は私を背中で庇い後退りする。

「恵走れるか。」

「ええ。」

「よし、行くぞ。」

そうして私の手を引つ張り亮介は走りだした。

「亮介どういふこと。」

「話はこの非常事態が終わった後でだ。．．．けど先にこれだけは言っておく。」

「なによ。」

「ごめんな。」

「!？」

再び走り出す亮介。

「霧．．．島。霧島。聞こえるか。」

「こちら霧島。人類軍に拉致されかけた島民の一人を保護しました。どうしましたか。」

「それはよくやった。実は、コアがフェストウムに襲われそうだ。」

「えっ。」

「現在、千鶴先生がコアを保護して灯台の上にいる。今、一番近いのが霧島お前だ。二人を保護してくれ。」

「了解。」

無線が終わる。

「あそこか、5kmつてとこか。」

「亮介どうゆうこと。」

「コアが目覚めたんだ。そのコアをフェストウムが襲おうとしてる急がないと。」
急ぐ、私達。しかしフェストウムはすでに灯台の目の前にいる。

「クソ。間に合わない。」

亮介の焦りの声が響くとき

強烈な爆発とともにフェストウムが吹き飛ばされる。

「恵、大丈夫か。」

あの時のように、亮介は私を庇った。

「ありがとう。……。アレは。」

「……。ファフナー。」

二人の目の先には白銀のファフナーがそびえ立っていた。

第七話 「存在」

俺達の目の前に立った白銀のファフナーは、今まで見たことのない機体だった。

島のファフナーでは感じたことのない存在感俺を虜にした。

無駄のないスラツとした美しいフォルム。

「島の新しいファフナー。」

恵も隣でボー然としていた。

「あんなの見たことないぞ。あつ。」

吹き飛ばされたフェストウムが白銀のファフナーへ雷状の攻撃を繰り出す。それを

白銀のファフナーは……

「受け止めた……。」

マークフュンフ・アハト・ドライを簡単に退けたヤツの攻撃を見事に受け止めた。

さらにフェストウムは、無数の小型フェストウムを生み出し、白銀のファフナーにくっつけ爆破を試みる。

その光景に俺達は驚愕した。

「あのファフナーがフェストウムを取り込んでるの。」

「そうみたいだな……」

「あつ、亮介早く千鶴先生とコアを保護しないと」

恵が俺達の本来の目的を思い出し、急ぐよう促す。

（大丈夫だよ。亮介。恵。）

「なんだ。」

頭の中に誰かの声が過る。灯台を見上げると

少女がこちらを見て微笑んでいた。

（危ないから、二人共そこにいて。）

「なに……。頭に声が響く。」

「恵。この声を信じてここにしよう。」

恵は困惑気味だったが、黙って言うことを聞いてくれた。

白銀のファフナーに目を戻すと、人類軍のファフナーが使っていた武器を手に取りフェストウムに向ける。

「なにをする気なんだ。」

その武器から放たれた閃光はかつてない威力を誇っていた。

反撃を試みるもあつけなく散る親玉のフェストウム。

「凄……」

島に襲来したフェストウムが姿を消し始める。

俺達は急いで灯台へ向かった。

「遠見先生無事ですか。」

「恵ちゃんに亮介くん。ありがとう大丈夫よ。」

「あの、先生その女の子が。」

「ええ、そうよ。」

「はじめまして、亮介。恵。わたしは皆城乙姫。よろしくね。」

「君がコアなのか……。」

「そうだよ。」

「あの、乙姫ちゃん。どうして皆城って苗字なの。」

「この娘は元々皆城総士くんの妹になるはずの娘だったの。」

「そうなんですか。」

「うん。それよりも彼を迎えに行つてあげて。」

「彼……。」

「マークザインのパイロットを。」

「二人をAlvisに送り届けてからね。」

「フフフ、ありがとう。亮介。」

少女の無邪気な笑顔に俺の心は揺さぶられる。

「それが、今の俺の任務だからな。」

俺は必死に誤魔化そうとしたが、少女には見抜かれていた。

俺は二人を *Alvis* に送り届け任務経過を報告し、急いで格納庫に向かう。

白銀のファフナー「マークザイン」のパイロットがちょうど機体から降りたところだった。

そのパイロットは……真壁一騎だった。

第八話 「和解」

その場にいた皆の視線が真壁くんに集まっていた。
様々な感情が交錯する格納庫。

「真壁、お前……。」

亮介が目の前に睨みを利かせて立ちはだかる。

「霧島先輩……。」

「なにをしに来た。」

真壁司令が格納庫にやってきた。

「父さん……。」

「……。」

親子の間の沈黙を破ったのは父親のほうだった。

「話はじつくり、聞かせてもらおうぞ。」

「わかってる。」

格納庫を後にする二人。

私は、亮介が感情を抑える姿を見守っていた。

しばらくして、真壁くんが独房に入ることになったと聞いて独房へ向かった。

「霧島先輩に椎名先輩どうしたんですか。」

独房の前で皆城総士くんが立っていた。

「そこをどいてくれないか。」

「霧島先輩。恐らく先輩の用事と僕の用事は同じだと思います。」

「……………」

「ここは、僕に任せてもらえませんか。」

亮介は渋々皆城くん役目を託し、その場を立ち去った。

「椎名先輩。」

ついて行くこうとする私を、皆城くんが止める。

「どうしたの。」

「あの……………。霧島先輩に一騎と話す時間を必ず作ると伝えておいてくれませんか。」

「わかった。皆城くんありがとう。亮介に気を使ってくれて。」

私は駆け足で亮介を追った。

亮介は、私達の家の前で立ち止まった。

「どうしたの。入ればいいじゃない。」

「今更どんな顔して仕切をまたげばいいんだ。」

「亮介。」

パチーン

私は初めて亮介を叩いた。

「痛つて、なんだよいきなり。」

「これまで何してたのか話すつて約束したじゃない。」

「そうだったな。」

「しつかり話そうよ。私達家族じゃない。」

「恵………。ありがとう。」

扉を開ける亮介。無言のままだった。

「恵。帰ったの………。亮介くん。」

「ただいま戻りました。おばさん。」

「無事でよかったわ、さあ上がりな。」

母は大粒の涙で亮介を出迎えた。

「恵。玄関の前でなに突っ立っているんだ。」

ちょうど外出していた父も戻ってきた。

「亮介……」

「おじさん……」

久しぶりに家族が揃った。

居間で顔を合わせる4人。どこかあのときの雰囲気を引きずっていた。

亮介が重い口を開く。

「まずは、これまでの一連のこと。すみませんでした。」

「そのことはいいよ、無事で戻ってきてくれてなによりなんだから。」

「でも、おじさんとおばさん全く関係ないのに俺は二人に八つ当たりを。」

「これまで何をしていた。」

父は厳しい口調で亮介に尋ねた。

「実は……」

亮介は、あれから溝口恭介という人物のもとで島の防衛隊の仕事を学んでいたと話した。

「どうするつもりなんだ。」

「そういつた島の守り方もありだと考えています。でもファフナーに乗るのを諦めた訳ではありません。」

「そうか……。あくまで『戦う』道を選んだな。」

「はい……。」

父は、居間を一旦離れると小さな木の小箱を亮介に渡した。

「これは……拳銃。」

「お前のお父さんから預かっていた。できれば渡したくは無かったが。この道にお前が進むと決めたとき渡してくれと言われていた。」

「ありがとうございます。」

「それと、ここはお前の家だ。どうするかは好きにすればいいが、いつでも戻って来い。」

「おじさん……。ありがとう……。ありがとうございます。」

涙ぐむ亮介。やっと戻って来た彼を私達は涙を流して迎え入れた。

家族の絆が戻って一段落したあと

亮介はようやく真壁くんと話す機会を設けることができた。私は亮介についていく。

扉越しに話す二人。

「すみません。霧島先輩。」

「何に謝っている。」

「島を出たこと、先輩の気持ちを考えることなく。」

「あのときは確かに腹立たしかった。だが島の守り方を学んで。お前が出て行った理由を色々考えた。」

「先輩。」

「外の世界はどうだった。」

「……」。総士と話したんです色々。そして改めて総士のこれまでの言葉を考えてみました。」

「……」。

「この島ってホントに素晴らしい島です。」

「そうか……」。

亮介が扉から離れる。

「真壁。この島を頼む。俺もできる限り助けるぜ。」

「先輩……」。ありがとうございます。」

「俺も早くアレに……」。

「先……輩？」

「いや、頑張れよ真壁。じゃあ。」

その場を離れる亮介の背中、遅しくなっていた。

そして、真壁くんが一人の少女と島を人類軍の策略から救ったのは、

このやりとりから数時間後のことだった。

第九話 「乙姫」

「先輩やめた方がいいですよ。」

「そうだ亮介くん。この機体は他のモノより遥かにリスクを伴うことが想定される。やめるんだ。」

「やめてよ。亮介。」

三人が俺を必死に止めようとしていたが、俺はどうしても試したかった。

「保さんお願いします。」

「今はファフナーパイロットも十分足りているんだ。君が無理をする必要はない。」

「俺は納得したいんです。お願いします。」

「……………。一回だけだぞ。」

俺は、マークザインに乗り込んだ。

「見てろ真壁。俺にも乗れるファフナーがあることを証明してやる。」

「テスト開始。」

マークザインの起動に試みるとこれまでと違う反応が出てきた。

「クッ……………」

「亮介。」

「椎名くんここまででは心配ない。マークザインに初めて搭乗しようとするときは、これくらいの同化現象は起きるんだ。．．．もつともこれまでテストしたパイロットはテスト中止で強制的に終了しているけどね。」

「そんな．．．大丈夫なんですか。」

「そうなる前に止めるさ。」

（この感じ、あの時以来だ。でもあの時よりもずっと激しい。）

俺の身体から溢れ出る緑の結晶は俺の身体を包もうとする。

「これ以上は危険だ。試験を中止する」

「霧島先輩。」

「亮介。」

「俺を取り込めるもんなら、取り込んでみろ。」

パリーン．．．．．

「マークザインの同化に耐えきった。」

保さんは驚愕していた。真壁と恵は安堵の表情を浮かべている。

「よしこのまま。」

しかし、マークザインは起動しなかった。

「そんな、なんで。」

その後、何十回と起動を試みたが、目覚めることは無かった。

バーン

射的場に銃声がこだまする。

「だいぶ腕を上げたじゃないか亮介。」

「溝口さん。お疲れさまです。」

「また、試したんだってな。」

「はい。手ごたえはあったんですが、どうしてですかね。」

「俺に聞くなよ。そつちのことはさっぱりなんだから。」

「そうですか。」

「うくん。そうだなコアのお嬢ちゃんに聞いてみればわかるんじゃないか。」

「皆城乙姫にですか。」

「ああ、あの子は竜宮島そのものなんだから解ることがあるんじゃないか。」

「そうですね、ありがとうございます溝口さん。」

「おう、そつちもいいが部隊員への昇格試験を忘れるなよ候補生。」

俺は急ぎ皆城乙姫を探しに行こうとすると少女にぶつかった。

「ごめん、大丈夫か。」

「ああ。」

「お前見ない顔だな。」

「あつ忘れてた。亮介その子は一騎が助けた子だ。」

赤い髪の短髪はじつとこちらを見ると。

「カノン・メンフェイスだ。よろしく頼む。」

名前を言い残し溝口さんの後を追った。

「そろそろ来ると思ってたよ亮介。」

島中を探し回ってようやく皆城乙姫を見つけた。

「外が好きだつて聞いてたけど、今日はここなんだな。」

「亮介とのかくれんぼ楽しかったよ。」

少女は満面の笑みを魅せる。

「話がある。」

「知ってる。」

「なら教えてくれ、俺はどうして適性があるのにファフナーに乗れないんだ。」

「焦らないで、貴方が乗る日は必ず来るから。今がその時ではないだけ。」

「それはいつなんだ。」

「……。いつかを特定することはできない。でも貴方が乗る日がくることはわかる。今の貴方にできることを精一杯やって。それがやがて貴方や島の力になるから。」

「信じていいんだな。」

少女は強い瞳でこちらを見続ける。

俺はその瞳を信じA l i v i sをあとにした。

第十話 「来訪」

「今日は訓練ないのか。」

出掛けようとする亮介をレジの傍にある椅子に座って見送る。

「うん。だから店番頼まれたわ。亮介は訓練。」

「ああ、今日はあの人と一緒になんだよ。」

「あの人。」

「佐喜さん。」

将陵 佐喜、将陵 僚のおばに当たる人で将陵 僚が消息を経つて以来会うのを避けていた人。彼女も島の戦闘部隊（亮介いわく防衛隊）のメンバーだということは

亮介が部隊の話をした際に聞いていた。

「行ってくる。」

少し緊張した面持ちで亮介は家を出た。

家の店は当たりハズレが激しい。お客さんが来るときは結構来るのだが、来ない日はとことん来ない。

この日は……ハズレだ。

しばらく座っていると

「ここは……花屋か。」

見知らぬ少女が店を訪ねて来た。

「カノン勝手に動き回るな。」

そのあとを見覚えのある男がやってくる。

「あれ……日野先輩。」

日野道生。弓子先生や狩谷先生の同級生で、ある日父親の日野洋治と一緒に島を出たと聞いていた。

「君は……椎名か。懐かしいな、この花屋はお前の家か。」

「はい。どうしたんですか。」

「こいつのおもりを任されたんだよ容子さんに」

「トリプルシックス。貴様が勝手に付いて来ただけだろ」

「あのよカノン。お前一人で歩き回ってどうするんだ。」

少女は黙り込む。

「俺は案内も兼ねてついてきてるんだよ。」

「頼んだつもりはない。」

「まったく、素直じゃねえな。」

「カノン……さん。よければ店の花たちを見て行つてよ」

カノンは顔を赤らめると小声で「ありがとう」と言つて店内を見て回る

「椎名、アイツは一騎達と同一年くらいだ呼び捨てでいいぞ。」

しばらくするとカノンは一つの薄いピンク色の花をじつと見るようになった。

「それはエリカね……。」

「この花を見ていると、なぜだか落ち着くんだ。これもらえるか」

「ええ。どうぞ」

カノンはエリカの花を受け取ると一礼して店を去ろうとした。

「待つてこれ。」

私はなぜかカノンの足を止めた。

「なんだこの赤い花は。」

「ポピーよ。また、いらつしやい。」

「失礼する。」

「おい待てカノン。じゃあな椎名。なんかありがとう。」

二人は沈みゆく日に向かつて立ち去つた。

連絡が来たのはちようどそのときだった。

「はい、椎名です。」

「恵ちゃん。要ですちよつといいかしら。」

「澄美先生どうしたんですか。」

「今からCDCに来れる。」

「はい、行きます。」

私は意気揚々とCDCに向かう

「よく来てくれたわ。」

「澄美先生。あの真壁司令や他の皆さんは。」

「用事で席を外しているの、それで私達が戻ってくるまで、里奈さんと二人でここをお願いしますの。」

「わかりました。」

私は、西尾里奈と二人でCDCを任されることになった。

「椎名先輩。よろしくお願いします。」

「西尾さんよろしくね。私ここを任されるの初めてだから、西尾さんの経験頼りにしてるわ。」

「そんな、私だってCDCで戦闘のオペレーターをしたことはありませんけど、任されるのは初めてですよ。」

「西尾さん。真壁司令達が何してるか知ってる。」

「さあ。なんでも新国連のお偉いさんが来たらしいですよ。」

「新国連……。」

「噂では、遠見先輩のお父さんらしいですよ。」

「真矢ちゃんの……。」

「ちよつと待つてください。えつとこの人です。」

西尾さんは素早いタイピングでその人物の映像を出した。

「この人です。名前はミツヒロ・バートランド。」

「あつ。」

「どうしました先輩。なんだか嬉しそうですけど。」

「えっそんなことないよ。」

その映像には、警護をしている亮介の姿が映っていた。

第十一話 「任務く亮介く」

とある一室。

火薬の臭いが充満し、床には薬莖が落ちてゐる。使い古された包帯が其処ら中に散乱する。

「ここが俺の新しい“居場所”だ。

俺達は“制服”に着替え来たるべきときに備えて準備をする。

いつくるかもわからない「そのとき」のために。

「全く、いつもこんなに散らかして私の身にもなつてほしいわ。」

そんな部屋に似つかわしくない人が入ってくる。

「佐喜さん。おはようございます。」

「おう、おはよう……ってなんだ亮介じゃんか。なんだよ堅苦しい挨拶しちゃつて」

「いや、ここでは先輩ですし、今日は一緒に訓練のパートナーになつてもらおう方に……」

「なにを今更、あの頃は馴れ慣れしくタメ口だったくせに。」

「確かにアノ頃は……」

「……お前に責任はないんだ。私に気をつかう必要はないよ。」

「はい。」

「そんな顔するなよ、今日はよろしくな。あつ今から着替えるから外にいてくれ」
「あつ、はい。」

着替えをしだす佐喜さん。そこに

「おい、将陵。霧島開けんぞ。．．．．つてすまん。」

「溝口さん早く出て行つてくださいよ。亮介こつちを見るなく。」

俺達にあらゆる物が飛んできた。

「改めて二人共いいか。」

「溝口さん、いい加減ノックしてくださいよ、あと部屋は綺麗に．．．．。」

「わかつたつて。悪かつたよ。それで二人への用事なんだが。任務についてもらう。」

「任務ですか。」

「二人ですか。」

顔を見合わせる俺達。

「ああ、本当は予定どおり訓練のはずだったが、来客がくることになってよ、そいつの警護を頼みたい。」

「警護対象は。」

「なくに、昔島にいたやつさ」

「予定では、1時間後にはそいつを乗せた飛行機が竜宮島に降り立つ。将陵を中心に警護の用意をしてくれ。」

「了解。」

佐喜さんは足早に準備に向かう。

「亮介。」

俺は溝口さんに呼び止められた。

「この任務、昇格試験前のテストだと思って臨めよ」

いつきに俺の緊張感が増した。

警護対象の男が島の飛行場に降り立った。

「なんだ、元島の島民が帰ってきたというのに、出迎えは三人か。」

「あいにく、こつちも手が離せなくてな、この二人がお前の警護を担当する。」

ミツヒロ・バートランド。弓子先生や遠見真矢の父親で研究者。竜宮島のファフナー設計に亡くなった日野洋治さんと共に関わり、島を抜けた後も新国連で一騎の乗るマークザインのようなザルヴァートル・モデルの開発をしているらしい。

「溝口。女と子どもに私の警護をさせるのか。」

俺と佐喜さんは男を睨みつけた。

「安心しな、二人は優秀だ。それにこの島に人間の命を狙うやつはいねーよ。じゃ二人共頼んだぞ。」

「あの男……。まあいいせいぜい足を引つ張るんじゃないぞ」

「なんだと。」

「亮介。やめな。」

佐喜さんが手で静止を促す。

「しかし本当にこの島は人手不足なのか、幼い子どもまで徴兵して。」

「あいにくこれは、俺の意思だ。」

「そうかそれはすまなかったな、坊や。」

小バカにした高笑いをしながら俺達の前を歩く男

「亮介、感情的になるなどんな任務でも感情的な行動は命取りになる。」

「でも、佐喜さん。」

「ああゆうヤツは好きに言わせておけばいいのさ」

俺達は一定の距離を保って男についていった。

「なんだ……。」

「どうした亮介」

「なんか嫌な気配がするんですが。」

「そうか。だが今は対象の警護に専念するぞ。」

「はい。」

しばらく男は歩き遠見真矢と再会した。そばにいた弓子先生はイラついていた。

「警護の二人、しばらく真矢と二人にしてくれないか、親娘みずいらすの話をしたい。」

（島のモニターでも監視はしている。要望に答えていいぞ）

「了解。……わかりました。しかし我々が目視できる範囲にはいさせていただきませぬ。」

通信を聞いた佐喜さんが素早く対応した。

「なにをしにきたんですかねあの人。」

「さあ。ただ娘に会いにきたわけではないと思うが。」

「……あの人なにをしてるんだ。」

俺はさつき感じた嫌な気配をまた感じた。

「どうした亮介。」

「佐喜さんはそこにいてください、怪しい人物を発見しました。追跡します。」

怪しい人物について行くと7、8人の集団に遭遇した。

「目標のモノは見つかったか。」

「はい。このポイントにあるかと」

俺は双眼鏡でヤツらの手元を見て驚愕した。

「佐喜さん。こちら霧島。大変です。あの男以外に島の外の人間が紛れ込んでいて島のフアフナーを盗む気です。」

（なんだと、わかった一人で動くなよ亮介。戻ってこれるか対象が移動を始めた。）
俺は見過ごすべきではないと思つたが佐喜さんの指示に従い戻つた。

「なるほどな。ノートウング・モデルの強奪か、あの野郎白々しい顔してそんなこと考えてやがったのか」

任務一日目が終わり溝口さんに報告をしていた。

「よくやったぞ亮介。将陵もよく単独で行かせなかつた。」

お互いに小さくハイタッチする。

「上層部への報告は俺がしておく。お前達は休め。」

「溝口さん。どのように対処するおつもりですか。」

「そうだな。A l v i s 上層部に許可はもらわないといけながなにせ大変なことに

なっちまったからな。」

「どういうことですか。」

「なんでもデータの改竄疑惑で遠見先生に査問委員会がかけられるそうだ。」

「えっそんな。」

「査問委員会に俺も召喚することになってるからよ。お前達に任せようと思う。」

俺と佐喜さんは再び顔を見合わせた。

溝口さんが、現時点で考えている作戦を俺達に説明する。

そして長く慌ただしい二日目が幕を開けた。

第十二話「任務～恵～」

「真壁司令や要先生どこにいったんですかね。」

「弓子さんや近藤さんも姿が見えないのよね」

CCCで待機を里奈ちゃんと指示され、どれくらい待機しているのだろう。

「遠見先輩のお父さんも別に遠見先輩に会っただけで、不自然な動きしてないですし」「そういうえば、二人も先程から島内のカメラに写らないわね。」

「言われてみればそうですね。どうしましょ椎名さん、私達追跡対象を見失っちゃいました。」

「私にどうしようといわれても…」

慌てふためく二人

「CCCこちら将稜応答願います。」

突如佐喜さんから通信がはいる。

「はい、こちら西尾ですどうしましたか。」

「里奈ちゃんね、今島内に侵入者がいるの人数は8人追跡出来る。」

「!?侵入者ですか。待ってください…見つけましたエリア31に不審な集団8人を確認

しました。」

「ありがとう。これから定期的にその集団の情報を頂戴。」

「佐喜さん、お久しぶりです。あの、なにかあったんですか。」

「その声、恵ちゃんね久しぶり。今人類軍が混乱に乗じてノートウング・モデルを強奪しにきたの」

「えっ、ええ、、」

「これからその集団の制圧に向かうわ、貴女達にも手伝って欲しい。」

「わかりました。」

「一応内密にと言われてるから、この4人でなんとしても取り押さえるわよ」

「…あと1人は誰ですか。」

「なんでお前がCDCにいるんだよ。」

「亮介!？」

「あの佐喜さん。混乱ってなんのことですか。」

「…千鶴さんが、データ改ざん容疑で査問委員会が開かれているの。」

思わず里奈ちゃんと顔を見合わせる。

佐喜さんと亮介は通信を切りエリア3-1に向かった。

「なんだか、えらいことになってますね。遠見先輩のお母さん本当にデータ改ざんなん

てしたんですかね。」

「千鶴さんはそんなことしないと思うわ。」

「そうですね。」

遠見千鶴。遠見真矢の母で竜宮島の病院「遠見医院」の医院長。A l v i s では遺伝子の研究をしており、ファフナーパイロットが同化現象を抑え、ファフナーにのり続けることが出来るのは千鶴さんの研究の成果だと言われている。

「千鶴さんもし、もし容疑が認められたらどうなるんですか。」

「どうかしらね、春日井くんのご両親はスパイ容疑で島を追放されたっていうし、千鶴さんもしかしいたら…。」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないぞ。」

唐突に亮介から通信が入る。

「ビックリするじゃない。」

「お前らの会話、こつちに筒抜けだ」

「えっ。」

「佐喜さんなんてさつきから腹かかえて笑ってるぞ。そんなことより今、例の集団に追いついた。」

「確認しました。集団も動き無しです。」

里奈ちゃんはすぐに切り替え対応。そんな里奈ちゃんに感心していると

「あいつら、二手に分かれそうね。」

「どうしますか。佐喜さん」

「CDCへ、このエリアの地図を頂戴」

あつげにとられていると、あつという間に事態が動いた。

「恵、聞いてるか」

気がつくと、佐喜さんと里奈ちゃん、私と亮介で分担して対応することになっていた。

「まずいな、この方向は…」

その先は、査問委員会が開かれているブロックに続いていた。

「佐喜さん、こちら霧島、奴ら査問委員会の開かれているブロックに行きそうです。」

「こっちはブルクに突入しそうだが、亮介そっちは任せたよ」

亮介は隠密に対処する方法を考えていた。

「亮介…一か八かに乗る気ある。」

その5分後、亮介は相手に向かって突撃した。集団は突然のことへの驚きと、私とCDCからこのエリアの酸素濃度をいじったために起こしていた酸欠で動けないでいた。

素早く武器を取り上げ拘束する亮介

「恵、もう限界だ。早く戻してくれ」

亮介の苦しそうな表情を見て慌てて酸素濃度を元に戻す。

「こちら霧島、4人を拘束しました。」

「よくやった亮介、そつちに応援を回したから待つてな」

佐喜さんの方も被害が出ることなく拘束され、査問委員会も全員無罪で閉会した。

真矢ちゃんのお父さんが島を出た翌日、真矢ちゃんが家に来た。

「いらつしやい、どうしたの」

「翔子のお墓に添える花を探しているんですけど、恵先輩オススメの花ありますか」

「そうね…」

「そう言いながらも真矢ちゃんが花を探す理由を聞いて真つ先に思い浮かんだ花を手
に取った。」

「そのピンクの花はなんですか」

「ゼラニウム。決意って花言葉をもってるの」

「恵先輩…それください」

「わかったわ…ねえ真矢ちゃん。今回のこと、どう思ってるの」

「…お姉ちゃんになんでそんなことしたのと思う気持ちが無いといえば、嘘になります。」

皆と同じ所に居られないことが、すごく悔しかったですから。でもそれ以上に昨日お姉ちゃんに言つた感謝の気持ちのほうが大きいです。」

「そう、なら良かった。」

「じゃあ私行きますね。恵先輩ありがとうございました。」

真矢ちゃんは太陽のように眩しい微笑みを残し、家を去って行つた。

第十三話「変化」

「お嬢ちゃんスゲーな」

溝口さんが興奮気味に遠見の適性テストについて語っていた。

「遠距離射撃命中率90%オーバー、A i v i s きつてのスナイパーの誕生だ」

部隊の皆もその話題で持ちきりだ。

「亮介浮かない顔だね、どうした」

佐喜さんには俺の心情を見破られていた。

「いや、なんでもないですよ」

「なんだ亮介、もしかしてお嬢ちゃんに焼きもちか」

「そんなんじゃないですよ」

「溝口さん」

佐喜さんの鬼の形相に溝口さん達が冷や汗をかいた

「将陵冗談じゃないか、亮介も悪かった。悪ふざけが過ぎた」

「本当にデリカシーの無い人達なんだから」

「悪かったて…。けどよ亮介。お前は正式に竜宮島防衛部隊の隊員になれた。その歳で

の着任は史上最年少の事だ。お前の想いとたゆまぬ鍛練が認められたんだ。もつと自信を持って。」

「溝口さん……」

「この人はこういう所がズルいといつくづく思う。」

「よし、お前ら気を引き締めて。訓練に戻るぞ」

野郎達がぞろぞろと動き出す。

「まったたく」

「断ち切ったつもりだったんですけどね」

「亮介……」

「遠見に親近感を持ってたんですよ。なんか境遇が似てるなつて。けど実際はデータミスでトップクラスのパイロット適正があった。俺も適正はあるはずなのに……」

「今自分に出来ることをするつて決めたんですよ」

「佐喜さん」

「出来ないことを嘆いてもしょうがない。今出来ることを精一杯やりなよ。そのためにこの道を選んだんでしょ」

「そうですね、ありがとうございます。少し気持ち楽になりました」

佐喜さんに励まされ、俺はその日も訓練に打ち込んだ。

家に帰ると

「お帰りなさい。」

恵が店番をしていた。

「なんだよ」

「…悩みは一応解決したんだと思って」

「なっ、悩みだ。俺が」

「うん。家出る時の亮介の表情いつもより元気なかつたから」

恵にまで気づかれていたとは、恥ずかしくなって話題を反らした

「今日は売れたのか」

「そうだね…売れたほうだと思う」

「思うってなんだよ」

「毎日店番してる訳じゃないからわからないよ」

「それもそうか」

変な間が流れる。なにか切り出そう

「あのさ」

被った。

「なんだよ」「そつちこそなによ」

「この間はあるがとうな、お前の提案のおかげで上手く行った。」

「あんな危険な提案乗ってくれると思わなかったは」

「恵のこと信じてるから…お前の提案だから迷わずいけた」

「なによ急に恥ずかしい」

恵の恥じらう表情になぜか胸がときめいた。

「二人ともご飯だよ。店閉めていらっしやい」

二人は視線を合わせること無く食卓へと向かった。

その夜

「ねえ、亮介まだ起きてる」

普段俺よりも早く寝る恵が部屋のドアをノックした。

「起きてる。珍しいな恵がこんな時間まで起きてるなんて」

「…眠れなくて。ドア越しでいいから聞いてくれる」

「どうした」

「亮介はこのまま戦い続けるの」

「なんだよ急に」

「あの時、初めて亮介の仕事を見た。モニター越しだけど、無事に帰って来てくれるのか
凄く心配だった」

「当たり前だろ、俺はこの家に必ず戻ってくる」

「フェストムは人よりも遥かに未知数で恐ろしい存在なんですよ。嫌だよ私、亮介がい
なくなるの」

「恵!!」

俺は思わず扉を開けドアに持たれ掛かっていた恵を抱き締めた。

「俺は恵を信じてる。だから恵も俺を信じてくれよ」

「…うん」

「どうだ。落ち着いたか」

「うん。亮介もう少しこのままでいて」

「わかった」

その日、幼なじみであり家族でもある恵に対する気持ちが変わった気がした。

第十四話 「追想」

「もうじき、盆祭りの時期だね」

家の手伝いをしていると、母が呟いた。竜宮島で夏の時期に行われる「お盆」の習慣を引き継いだお祭りだ。

「亮介君今年はどうするかね。」

「なんで」

「ほら、去年まではお父さんはまだしも、お母さんは行方不明だったから流してなかったろ灯籠」

このお祭りでは、亡くなった人達の名前を書いた灯籠を海に流し成仏する。

亮介は行方不明だった亮介のお母さんの灯籠を造るのを頑なに拒み、これまで灯籠を造らなかった。

でも今年はA l i v i sでお母さんのこれまで知らなかった事実を知ってしまった。

「どうするかね、亮介」

「ほら、ボーツとしてないでこの花を束にしといてくれ」

「母さんや、この花束は誰宛だった」

「それは、羽佐間さん家だ」

この時期は私の家も毎日が忙しい。漁師をしている父が本業を漁師仲間引き継いで休み、家を手伝うくらいだ

「あつ時間だ、行つてくるね」

「気をつけるんだよ」

最近をよく、学校に顔を出している。在校生にお願いされ灯籠造りや盆祭りの出し物についての助言を求められている。

今日は、剣司くん・衛くん・咲良さん・カノンがいた

「あー、椎名先輩やつときた」

「ごめん、ごめんどう、順調」

「そうですね、あと30個灯籠造れば今日の目標は終わります」

「えー、姉御まだやるの。早く帰ってゴーパーンが読みたいよ」

「あんた授業中も読んでるでしょうが」

「俺も早く帰りたい」

「あんた達ねー、カノンを見習いなさい」

ふと視線を向けると初めて灯籠を造るはずのカノンが物凄い手際の良さで次々に灯籠を完成させていた。

「咲良これでいいのか」

「バツチリよカノン、ほらあんた達もやんな」

「渋々作業を再開させる二人、私も手伝いに入った

「終わったーさあ帰ろうぜ」

手伝い出して1時間後作業が終わった。

「椎名先輩、今日はありがとうございます」

「どいたしまして」

「私達は帰るけど、カノンはどうする」

「容子に頼まれた用事があるから、恵と帰る」

「わかった。また明日ね」

三人は教室を出た。

「私に関係があるの」

カノンは頷き

「恵の家に翔子に供える花を頼んでいるから、帰りに寄って買ってきてくれと頼まれている」

「あつ、そういうえば羽佐間さんの家から花束を頼まれてたね。一緒に帰ろうかカノン」

「どう、この島での暮らしは慣れた」

帰り道カノンを質問攻めにする。私の家に花を見にきて以来だったのでなんだか嬉しかった。

「この島の暮らしには驚くことばかりだ、だが皆が優しく家族のように私を迎えてくれる。だから嫌じゃない」

「そっか、なら良かった」

「今回のお祭りは死者を弔う祭りだと咲良達に聞いた。恵は灯籠を流すのか」

「私は幸い誰も亡くしてないから流さないよ。ただ亮介は…」

「亮介：霧島か、アイツは流すのか」

「わからない。でもこれまで生きていると信じてた人が亡くなっていて最近知ったの」

「そうなのか…」

「カノンは流すの」

「翔子の分をな、会ったことは無いし写真でしか知らないが。容子にとって凄く大切な人だったというのは伝わってくるから」

「優しいねカノンは」

「なっ、そんなことは…ない」

照れて俯くカノンが可愛らしかった。

家に着くとちやうど亮介も帰ったところだった。

「恵とカノンか」

「亮介も今帰り」

「ああ、カノンはどうしたんだ」

「容子から恵の家に花束をお願いしているから買ってきてくれと頼まれているから、ここに来た」

「そっか、今おばさん呼んでくるからちよつと待つてな」

「霧島は…灯籠を流すのか」

「えっ」

カノンからの不意の問いに戸惑う亮介

「…わからない。…呼んでくるな」

細りと言ひ残し中に行つてしまった。

「私はマズイことを聞いてしまったか」

「驚いただけだと思ふよ多分」

「そうか…すまない」

深々と頭を下げられ今度は私が戸惑った。

「大丈夫だよ全然。カノンって本当に真っ直ぐな子だね」

「いけなかつたか」

「誉めてるんだよ」

「そうか…ありがとう。」

その後、亮介から花束を受け取りカノンはまた深々と頭を下げ帰って行った。

「もう、そんな時期なんだな」

亮介はそう呟いて足早に部屋に戻った。

盆祭り当日

町は屋台が建ち並び活気に溢れていた。

「じゃあ恵、母さん達は花を届けに回るからお祭り楽しんでらっしゃい」

母さん達は家を出掛けた。亮介はまだ自分の部屋から出て来ない

「亮介、お祭り行かないの」

返事が返ってこない

（早く一緒に行きたいのに…）

すると

「ダメだー」

昼過ぎて聞いた今日の亮介の第一声

「どうしたの」

急いで亮介の部屋の扉を開ける。部屋の中では亮介が何かを造っていた。

「もしかして、灯籠」

「ああ…」

私は安堵した。あの日以来ちゃんと亮介と話せていなかったからカノンに話した事を怒っているのだと思っていた。

「カノンに言われて気づいて急いで造ってみようとしたけど全然ダメだ…恵なんで泣いてるんだ」

「だって…。カノンから質問されてから口数減るし、凄く機嫌悪そうだったから、カノンにお母さんのこと話して私怒らせちゃったかなって」

涙ぐむ私の頭に亮介はそつと手を乗せる

「ごめん。灯籠とか造ってこなかったからいぎ準備しようとする全然出来なくて焦ってた。むしろありがとうな恵。思い出させてくれて」

「えっ」

「むしろカノンに言われるまで、今日のこと忘れてたし、母さんのこと。バタバタしてた

ことを理由にちゃんと向き合つてこなかった。母さんがいないことと向き合うことを避けてきた。」

「亮介……」

「もう、母さんはいないんだよな」

私は言葉を返せなかった。

「恵がこのことと向き合うキツカケをくれた。だからありがとう」

「灯籠……今年いっぱい造つたから私造れる」

「恵」

「一緒に造ろ」

「ああ」

束の間二人の時間。気がついたら夕方になっていた。

「なんとか、灯籠流しに間に合つたね」

「ありがとう恵……」

「どうしたの」

「浴衣似合つてるじゃん」

「今さら……でもありがとう」

「行くか祭り」

太鼓の音、提灯の灯り、静かに流れる風、島の盛り上がりは続いていた。

「霧島先輩、椎名先輩」

三人組とカノンがいた。

「その灯籠…」

「俺の母さんのやつ、最近亡くなって知つてさ。カノンありがとうな」

「私はなにも。むしろお前の気持ちも考えず、すまなかつた」

「お前と恵のおかげで俺は前に進めた。だからありがとう」

「そうか、なら良かった」

「カノンーさっきの続きするよ」

「わかつた」

「続き。」

「衛のやつ、盆踊りの躍り方としてアイツ自分の好きなマンガのヒーローの必殺技教えてるんですよ、カノンそれは違うから止めな」

「衛もいい加減止めろー」

私達の苦笑いを他所に四人は去っていった。

「亮介と恵だ、こんばんは」

振り向くと乙姫ちゃんと立上芹ちゃんが仲良く歩いていた。

「向き合ってたんだ、現実と」

「ああ、恵のおかげでな」

「乙姫ちゃんなんの話」

「ある人がある出来事とどう向き合っていくか決めたお話だよ芹ちゃん。行こ芹ちゃん。二人も楽しんでね」

「ありがとう乙姫ちゃん」

少し歩くと

「おつ、亮介と恵ちゃんどうだ遊んでいくか」

亮介の上司溝口さんが射的屋をやっていた。

「特賞がライフル銃ですか」

「おうよ、一人当てたぜ」

驚く二人、誰が当てたか尋ねると

「お嬢ちゃんだ、まあハズれのリングゴ飴に変えちゃったけどな」

「溝口さんやらせてください」

亮介が何回も挑んだが、結局沢山リングゴ飴を貰うことになった。

「ごめんな恵くんなにリングゴ飴いらないだろ」

私は思わず笑ってしまった。

「なんで笑う」

「だってあんな真剣な亮介久しぶりなんだもん」

「そうか」

そして灯籠流しての時、お母さん達も仕事を終えなんとか合流出来た。

「亮介それ…」

「今年からは流そうかなと」

「そうか。叶さんも喜ぶぞ」

静かに岸から灯籠を流す、島の人達も次々に各々の想いを乗せて灯籠を流している。弔いの花火が上がり始める。

「恵。ありがとうな」

亮介は私の手を力強く握りしめた。私も彼の手を握り返し、花火を二人で見続けた。

第十五話「無力」

その日、俺は溝口さんから戦闘機の訓練を受けていた。

「セイバーよりケイトスへ、ターゲット捕捉」

「OKだ、そのままターゲットをポイント39に引き付け撃退しろ」

「ラジャー」

ターゲットを目標地点へ誘導し…撃退

「セイバーへ、ターゲット撃退確認。だいぶ対象の誘導に慣れてきたな亮介」

「そうですね。ようやく身体に染み付いてきました。」

「いいじゃないか、よし。模擬戦に入るぞ」

「ラジャー。今日こそ落とします」

「まだまだ、ひよっ子にはやられんよ」

（よし、後ろは取った。だけどここで焦ればこれまでのようにかわされてロックされる）

（いいぞ亮介、これまでの訓練の教訓が生かされてる）

「よし…捉えた」

今日こそ勝ったと思った瞬間

「あなたはそこにいますか」

突然奴等が現れた。溝口さんの戦闘機との間に現れて溝口さんの様子がわからない

「亮介…亮介」

通信が入っていた。

「溝口さん無事ですか」

「俺は大丈夫だ自分の心配をしろ」

ケイトスは素早く切り返し、ミサイルで応戦する。

「CDC、こちらセイバー演習中にフェストムと遭遇。只今ケイトスが応戦中ファフナー部隊を要請します」

「こちらCDC今マークザイン・アハト・フュンフ・ジーベンが出撃、ポイントB―9へ誘導を」

「了解、溝口さん」

「聞いてた。交互に攻撃しながらポイントまで誘導するぞ」
「はい」

2機で交互に攻撃しポイントまで誘導してゆく、フェストムはどちらに攻撃すればいいのかわからず手当たり次第に攻撃している。

（よし、的が絞れず迷っているようだな。このままなら）

「亮介」

溝口さんの声に気がつくくとパターンで攻撃して来ていた攻撃がこちらに集中していた。辛うじてかわす

「振り切れ、亮介」

「くっそー」

捕まるセイバー。

「あなたはそこにいますか」

奴等が心に入ろうとしてくる。

（俺はここにいる、ここに…いるぞ）

「くくくく」

（なんだ…あいつらの同化が止まった）

「セイバーへの援護射撃間に合わんのか」

「ダメですここからの攻撃では間に合いません」

「マークザインが向かいます。行けるな一騎」

「ああ、行けるぞ」

「マークアハト・フუნフ・ジーベンは今現れたフェストムを近づけさせるな」

「あつ」

炎を上げて落下するセイバー

「亮介、脱出だ脱出するんだ」

「くっ、脱出レバー……ダメだ作動しない。爆発の衝撃でどこか部品がやられたか。なら脱出出来ないときの対策を思い出して。…海面にぶつかる。ここまでのか。クソつたれ」

海面に落下したセイバー

「亮介!」

溝口の叫びが青空に響いた。

第十六話 「祈り」

「集中治療室準備急いで」

千鶴さんの声が響く、医療スタッフが血相を変えて動き回る。

担架には、呼吸器をつけられた亮介が寝ている。

「亮介、しっかりして亮介」

私の声は彼に届かない。叫ぶことしか出来ない私。自分の無力さを呪った。

「恵、亮介くんはどうなの」

連絡を受けて慌ててて A l v i s にやってきた両親

「呼吸してないの…」

「そんな…」

母は泣き崩れ、陽気な父もこの時ばかりは神妙な面持ちになっていた。

「俺がついていながら、すみません」

亮介が上司として慕う溝口さんが、両親に頭を下げていた。

「あいつも覚悟はしていたはずだ、今は遠見さんの治療を信じて待とう」

「そうですね。わかりました」

私に近づき頭を下げる溝口さん

「君が恵ちゃんだよな、亮介から話しは聞いてる。すまない。俺がついていながらこのようなことになってしまった」

「大丈夫ですよね亮介、元気になって戻って来ますよね」

「…わからん。だが俺は亮介がこんなことでくたばるヤツではないと信じている」

変に誤魔化さず正直に言われ私の心はまたえぐられる思いだったが同時に同情して優しい言葉をかけない溝口さんをこの短いやりとりで信用出来る人だと瞬間思った。

少しして、佐喜さんもやってきた。

「亮介は無事なんですか。溝口さん」

「わからん。遠見先生の治療待ちだ」

それぞれの思いを抱き治療が終わるのを待つ5人

「お待たせしました。」

千鶴さんが集中治療室から出てきた。

「先生、亮介は大丈夫ですか」

「怪我はしているけど、命に関わる大きな怪我はないです。心拍も正常に戻りつつあります。ただ…」

「どうしたんですか」

「彼の精神的な問題なのか徐々に弱っていて、いつ事態が悪化するか検討がつかない状態です」

「そんな…」

メデイカルルームに移動した亮介を乗せた担架

両親と溝口さん達はA l v i sをあとにし、私一人になっていた。どれだけ強く手を握りしめても、彼の反応は返ってこない。

（亮介…死んじやいやだよ。約束したよね。必ず生きて帰るんだって、私信じてるよ）

「心配」

振り向くといつの間にか皆城兄妹がいた。

「総士君に乙姫ちゃん、…うん凄く心配」

「霧島先輩の容態は」

「命に関わる怪我はないみたいだけど、生きようとする力が弱ってるって千鶴先生が言ってたわ」

「そうですか」

「それは違うよ恵。亮介は今自分自身と闘っているの、彼は生きることが強く望んでいる」

「自分自身と闘う…」

「どういふことだ乙姫」

「亮介は今初めて亮介の持つ力と向き合う時が訪れた。その結果によつては我々は滅んでしまふかもしれない」

「なんだと」

「だから恵」

乙姫ちゃんの無垢な瞳が私をじつと見つめる

「貴女が亮介の帰る場所であげて。これは貴女にしか出来ないこと」

「……うん。わかった」

私は亮介の手をひたすら祈り握り続けた。

第十七話 「自答」

(ここは…確か俺は溝口さんの訓練を受けてて、フェストムに遭遇して落とされた…そうか俺死んだのか)

「ここは、生と死の入り口まだあなたはここにいるわ」

真つ暗な世界の中に少女が一人点在していた。

「皆城…乙姫」

少女はいつもと変わらぬ笑顔を見せる。

「俺はどうなっているんだ。生と死の入り口ってなんだ」

「あなたの身体は千鶴達のおかげで無事。だけどあなたに秘められた力があなたがこちらに戻ることを困難にしている」

「俺に秘められた力…」

「あなたの決断によつては、こちらに戻ることもあちらに渡ることも出来る」

俺の答えは明白だ。

「早く戻りたいしまだ生き続けたい」

「貴方がそう答えてくれて嬉しい。けど貴方の思いが力を上回るかは別。貴方の力と向

き合い受け入れて亮介」

皆城乙姫の姿が消え代わりに緑の結晶が現れる。

(それに触れることで、貴方と貴方の力との対話が始まる)

皆城乙姫の声が頭の中で響く。その結晶に手をかざすとさらに深い暗闇へと吸い込まれた。

(あなたはそこにいますか)

声だけが聞こえる暗闇の世界

(フェストムのいつもの語り口か…)

「俺はここにいますぞ」

(それは、本当にあなたですか)

「なに」

これまで無かった返しに俺は戸惑った。

(あなただと思っている存在は本当は私ではないですか)

「…どういうことだ」

(あなたは他の私と何度も1つになる機会があった。それを拒んだ)

「当然だ、俺は俺として生きたい」

(本当にあなたが)

「…」

（あなたの力で本当に拒んだ）

言葉を返せない。そう何度も経験したフェーストムの同化現象。今だに何故同化をすることが無かったか疑問に思うことがあった。

（あなたはわかっているのでは、本当はあなたが拒んだのでは無く、別の存在が拒んでいたと）

「それが、お前だというのか」

（そう…。あなたの中に組み込まれた私が拒み続けた。やはりわかっていた。本当に拒んでいたのがあなたではないと）

「お前の言葉のままいくとそういう答えにたどり着くだけだ」

（あなたは私に感謝する必要がある。私のおかげであなたはまだここにいる）

「仮にお前のおかげで俺が存在出来ているとして、お前は今俺に話しかけて何がしたい」
（あなたが私という存在を認識し、あなたの存在が私のおかげであることを理解した。ならあなたの代わりに私があなたでもいいでしょう）」

「俺を取り込みお前が俺になるのか」

（そうこれからは私があなたである）

突然もの凄い量のイメージが頭の中にさらに景色として映しだされた。

「なんだこれは…」

(助けてくれ。まだ生きたい)(この子だけは、この子だけは見逃して)(よくも俺の家族を)(貴様らへの報いは必ず○○が…)(怖いよ、助けて…)(ウワン。パパ、ママどこ)(殺す、クロス、コロシテやる)(憎いこの世の全てが…憎い)

様々な負の感情が俺の身体を突き抜ける。

「やめろ。やめろー」

余りの恐怖に頭を抱え、目を閉じる。しかし、イメージはそれでも眼下に広がり、負の感情は俺にまとわりつく

(これは我々が1つになったモノ達の『感情』というらしい)

「そんなことはわかってる。なんのつもりだと聞いているんだ」

(我々と1つになるのを拒むモノ達には、こういった『感情』を肌で感じさせることで1つになることを受け入れるらしい)

「成る程な、確かにこれは…堪える」

だんだん意識が遠のくのが自分でもわかった。これは明らかに同化じゃない。俺の存在そのものが消えようとしている。そんな気がした。

「俺は…まだ生きるんだ」

(その役目は私がしよう。お前は安心して私に役目を引き継げばいい)

(ダメだ…俺がオレでなくなる…いままでぶじだったのはほんとうにオレのちからではなかったのか…)

(…すけ。…うすけ)

(なんだ…だれかがオレをよんでいる。あれは)

微かに見える視界、その先には一輪の花が咲いていた。

(これは…『ブルースターの花』なぜこんなところに)

僅かな気力を振り絞り手を伸ばす…届いた。溢れる想い。

(貴方のこと信じてるから亮介。)

(……………め・ぐ・み。恵。恵)

(…なるほど、これがあなたを支える力。私以外にあなたに力を与える存在。興味深い)

(…俺はまだ存在しているのか)

気がつくとも五体満足で意識もハッキリとしている。

(気が変わりました。今はあなたがあなたでいることを認めましょう。次にこちらに来

たときには、私があなたの役目を引き継ぐとしましょう)

声が響かなくなる。目線の彼方に一筋の光が射している

(おかえり。こつちにおいで)

光へ向かい進むと、目の前に天井が見える。呼吸器をしている。誰かが手を握っている

る。

「めぐみ……」

彼女は俺を見て大粒の涙を流している。

「亮介。おかえり、戻ってくるって信じてたよ」

あー。君か俺を救ってくれたのは

「恵ありがとう」

首を傾げる恵。呼吸器が邪魔で伝わっていないようだ

「ちよつと亮介。まだ安静に」

「恵ありがとう」

気がつけば、恵の唇を奪っていた。

第十八話 「告白」

呼吸器を外す亮介

「ちよつと亮介、まだ安静に」

「恵ありがとう」

感謝のあとには、唇と唇が重なり合っていた。

(ちよ、えつ。私達キスしてるの)

動揺して思わず突き飛ばしてしまう。

「どうしたの恵ちゃん」

突然鳴り響いた音に慌てて千鶴さんが病室へやってきた。

「亮介くん。良かった気がついたのね」

「ええ、はい、まあ」

「凄い大きな音がしたけど二人とも大丈夫」

「大丈夫です。失礼します。千鶴さん亮介お願いします」

一目散に病室をでる。胸の高鳴りが止まらない。

「なにかあったの」

「いや、なにもないですよ、ウツ」

「無理しちやダメよ。安静にしてなきや」

「はい」

息が乱れている。病室を出てから走りっぱなしだったから無理もない

「どうしたの恵」

顔を上げると家に戻っていた。

「亮介が…」

「亮介くんになにかあったのかい」

「…意識を取り戻したよ」

「ほんとうにかい、お父さん。亮介君が意識取り戻したって」

母は父を呼びに急いで居間に戻る。

（亮介どうしたのかな。なんで突然…）

「どうした恵」

「ちよつと疲れちゃった。部屋で休んでるね」

気づけば母が夕食が出来たと部屋まで起こしに来ていた。

「なにかあったのか」

夕食中に父が尋ねてきた。私は慌てて作り笑いをした。

「なんで」

「さつきから上の空だし、亮介に会いに言ったらやたらお前の心配をしていたぞ。危険な目にあつたのは自分だというのに」

「そんなことないよ、どうせ千鶴さんに私が付きつきりだったとか聞いて申し訳なく思つたんじゃない」

「ならいいが…」

普段お気楽そうな父だが、人の悩みや考え事を見抜くのは妙に冴えている。この時もそうだ。私が別のことを考えていると察していたのだろう。

「明日も亮介のお見舞い行つてくるね」

その夜私はなかなか寝つけなかった。

「椎名先輩どうかしましたか」

私が病室の前で突っ立っていると総士君に話しかけられた。

「あれ総士君どうしたの」

「乙姫が霧島先輩と話したいと病室に入っていたので、まあ付き添いです」

窓を覗くと乙姫ちゃんが亮介と話していた。

「なに話してるのかな」

「乙姫曰くカウンセリングのようなのですが」

「そうなんだ…」

「恵だ、いらつしやい」

扉が空き乙姫ちゃんが立っていた。

「亮介が待つてるよ恵」

「えっ、うん」

「さっ行こ総士」

乙姫ちゃんが総士君を強引に押し進める

「もろいいののか乙姫」

「いいのいいのじゃあね恵」

「バイバイ乙姫ちゃん…」

（病室ってこんなに入りにくい場所だったっけ）

「恵か。毎日悪いな入れよ」

「うっ、うん」

隣に座ったものの、なかなか話しを切り出せず、静かな時が流れる。

切り出したのは亮介だった。

「俺が気を失ってる間ずっと隣にいてくれたんだってな。ありがとう」

「うん、調子はどう」

「今からでも退院出来そうだな」

「なら良かった」

「昨日のことだけだな」

もうそこに話しを持ってくのかと内心ドキドキした。

「どうしたの」

「俺、向こう側に行きそうだったんだ」

「えっ」

「同化される人の苦しみや憎しみをたくさん見て肌で感じとった。余りに強大過ぎて飲

み込まれるところだったんだ」

「…」

「意識が朦朧として自分がいなくなりそうになったそんな時に声がして声の方へ進むと

『俺を信じてる』と言ってくれるお前の声だった」

自然と涙が溢れた。

「恵の声と想いが俺を俺という存在を取り戻してくれた」

「うん……うん」

亮介が私の身体を抱きしめる。そこに最早恥じらいは無かった。

「こんな無鉄砲で危なっかしい俺だけど、これからもずっと一緒にいてくれないか」

「…キス」

「えっ」

「私、あれが初めてなんだからね。初めてがあんなに唐突な感じなんて嫌」

「…」

「これからもずっと一緒だよ亮介」

「ああ…」

昨日よりもしつかりとした口づけを交わす。そして私達は家族を越えた関係になった。

第十九話 「危機」

俺はまたブルクでファフナーを見上げていた。

「どうしたんだい亮介君」

「手塚さん、いえこういう時に乗れたらと思つて見てただけです。」

「君が退院して1週間で状況が目まぐるしく変わったね」

この時、A i v i s は1機のファフナーが大破し、2人のパイロットを失つていた。

「保さんは」

「おやつさんなら心配ないよ、ただご子息が亡くなったからな気持ちの整理が必要なんだよ」

「そうですよね」

おじさんやおばさんそして恵…もし誰かを失つた時俺は俺でいられるのか不安になつた。

「おやつさんの分も皆で力を合わせ頑張るぞ」

手塚さんは自分を鼓舞するように持ち場に戻つた。

「霧島先輩」

振り向くと一騎がいた

「目大丈夫か」

「まだ見えてます大丈夫です」

「また試しますか」

「いや、乗れないことはわかってる。ただ乗れない自分の無力さに悲観してるだけだ。もうすぐなんだろう総士を助ける作戦」

「はい。助け出してみせます」

「頑張れよ」

声をかけることしか出来ない自分が情けなくなつた

「どうしたの亮介」

俺は皆城乙姫を探し尋ねた。

「作戦前にすまない」

「大丈夫。これは皆にとつても大事なことだから」

「俺に眠る力をコントロール出来るようになれば、俺は乗れるのか」

「わからない」

意外な答えに驚いた。

「君にもわからないことがあるんだな」

「私は神様じゃないから。でも確かなのは支配とかコントロールとかそう言った立場をつけてはいけないということ」

「立場をつけない…。つまり対等につてことか」

「そう。今の貴方はその力には敵わない」

「…わかつてる」

「それを受け入れて。焦らずゆっくり一つになるの」

「わかった。ありがとう皆城乙姫」

「どいたしまして。あと私はもう貴方に近付けなくなるかもしれない」

「何故だ」

「私が貴方の力を拒否する力がもう…あまり残ってないの」

「そうなのか…」

幼い身体に刻まれた宿命が彼女の生命の限界を伝えていた。

「ありがとう。今まで」

「貴方の未来が希望に満ちることを願ってるね亮介」

この笑顔が俺が最後に見た皆城乙姫だった。

「亮介、どこで油売ってたんだ」

「すみません」

俺達防衛部隊には、万が一の事態を想定して島の各ブロックで待機する指示が出てた。

「基本的に二人一組で行動することを忘れるな。まずは将陵と陣内……」

（受け入れ一つになるか……。どうすれば）

「亮介。聞いているのか大丈夫か、もう一回入院しとくか」

「すみません。大丈夫です」

「お前は俺とペアだいいいな」

「はい」

俺は溝口さんと一緒にCブロックエリアを担当していた。

（家が近いな）

「でえ、どこまで進んだんだ」

溝口さんがニヤニヤしながら俺に尋ねてきた。

「なんのことですか」

「とぼけんなって、チューしたんだろ恵ちゃん」と

「なっ、なんで」

「俺の情報網を甘くみてもらっては困るな」

「別に進展だなんて」

急に顔が真面目になる溝口さん。

「俺達はいついなくなるかわからん。パートナーとして恵ちゃんを選んだなら。早めに色々済ませとけよ」

「…はい」

ちやうど総士を救出する作戦の開始が合図された。

「マークザイン、ウルドの泉にてコアである皆城乙姫とクロッシング…」

「順調のようだな」

「ソロモンに反応」

「敵さんの御出座しか」

「隊長なんかヤバイです」

Nブロックを担当している隊員から震えた声で通信が入る

「出撃したマークアイン、ベイバロン、マークジーベンが瞬殺されました」

「なんだと、敵は」

「敵はザルヴァートル・モデルのようです」

「それって」

ザルヴァートル・モデル：それは一騎の乗るマークザインのような島のノートウン
グ・モデルを圧倒する力を持つファフナー

「ウルドの泉のスカラベ型がザルヴァートル・モデルに反応して急激に活動を始めた。」

「総員退館せよ」

真壁司令の緊迫した声が通信から伝わってくる。

「なにがどうなってやがる」

「隊長。スカラベ型が竜宮島全土に増殖しています」

「なんだと」

各エリアからスカラベ型増殖の報が続々と入る。

「いいか、島民の避難が最優先だ撃退出来るならソイツに攻撃して構わん島民の避難と自分達が生き残ることを最優先に行動しろ」

「ここにもスカラベ型が出てきた。触手のようにウネウネとももの凄いスピードで増殖する。」

溝口さんと共にライフルで迎撃しながら島民の誘導を始める。

（恵、おじさん、おばさん…）

「亮介、あっちの方を見てこい」

溝口さんの指した方には俺達の家があった。

「でも、溝口さん」

「俺は大丈夫だ、だがなるべく早く確認してこい」

「ありがとうございます」

急ぎ家に向かう。(皆、無事でいてくれ)

「お父さん、お母さん急いで」

恵の声がする。駆けつけるとおじさんが拳銃片手に二人を守りながらこちらに向かっていた。

「皆急げ」

「亮介」

俺を見て安堵した恵、しかし後ろからは魔の手が勢いよく彼女を襲おうとしていた。

第二十話 「訣別」

「お父さんどうなの」

総士君を助ける作戦が始まり、私達家族は居間でラジオを置きCDCの周波数に合わせて状況を聞いていた。

「今のところは順調のようだな」

「皆城くん大丈夫なのかね」

「生きてはいるってかなり弱ってはいるみたいだけど」

「亮介くんは」

「万が一に備えて島内を巡回するんだって」

母と皆の心配をしていると、父の血相が引いていくのに気がついた。

「お父さん、大丈夫」

「お前達今すぐ避難の準備をしろ」

こんなにも固い表情の父は初めてだ。

「急げ。CDCがフェストムにやられた」

父の言葉に動揺が隠せない。竜宮島の司令部であるCDCが落とされた…

「活動の止まっていたフェストムが急に活動して各エリアで被害が出ているそうだから直に……」

突然触手のようなフェストムが家の床を突き破った。

悲鳴をあげる母、父は寝室から拳銃を取り出し発砲するが、当たり前のように効いていない

「外へ出る急げ」

慌てて私は母と外に出ると外は触手は外で触手だらけだった、飲み込まれていく人々
「走れ」

父の荒れた声が響く。私達は前だけを見てひたすら走った

「お母さん頑張って」

母はかなりつらそうだが、父は私達を気にしながら後ろで鼓舞してくれている。

「恵お前は先に行って助けを呼んでくるんだ」

「二人を置いていけないよ」

「俺達なら大丈夫だ母さんは俺が守る。だからお前は助けを呼んで来てくれ」

「……わかった」

私は後ろを振り向かず人を探した。しばらく走ると人影が見えた

（人だ……良かった助かる）

「助けが来てるお父さん、お母さん急いで」

人影が私の声に気がついたのか近付いてくる

「皆急げ」

助けに来てくれたのは亮介だ。

「亮介」

安心して思わず気を緩めてしまう。

「恵危ない」

亮介が必死にこちらへ走ってくる。振り向くと触手が目の前に迫っていた。怖くて

足が動かない

(ああ、飲み込まれる)

おもわず目つぶると勢いよく誰かに押された。

「お父さん」

父に触手が襲いかかるその時

母が瞬間父の前に立った

「よせ、お前」

「お母さん」

「…」

…母は飲み込まれてしまった。

目の前の一瞬の出来事を受け入れられない。母が消えた自分のせいだ…
「くっそつたれー」

僅かに遅れて亮介が追い付いてきた。だが私も父も動けないでいた。

「恵、おじさんしつかりしろ」

亮介の呼びかけにも上の空の二人

「亮介、お母さんがフェストムにやられちゃった」

「間に合わなかった。ごめん、だけど切り替えて立ってくれ、まだそこにいるんだ。おじさんも」

増殖が分岐し再びこちらに襲いかかる

（お母さんごめんね。一人にはしないよ、今行くから…）

私達を襲う…：はずのフェストムは私達に覆い被さる寸前で止まり徐々に引いて別の道で動き出した。

「うっ」

呻き声を出す亮介。身体から緑の結晶が次々とで出す

「そんな、同化現象なんで」

「これが力の代償か…まだ俺はここにいる」

結晶は瞬く間に砕けた。

「亮介大丈夫なの」

「変なこと考えるなよ」

「えっ」

「おぼさんが庇ってくれたことを無駄にするようなこと俺が許さないからな」

「うん…。お父さん行こ」

「ああ…」

総士君救出作戦は失敗。ファフナー及びパイロット1名死亡。出撃したファフナーは大破。真壁君は同化現象が末期まで進行、島民は母を含めて3／1が死傷かかってない絶望が竜宮島を襲った。

第二十一話 「紅音」

ザルヴァートル・モデルの襲撃によつて大損害を被つた竜宮島。復旧に力が注がれてはいるものの一番の問題は各々の心であつた。

皆がこの先の行方に不安を抱いていた。

「じゃあ、行つてくる」

「気をつけてね」

復旧作業を手伝うため家を後にする。おじさんはシヨックで寝込み、恵も氣丈に振る舞っているがボロボロなのが見てすぐわかるくらい疲弊している。

俺はこんな時こそ傍にいてあげたいが、彼女を励ます言葉もなんと声をかければいいのかすらわからず。

「島のため」という真つ当な理由を口実に距離を置いて見守るしか出来なかつた。

（恵はパートナーとして俺を支えてくれてるのに、俺は彼女に何もしてあげられないのか…）

「亮介、ちよつと休んどけ」

一緒に作業していた溝口さんが俺を気にして声をかけてくれた。

「でもまだ全然」

「いいから、ここんとこ色々詰めすぎてるからよ。必要になったら呼ぶから」

「ありがとうございます」

作業現場の近くで休んでいると

「霧島先輩どうしたんですか、こんなところで」

遠見真矢に声をかけられた。隣には松葉杖をつく一騎もいた。

「復旧作業の手伝いだ。今休憩もらって休んでる。二人こそどうしたこんなところで」

「近藤君の様子を見に行くんです。彼お母さんが亡くなってから家に引きこもってるみ

たいで」

「そうか」

「恵先輩の傍に居なくていいんですか」

「…どう接したらいいのかわからないんだ。なんて言葉をかけたらいいかも」

「好きな人が辛い時に傍にいてくれる。それだけでその人には救いになると思います

よ」

「何故そんなことが言える」

「…私がそうですから」

一瞬一騎を見る遠見。一騎は全く気づいてないようだ。

「俺も、今だからこそ椎名先輩の隣にいるべきだと思います」

「…二人とも、ありがとう」

俺は駆け足で家に戻った。玄関の前に立つと誰かのすすり泣く声が聞こえた。

(恵…)

そつと部屋の扉を開ける

「誰」

「ただいま」

溢れる涙を必死に拭う恵。

「亮介…どうしたのまだ作業中なんじゃ」

「休憩中なんだ」

「そう…」

俺はそつと恵の頭に手を置いた

「泣いていいんだぞ」

そんなこと言われると思ってなかったと言わんばかりに泣き顔になる。

「泣いていいから、人は泣くことが出来るんだ…きつと」

「お母さん、私達を庇ったから死んじやったの」

「うん、俺もそこにいた」

「私があの時気を緩めなかったらお母さん死なずに済んだかな」

「わからない。俺がもっと早く皆を見つけてたらまた違ったかもしれない」

「私、私…」

「無理するな今はたくさん泣いとけ、ずっと隣にいるから」

「亮介」

俺の胸に顔を埋める恵、これまで抑えていたものを吐き出すかのように大泣きしている。

俺はただ胸を貸し頭をひたすら撫でることしか出来なかった…

恵が泣き疲れて俺の胸の中で寝てしまった頃、溝口さんからある場所に来てほしいと連絡を受けた。

「来たか亮介」

そこは竜宮島防衛部隊の戦闘機格納庫だった。

「どうしたんですか」

溝口さんと陣内貢さんが待っていた。

「簡潔に言おうと、フェストムと対話をする事になった」

「おやっさんどういふことですかそれ」

俺よりも陣内さんの方が動揺していた。

「あるフェストムが『真壁紅音』を名乗ってこっちに接触してきた」

「『真壁紅音』って確か…」

「そうだ。史彦の妻であり一騎の母親にあたる人だ」

「確か紅音さんはもう…」

「ああ、フェストムに同化されちゃまって。そいつは俺達に有益な情報を持つてるらしく接触を求めてきた。史彦はこれに乗るつもりだ。お前達二人には万が一に備えて戦闘機で待機しいつでも出撃出来るように準備をしてくれ」

「了解」

出撃待機する二人。

「そのフェストムはなにがしたいんだらうな」

通信越しに陣内さんが呟いた。

「なにがしたいんでしょうね」

その時、胸が急に苦しくなった。呼吸が乱れる

「どうした亮介」

「急に息苦しくなってきました」

「大丈夫か」

「大丈夫…」（なんだ頭まで痛くなってきた、身体も熱い…なんだと）

急に同化現象が始まった。どんどん緑の結晶が俺の身体を包もうとする。

（おい、人の身体でなに勝手に動き回ってやがる。大人しくしてろ）

暫くして首まで被われたところで結晶は砕けた。

（なんだ…コイツ誰かと接触していた…。誰と…）

「おい亮介本当に大丈夫か」

陣内さんは心配しすぎてと声をかけてくれていた。

「すみません陣内さん大丈夫です」

「おやつさんから発進指令だ、フェストムが現れた。俺達で出来るだけ…なんですって」

「どうしましたか」

「真壁紅音を名乗るフェストムと甲洋君が敵を追い払ったそうだ」

真壁紅音を名乗るフェストムにもたらされた『情報』により皆城総士が北極で囚われていることがわかり、同化現象を抑える新たな方法がわかる。これによりこれまでよりも同化現象に襲われるリスクが格段と下がった。

更にファアナーの機体性能も大幅に向上し、それまでは出来なかった島外でのファアナーの作戦行動が可能となった。

Alvis は皆城総士を奪還するために人類軍が実行するという北極ミールの攻略

作戦への参加を決めた。

彼女よりもたらされた一筋の光は、我々にとって微かな希望となり竜宮島の進む道を示した。

第二十二話 「感謝」

「亮介…本当に行くの」

竜宮島のファフナー部隊を北極へ派遣するための準備が急ピッチに進められていた。

「ファフナー部隊を派遣する輸送機に乗るだけだから心配ないさ。」

「でも…」

「大丈夫だ必ず帰ってくる」

「決意をしているところ悪いが今回はお留守番だぞ亮介」

家の店に溝口さんが訪れて来た。

「そんな」

「外の世界を知りたいという気持ちもわからんでもないが、お前にはファフナー部隊不在の留守を守ってもらいたい。頼めるか」

「わかりました」

了承はしたが亮介の顔は不満げだった。

「コア曰く敵は北極の決戦にほぼ全ての戦力を割くから、島が襲撃を受ける心配は無いだろうが。よろしくな」

その日は過去最高の勢いで家の店が繁盛した閉店間際の夕暮れ時だった。

「今日のお客さんの入りは凄かったな」

上機嫌に店じまいをしていると人の気配がした。

「いらっしやいませ」

上機嫌な勢いそのまま応対すると少女が笑っていた。

「こんばんは。恵変なの」

「乙姫ちゃん。こんばんはどうしたの」

「この目でしつかりとここを見ておきたかったの」

「そういえば乙姫ちゃんがこの店に来るの初めてだね」

「うん…。優しい記憶を沢山感じるいいお店だね」

「島のコアにそう言ってもらえると嬉しいな」

ゆっくりとじつくりと店内を見て回る乙姫ちゃん。

「恵のおススメのお花はどれ」

「乙姫ちゃんに合いそうな花か…」

店内の花達を見渡すと、一つの花に目線が止まった。

「これかな」

「クレマチスの花…いい花だね」

「よかった」

「じゃあクレマチスとカンパニュラとミヤコワスレをちょうだい」

「クレマチスとカンパニュラとミヤコワスレね…乙姫ちゃん」

私の動揺した顔に少女は優しく微笑んでいた。

「そんな顔をしないで恵」

「だって乙姫ちゃん」

「人はいつか必ずその時を迎える。貴女のお父さんも貴女もそして愛する人も…」

「まだ乙姫ちゃんこの世界に生まれてきたばかりじゃない。それなのになんで」

「この島のミールが『生と死の循環』を学ぼうとしている。私が体験した全てをミールに伝えなければいけないの」

「そんな…他の方法はないの」

「それ以外の方法は島のミールが誤って学んでしまつて、島に生きる全ての命が死んでしまうの。ありがとう恵。貴女のように誰よりも他者を愛し心配出来る人が彼の側にいるから、私は島に命を還すことに全てを捧げることが出来る」

「乙姫ちゃん…」

「泣かないで恵。私の身体は無くなつても、島の皆が私のことを覚えていてくれる限り

『生き続ける』ことは出来るから」

少女は3種の花を両手でしっかりと持って私の店を後にした。

数日後『蒼穹作戦』と名付けられた竜宮島の命運を懸けた作戦が決行された。

第二十三話 「明日」

フアフナー部隊を乗せた輸送機が竜宮島を出発した。

「勝てるのかな、俺達」

「大丈夫だ仲間を信じろ亮介」

「私達も万が一に備えて警戒しとかないとね」

飛び立つ輸送機を眺めながら作戦部隊が帰る島を守る決意を固める。

「あの二体、現れると思うか」

「奴等に依存しちゃダメだ。俺達でこの島を守るんだ」

「おつ、さつきまで弱音吐いてたやつが強がっちゃって」

「強がってなんてないですよ陣内さん」

「どうだか」

高笑いする陣内さん。

「二人とも…任務に集中してくれないかしら」

後ろから佐喜さんの威圧感が迫ってきた。

「おい落ち着け将陵」

「佐喜さん話せばわかる…」

「CDCより防衛部隊へ。フェストウムが竜宮島近海に出現、防衛部隊は直ちに出勤してください」

「さあ、行くよ二人とも」

俺と陣内さんが戦闘機で先陣を切る。

「二人とも、フェストウムの行動目的がわからないから気をつけて。CDCからは攻撃的な意思を見せない限り警戒態勢のまま待機ということよ」

「俺達のこの警戒態勢がヤツを刺激するって可能性は無いですかね」

「…なんとも言えないわ。でも絶対先に手を出しちやいけないから」

「了解」

睨み合いが続く。

「あなたはそこにいますか」

「うっ、同化しようとし出した」

「陣内さん」

陣内機の飛行ペースが徐々に乱れ出した

「貢、しっかりして貢」

「心に入ってくる…」

気づけば俺はフェストウムにミサイルを撃ち込んでいた。

「亮介」

「すみません。でもこのままだと陣内さんが…」

「サンキュー亮介助かった。CCCへ敵から同化による攻撃を受けた。反抗する許可を」

「…許可が出たわ、でもどうするの私達の通常兵器ではあいつにダメージすら与えられないのよ」

「あいつのコアに集中攻撃すれば…」

「どこにそんなのがあるんだ」

「それは…」

（私が力を貸しましょう）

頭に声が響くと痛みとともに緑の結晶が俺の身体から出てきた。

「こんな時に」

「なに…フェストウムが苦しんでいる」

佐喜さんの声を聞き目を向けるとフェストウムがジタバタと暴れながら、胸部付近から緑の結晶体が顔を出した。

「なんかそれっぽいものが出てきたぞ」

「二人とも集中砲火」

ありつたけの火力をぶちこむ、気がつけば身体から出ていた緑の結晶は消えていた。

集中砲火を続けるが流石はフェストウム。通常兵器では効いているのか全くわからないが微かに露出した緑の結晶体が傷ついているのがわかった。

しかし弾薬は尽きそうだ

(やれるのか)

パリーン：フェストウムの結晶が割れ黒いワームホールと共にフェストウムは消えた

「おい、やったぜフェストウムを俺達で倒したぞ」

「CDCから：フェストウムの消滅を確認したそうよ」

竜宮島防衛部隊初のフェストウムの討伐。俺達は歓喜に沸きCDCも安堵の表情を浮かべていたらしい

その3時間後溝口さん達の輸送機が島に戻ってきた。

「なに、島の火器だけでフェストウムをやった!？」

「ええ本当にですよおやっさん。あとでCDCに確認してみてくださいよ」

陣内さんが珍しく今だにはしゃいでいる。

「お前らよくやったな」

「どうでしたか北極は」

「まさに決戦って感じだな、一騎達は無事上陸したが作戦が成功するかは、あの4人次第ってところだな」

「次は補給物資を運んで、最後に迎えに行くんですよ」

「おう、そうだ。だが亮介それでもお前の外デビュ―はお預けな、討伐したって言うても、ありつたけの火力を使ってようやく1体だ。下手に戦力を連れ出してあいつらの帰る場所が無くなったら話にならんからな」

「そうですね…」

不満はあったが、納得するよう自分に言い聞かせた。

「溝口さん発信準備出来ました」

「わかった。今行く。だから亮介、島を頼んだぞ」

「わかりました」

輸送機は再び北極へ向かった。

しばらくして恵が防衛拠点を訪ねてきた。

「お前危ないだろ、こんなところに来るなよ」

「亮介…乙姫ちゃんが」

「…知ってる。もうすぐいなくなるんだろ。俺は行けない」

「うん。ここを守るのが今の亮介のやることだもんね、ごめん邪魔しちゃって」

「亮介送ってやんな」

「でも…」

「俺達が心配なら早く恵くんを安全な場所へ送り届けるんだ」

「わかりました」

ゆつくりとした足取りで家まで歩く

「皆城乙姫と約束したんだ。俺達はもう顔を会わすことは出来ないって」

「どういうこと」

「俺に眠る力が皆城乙姫を取り込もうとするらしい。今の皆城乙姫では俺の力には抗えないから会えないと本人から言われた」

「そうだったんだ…亮介の力って」

「わからない。その俺に眠る力ってのはまだ未知の力過ぎてよくわからない」

（それらしきモノと遭遇はしたけど…なんて説明すればいいか）

「私ね、乙姫ちゃんに頼まれたわ、亮介をよろしくって。その力と関係あるのかな」

「…例えその力があるうと無かろうと俺達の気持ちは変わらないだろ」

「うん。もちろん」

あつという間に家に着いた。

「亮介気をつけてね」

頬に軽く口づけをし俺は俺の戦場に戻った。

その後フェストウムは竜宮島の近くに現れることは3回あったが、どの群れも島を襲うことは無かった。

そのたびに俺の身体から緑の結晶が出てはきたが…

溝口さんの輸送機がファフナー部隊を回収する3回目の出発をした時に

（亮介ありがとう。私還るね）

「皆城乙姫…そうか、往くのか。寂しくはないか」

（大丈夫。芹ちゃんや史彦や千鶴…皆が私を見守ってくれてる）

「なら良かった。ありがとう。君のおかげで俺は『俺』という存在に少し自信を持てるようになった。」

（感謝するのは私の方、亮介は辛い立場の中たくさん悩んで、私が考えられるもつとも明るい可能性に進む道を進んでくれた）

「俺の判断は間違いじゃないと」

（うん。これからも貴方にしか出来ない辛い出来事がたくさん起こるかもしれない。でも貴方は独りじゃない一緒に時を歩んで支えてくれる人がいる。その人達とこれから

も乗り越えて)

「わかった。島のコアの導きを裏切らないようベストを尽くすよ」

(…初めて亮介が私を島のコアとして見たね)

「そうかな」

(うん…。私の存在はこの世界はから居なくなるけど私の存在はこの島と『私が居た』と記憶に刻んでくれる人達がいる限り永遠に生き続ける。また逢おうね亮介お互いの信じる未来で…)

「ああ、また逢おう」

「亮介どうしたのさつきからブツブツ一人で」

「えっ、ああ皆城乙姫が島に命を還しました」

「そう。島のコアが…」

「どうなるんだこれから」

「皆城乙姫曰く、新たなコアが生まれるそうです」

「そう…。てか亮介、島のコアとそんなに親しかったのね」

「えっ、そうですね。そういえば」

「CDCより報告、ファフナー部隊を回収し輸送機が島に戻ってくるってさ」

作戦の成功に喜ぶ周り。

「けど、マークザインと総士君が行方不明みたいだ」

一瞬で鎮まりかえる

(なにやっつてんだ一騎、総士早く戻ってこい)

(彼等は私達の世界にいるようですね)

(お前…さつきはありがとうな助かった)

(貴方に感謝されるとは思いませんでした)

(フェストウムのコアが出てきたのも、それ以降フェストウムが襲って来なかったのも

お前のおかげだ)

(理解しているようですね)

(約束だったな同化しろよ)

(…)

(どうした)

(もう少し貴方という存在を見ています)

(いいのか)

(ええ貴方という存在は実に興味深いですから…)

(そうか…ありがとう)

(…彼がこちらに戻ってきます。迎えてあげなさい)

「CDCより報告。竜宮島に接近する機体あり、機体コード：マークザイン」

「よし。よく戻ってきた一騎」

再び歓喜に包ませる周囲、すぐにマークジーベンが救出に向かい蒼穹作戦は終了。

皆城総士の奪還には至らなかつたものの、死んではないとのことでもまだ希望があると
いうことが後日わかつた。ファフナーパイロット及びファフナーは一騎の失明があつ
たがそれ以外は無事帰還。

絶望に落とされる結果が多かつた中、今回は希望が持てる成果であつた。

そして最大の成果はフェストウムの起点となつていた『北極ミール』の破壊に成功し
たことであつた。

これによりフェストウムの襲来は無くなるだろうとA l v i sは判断

擬装鏡面を展開し竜宮島は勝ち取つた平和を嘯み締めることの出来る日々へと向
かつていった。

蒼穹のフアフナー HEAVEN AND EARTH

第二十四話 「穏やかな日々」

北極での決戦『蒼穹作戦』から2年が経った。

竜宮島は世界から姿を隠し、穏やかな日常を過ごしていた。

「ありがとうございます。おじさん」

「どっ、どういたしまして」

「ありがとうございます」

ひきつった亮介の顔に思わず笑ってしまう

「おじさんって俺はまだ二十歳も迎えてないんだぞ」

「子どもからしたら私達なんて皆そう見えるんだよ」

「そういうものか」

この2年で亮介が家の手伝いをよくしてくれるようになった。

本人は最近平和になって訓練の量が減って暇になったからと言っているが、どんな理由であれ彼が『力』以外の事に興味を持ったことが嬉しかった。

「お疲れ様。休憩しよっか」

「今日は午前中にしてはお客さんたくさん来たな」

「そうだね。お昼にしょっか」

「おじさんは」

「お父さんは漁師仲間の人達と呑んでる」

「じゃああそこ行くか」

店を休憩閉めして私達は喫茶『楽園』にお昼ご飯を食べに行った。

「いらつしやいませ、あつ霧島先輩と椎名先輩」

「こんにちは真矢ちゃん今日も好調のようね」

「もう大変です、椎名先輩手伝ってください」

「頑張つて真矢ちゃん。注文いい」

「どうぞ」

『「一騎カレー」と「一騎コーヒー」と「一騎ケーキ」亮介は」

『「溝口丼」と「一騎コーヒー」』

「霧島先輩すみません。溝口さん今出前で店を離れてるんですよ」

「そうなのか、残念じゃあ俺も『一騎カレー』で」

「はい。お待ちください」

店内には中学校の生徒会一同がいた。

「もう。忙しいんだから学校でやりなよ」

「生徒会活動は全員でここでやる決まりだ」

「会長の近藤君がいらないじゃない」

「生徒会は副会長の私に一任されている」

「賑やかね」

「こういうのいいな。真壁調子はどうだ」

「明るい場所ならまだ見えるのでまだ大丈夫です」

「そうか。なら良かった」

「うん。そろそろ行こうか、祭りの準備あるし」

「大変、予約のお花まだまとめてない」

「急ぐぞ恵。ごちそうさまでした。溝口さんによろしくな真壁、遠見」

急いで家に戻りお盆祭りの準備に取りかかる

日が暮れる頃、無事準備を終えた

「なんとか間に合ったー」

「よし。じゃあ俺配達してくるから恵は祭りに行く準備してくれ」

「わかった。よろしくね亮介」

祭りの音が鳴り始めた時、亮介が配達を終えて戻ってきた。

「お疲れ様亮介。ありがとう」

「…良い浴衣だな」

「そう」

「恵の良さをより引き出して」

「ありがとう…」

恥じらいながらお互いの手を繋ぎ祭りへと赴く

ボール搦いやわたあめを食べたりお盆祭りを満喫する。今年もりんご飴をたくさん食べた。

そして灯籠流しの時がきた。

「今年もちやんと流せたね」

「ああ」

「この2年でよくやく亮介の気持ち少しわかったんだよね」

「恵」

「亮介が灯籠流ししなくなかった気持ち…今なら良くわかる」

「うーや、まにあつたな」

「ちよつとお父さん、ペロペロじゃない。あれだけ程々について言ったのに」

「2人ともラブラブな時間は過ぎせたか〜」

「ちよつと止めてよ恥ずかしい」

「なんだ〜お前らの仲を皆知らないわけじゃないからいいじゃないか〜」

「お父さん」

「おじさん酔うと相変わらずだな」

「亮介笑いごとじゃない」

ウーン…

突如なり響いた警報。忘れかけていた世界が再び目の前にやってくる音だった…。

第二十五話 「忘却の来訪者」

「まさか、フェストウムなの」

鳴り響く警報、恵の表情が固くなる。

「あれを見ろ」

声の先には一隻の船がこちらの岸に流れ着こうとしていた

「全員。岸から離れろ」

「急ぎ移動する島民達。」

「亮介聞こえるか。急いで準備しろ」

「了解」

無線が入りその場を離れようとする、服を引っ張れる

「大丈夫。すぐ戻れるさ」

「気をつけてね」

「遅くなりました」

「ちようど作戦会議だこっちに来い」

「CDCの報告では船は人類軍の巡航艦で岸に上陸した直後に真壁一騎が船に向かって走り出し。それを遠見真矢と羽佐間カノンが追い船内に入った模様」

「真壁は目が見えないんじゃない」

「いや確かに一騎は一目散に船内に入っていった」

「CDCより、フェストウムスフィンクス型が出現」

作戦会議内に沈黙が走る。

「再び現れたか。俺達の島に」

（2年ぶりのフェストウム…）

「島の自動防衛システムが対応。我々にも出撃指令です…待ってください、マークザインが出撃」

「真壁。なんて無茶を」

「ファフナーが出たなら俺達は船内の調査を行うぞ」

「溝口さんしかし」

「ファフナーが出たならまず大丈夫だろ。体調の優れないとはいえ一騎とザルヴァートルモデルだそうそうやられんさ」

「マークザインには今、力の制限がかけられてるんです。そんな悠長なこと」

「じきにお嬢ちゃんやカノンも準備を終えて出撃する心配いらねーよ。後輩を信じてや

れ。場数でいやーあいつらは俺達よりも何十倍も危険な戦場を生き残ってきたんだ」

「そうでしたね」

「そういうこつた。よし船内の調査を始めるぞ」

「報告によれば、ワルキューレの岩戸のようにコアらしきものの保管している部屋がある
そうです」

「その部屋ならもう見つけたこつちだ」

「異常は無いな」

「はい。今のところは。この船に入ってた情報はコピーを取りCDCに転送済みです」

「あとはこいつの扱いか」

ワルキューレの岩戸のような装置に人が眠っていた。

「人なんですか…」

「わからん。つう」

赤い液体が溢れ出し、男が床に転げ落ちる。

「CDCこちら溝口、船の中で眠ってる人を保護した。アルベリヒトの人達を頼む」

「で、Alvisで保護してるんだ」

翌朝の店内は静かに始まった。

「ああ、おじさんどうだ。酔いは」

「酔いは醒めたみたいなんだけど、体調があまり良くないみたいなんだよね。今朝からダルいみたいだしよく咳もしてるし」

「その保護した男の子は何者なの」

「わからない。今のところわかるのは人の形をしたスフィンクス型ってことらしい」

「フェストウムもこの2年で変わってきたんだね」

「人類の兵器を使うような種類も出てきたからな。外で何を学んだんだろうな」

「そういえば、今日の空なんか変だね」

「変って」

「雲に覆われてるといにはなんか雲には見えないし、気味が悪い」

すると島内放送で上空を覆っているものがただの雲では無いこと、島が随時警戒態勢に入り島も停泊地から動くということが知らされた。

「事態は予想以上に深刻みたいだな」

午後は初めて小隊長として訓練をしていた。

「a—7対象を捕捉」

「a―2と6配置に着きました」

「小隊長行けます」

「よし。a小隊go!!」

「よし、a小隊演習終了休憩だ」

木の丸太に腰掛けると溝口さんが水をくれた

「お疲れさん。いい感じじゃないか」

「ありがとうございます。でも所々判断に迷いが出てしまいます」

「それは沢山の経験が必要だからな。焦らずやってくしかない」

「はい。うっ」

突然息苦しくなる。

「どうした亮介。大丈夫か」

（なんだ…同化現象とは違う…）

ウーン。鳴り響く警報

「敵…」

「よし訓練終了。全員配置につけ」

「今回は4人の初実戦か…大丈夫なのか」

この時、堂馬広登・立上芹・西尾里奈・西尾暉の4人が規定の訓練を終えて初めて実

戦に立った。

「3人がフォロワーに入るから大丈夫だと思えますよ」

戦闘が始まると4人はぎこちないがしつかりと役目を果たしていた。

「なんとか4人とも上手くやれてるみたいだな」

「そのようですね。クウツ」

「亮介どうした」

（まだだ。なんだ…）

（彼が目覚めます）

2年ぶりに響く俺の中に眠るもう一つの存在の…声…

「大丈夫か亮介」

「すみません陣内さん。急に頭が痛くなってきまして」

「無理するなよ」

「陣内さん、霧島さんフェストウムが引き上げていきます」

攻勢だったフェストウム達が急に撤退を始めた。

「とりあえず退けたのか…」

「そうじゃないかもしれせん」

「えっ、それって…」

「おいなんだこれ」

隊員の一人が慌てた声を出す

「どうした」

「通信モニターから突然こんな映像が」

そこには保護したフェストウムが映し出されていた。

第二十六話 「言葉を学んだ敵」

「僕の名前は来主操。よろしくね」

家のテレビに緊急として突如流れた映像には亮介が話していたフェストウムの男の子が映し出された。

(なに：どういうこと)

突然の映像に動揺した私。

「お前達の目的はなんだ」

「争いを止めて降伏してほしい」

真壁司令と来主操のやり取りはとても人とフェストウムの会話とは思えないスムーズに進んだ。

(真壁司令、胸に手を当てる体調良くないのかな)

話し合いは平行線をたどり、定期的に話し合いをすることを決め、来主操との最初のやり取りは終わった。

「ただいま、見たか映像」

亮介が務めを終えて帰って来た。

「お帰りなさい。お疲れ様観てたよ」

「島のコアと同化させろなんて、許す筈がない」

「また：あの日々に戻っちやうのかな」

「：このまま行くとそうだよな。真壁司令達は何度も話し合いを試みるそうだけど」

「そうなるよね」

「2年前と違つて竜宮島はフェストウムから島を守れるだけの戦力を充分整えることが出来てる。大丈夫だきつと」

すると家の電話が鳴った。

「溝口さんお疲れ様です。どうしましたか」

電話の相手は溝口さんのようだ。だんだん亮介の表情が険しくなる。電話を置いた亮介は今にもどこかに行こうとした表情だった。

「どうしたの」

「俺は暫く第一種任務の島の防衛に関する仕事は凍結されて、自宅から一步も出ないようにつて言われた」

「えっ」

「ちよつと事情を聞いてくる」

怒りの形相で外へ出る亮介ついていこうとすると、同僚に銃を向けられる亮介がい

た。

「どういう冗談ですか。これは」

「霧島頼む大人しくしててくれ」

「そんな銃向けられて平静を保てなんて無茶振り聞いたことありませんが」

「溝口さんから連絡きたんだろ。俺達は霧島が外から出ないように見張ってるって言われてるんだ」

「なんで俺の行動を突然制限されなきゃいけないんです」

「それは俺達にもわからない。溝口さんが後で説明に行くとは言っていたからもう少し待っててくれ」

亮介が睨み付けると今でも腰が抜けそうな監視役の人達

「おい亮介、同僚をそんなビビらせんな」

溝口さんと一緒にあの人も歩いてきた。

「真壁司令……」

「霧島君、椎名君突然すまんな」

「どうされたんですか」

「君に出した指令について説明にきた。指示を出したのは私だ。溝口や彼らを許してやってくれ」

「別に許すとかそういうのでは。でもわざわざ何故こちらに」

「家にお邪魔してもいいかな権名君」

家の居間に私と亮介、真壁司令と溝口さんが相對する。

「お茶どうぞ」

「ありがとう権名君。お父上は」

「父はあの日からずっと体調良くなって今も寢室で寝てます」

「そうか…。こちらのことだ気にしなくていい。それで本題に入る訳だが」

（お父さんと真壁司令って接点でもあるのかな…一介の漁師と元軍人さんで。そんな話聞いたことないけど）

「霧島君に自宅待機してもらう理由は、来主操からの要望のためだ」

「あのフェストウムが。何故です」

「理由はわからない。公開した映像後に要望されてな『君を近づけないで欲しい』『君が怖い』と言っていた」

「なにかしたのか亮介」

「いや、俺がアイツを見たのはこの島に上陸して保護した日だけですよ」

「これはあくまで私の推測なのだが、霧島君は時々急な同化現象に襲われるそうだね」

「はい」

「同化現象は本来フェストウムと接触するかファフナーに乗らない限り起こらないはずなんだ。心当たりはないかね」

「…いやないですね」

「そうか。少なくとも彼らとの交渉で我々が背いて話が無しになることは避けたい。苦しい思いをさせるとは思うが二人とも協力を頼む」

深々と頭を下げる真壁司令。流石に亮介も納得せざるおえなかった。

第二十七話 「奪われた自由」

「また警報が鳴り出したな」

お客のいない店内に、鳴り響く警報音

「うん。空も嫌な曇り方でなんだか気分悪くなりそう」

あれから来主操の仲間が頻繁に島に襲撃を繰り返している。

「彼との交渉上手くないのかな」

「真壁司令達を信じてこの状況から脱け出せることを祈るしかないな」

不意に鳴った電話に恵が出る。

「どうした」

「Alvisから、体調不良の人が増え始めて人手が足りないから千鶴先生を手伝って

ほしいって」

「気をつけてな」

「お父さんよろしくね、日に日に体調悪くなってるみたいだし」

「気をつけておくれ」

Alvisに向かう恵を見送る。

「…わかつてますから、そんな睨まないでくださいよ」

店の椅子に腰掛ける。皆が自分に出来ることをしているのに何も出来ない自分。何の為に『守る』力を学び続けてきたのか分からなくなる。溜め息をつくばかりであった。

(どうやら私の存在に怯えているようですね、彼)

気がつくといつの間にか目の前が真つ暗な世界に変わっていた。…俺はこの世界に一度来たことがある。

(やはりお前のせいなのか)

(…)

(急な同化現象や、時折周りの人達が俺を異常に怯える状況…お前のせいなのか)

(そうとも言えますしそうとも言えません)

(どういう意味だ)

(今の私は貴方の一部。つまり私は貴方であり貴方は私でもある)

(…俺自身が引き起こしている出来事だと言いたいのか)

(…)

(まあいい。ところであの来主操がお前に怯えているのは何故だ)

(彼はこの島で目覚めた時に私の存在を知り私に接触を試みた。だが『私の力』に怯え拒絶するようになった)

(『力』：。かつて皆城乙姫が教えてくれた力のことか)

(そう。私は彼女の存在に興味を持ち、貴方を通して定期的な接触をしていた。しかしある時を境に私を拒んだ。)

(自らの死期が近づいた頃か：。俺と会うことも拒絶していた)

(貴方が皆城乙姫の側に近ければ近いほど。私が強く接触出来たからでしょう)

(お前の力とはなんだ)

(：。わかりません)

(なに)

(わかりません。私にそもそもそのような力があるとは思えません)

(『私の力』と言いながらわからないはおかしいだろ)

(あくまで『私の願い』を皆城乙姫が『力』と表現し、それを引用しているだけです)

(お前の願い：)

(少し話し過ぎました。前回の約束を実行する気でしたがまた別の機会にしましょう)

(：)

徐々に光が射し込む手を伸ばすと：

見慣れた光景に戻っていた。

(寝てたのか。あれは夢……。いや現実だ)

おじさんの咳がだいぶ酷くなっていた。

暫く咳き込むと変な静けさがやってきた。

「おじさん大丈夫」

反応はない。寝室に向かいもう一度声をかけるが反応がない。

「おじさん大丈夫……おじさん」

扉を開けると血を吐いて目を閉じたおじさんの姿があった。

第二十八話 「すれ違う心」

「お父さんすっかりして、お父さん」

私の声に父は反応しないままA l v i sの集中治療室に運ばれた。

集中治療室の扉が閉まり。赤い看板が点灯する。

「恵……ごめん。恵に頼まれたのに気づくのが遅れた」

「亮介……家を出てもよくなったの」

「今回は特例で許してもらった」

「帰って」

「恵……」

「帰って、一人にさせて」

動揺から心が荒れていた私は亮介にキツく当たっていた。亮介は「ごめん」と小さく
呟きその場を離れた。

数時間後、治療が終わり千鶴先生が出てきた。

「千鶴先生。父はどうですか」

「一命は取り留めたけど、予断を許さない状態ね」

「そんな…」

「お父様のことでお話しがあるのだけど時間もらってもいいかしら」

「大丈夫です。そんなに深刻なのですか」

「そうね…。今この島にいる大人で体調を崩している人達と大いに関係あるわ」

場所を変えA l v i sの診察室へ移動した。

「まず、今島の大人が急激に体調を崩し出したことは知ってる」

「はい。確か相手のフェストウムが私達のコアを取り込むための戦略として様々な方法で弱らせているんですよ」

「そう。その影響で島の環境が制御出来なくなっているのそしてそれは、ある人達に非常に深刻な影響を与えているの」

「ある人達とは」

「昔、日本を世界から守るために戦った人達よ」

「どういうことですか」

「瀬戸内海ミール…つまり私達のミールがかつての私達の故郷『日本』で発見されて。私達から受胎能力を奪ってしまった。その時世界は日本ごと核攻撃で滅ぼすことを決断したの。抵抗はしたものの日本は滅び、生き残った日本人が『A l v i s』を組織して今の私達がある」

「…」

「生き残った日本人の中には当然軍人だった人達もいるの。真壁司令や溝口さんあと直接ではないけど澄美さんや容子さんも軍の関係者として働いていたわ」

「父はその人達と関係があるのですか」

「椎名十蔵。日本自衛軍自衛海軍一佐…貴女のお父様のかつての階級よ」

父はずっと漁師だと思っていた私にとってそれは受け入れがたい衝撃だった。

「今、体調を崩してる人は軍の関係者で世界と戦い核攻撃を経験した人達がほとんどなの。お父様もおそらくその時の後遺症が原因で、島のミールによる加護で症状が出なかつたけれど。今の不安定な環境で症状が発現したと考えています」

「そんな…父は治りますか」

「…お父様は重症で島の環境が元に戻ってもおそらく」

突如判明した受け入れがたい数々の事実には私は頭を抱えうずくまった。

「お父様が目覚めたそうよ。面会も出来そうだけど」

「…お願いします」

急ぎ病室に向かうとすでに誰かが父と会っていた。

「おじさんじゃあお大事に」

その男は視線を反らすと横を通り過ぎた。

「まったく亮介のやついらぬ世話を焼きおつて」

「お父さんどう調子は」

「千鶴さん達のおかげで楽になったが。先はそう長くないな」

「冗談でもそんな事言わないで」

「自分の身体のこととは自分が良くわかつとる」

「そんな…」

「亮介が気づいて迅速に応急措置してくれたおかげでこうして恵と話せるわけだが。なんかあったのか二人とも」

「なんで」

「あいつ元気ないしやたらワシに謝るし、今お前達会った時に微妙な空気を感じたからな」

「それは…」

「なにを揉めとるかわ知らんが。自分の気持ちには常に正直になれよ」

「父さん…どうして軍人だったこと隠してたの」

「隠すもなにも、聞かれたことが無かったから答えなかつただけだぞ」

「お母さんは知ってた」

「知ってたもなにもその頃からすでに夫婦だ」

「…そう」

「なんじゃ、そんなしんきくさい顔するなら帰れ。治る病気も治らんわ」

そういうと父は布団を被った。

私が「また明日来るから」と言い病室を離れようとするとうちは布団から手だけ振り眠りについた。

私はその日A l v i s に泊まった。

第二十九話 「訪れた危機」

（亮介。恵を頼んだぞ）

目が覚めると日が変わっていた。変わらず鳴り響く警報

（恵は昨日は帰ってないのか）

いつも以上に静かな家……どうにも落ち着かない。

居間に行くと手紙が置いてあった。

「昨日はごめんね。お父さんが心配なのでAlvisに泊まります」

（俺が気づかなかつただけか）

不意に笑みが溢れる。

「霧島ちよつといいか」

外で見張っている仲間が俺を呼んでいる

「なんですか」

「そう睨むなよ。溝口隊長からだ」

（溝口さん……どうしたんだろう）

通信器を預かる。

「よお、亮介ちゃんと大人しくしてるか」

「溝口さん。ちゃんと大人しくしてますよ」

「それは良かった。∴いいかいつでも動けるように準備しておいてくれ」

「なにかあったんですか」

「どうにも話し合いが上手くいってないみたいだ。一騎が今話しているが交渉決裂も出てきた。その場合に備えて用意しておいてほしい」

「いいんですか」

「交渉決裂になったら向こうの要望を必要以上に聞く必要はない。いつでも出れるように頼んだぞ」

「わかりました」

人に頼りにされる。忘れかけた感情が溢れる。

「今、溝口隊長から聞いた。これを」

『俺達の服装』を渡された。その時だった。

「CDCよりフェストウム襲来の連絡∴これまでにない数だそうだ」

日に日に増えていた敵の数∴それが今途方もない数で襲来した。

連戦で疲弊したこちらには厳しい状況だ。

繰り広げられる戦い。見慣れた光景が崩れていく

「ついにこの辺りまで被害が出るようになったのか」

外の仲間が呟く。自室に上がり窓を覗くと無数のフェストウムと7機のフアフナーが激しく戦っている。

次々に戦闘不能になるフアフナー各機。

まずい戦況だと思っていると

(封印が解かれる)

『中のアイツ』が反応した。

(封印…)

激しい地響き、こちらだけでなくフェストウムも驚いているように見えた。

「あれってまさか…」

仲間が見ている先にいたのは…マークニヒト

一騎が乗るマークザインと同じザルヴァートル・モデルで2年前島に大打撃を与えた

紫のフアフナー

禍々しさは前より増してみえた。

俺の身体は咄嗟に家を飛び出していた。

「おい霧島勝手に…ぐわぁー」

ニヒトより放たれた無差別な攻撃が俺の周囲を襲い、監視していた仲間達もそれに巻

き込まれた。

(Alvisは無事なのか…。恵)

急いでAlvisに向かう。半壊した設備、火花が散りいつ引火するかわからない導線

「急いで」

普段は物静かな千鶴先生の焦り声が聞こえる。

場所はワルキューレの岩戸か、ワルキューレの岩戸に着くとウルドの泉と繋がる壁が壊され、岩戸もヒビが入り液体が漏れだしていた。

「千鶴先生」

「亮介君!?!:医療ブロックを見てきてほしいの、私はここから離れられない」
「わかりました」

医療ブロックへ向かうと想像してたよりは被害が出てなかった。

「霧島君貴方なんでここにいるの」

「そんなことどうだっていい。ここは、恵は無事なんですか」

「亮介」

驚いた表情の恵が病室から出てきた。

「恵。無事か」

「ええ、なんで亮介が」

「そんなのはいいから、被害状況は」

「スカラベ型だったかの触手で A l v i s の施設内が被害を受けたけどこの辺りは大丈夫みたい」

「そうか、良かった」

「きゃーあ」

悲鳴の先にはスカラベ型の触手がウネウネとこちらに接近していた。

（行くぞ。いいな）

（…）

「触手が結晶になって割れた…亮介」

『力』を使った反動で身体の一部が同化現象にさらされるがすぐに割れた。

「大丈夫なの」

「ああ、ちよつと疲れるけどな」

「亮介」

そこで俺の記憶が途絶えた。聞いた話ではそのあと弓子先生の娘の日野美羽が相手と対話したことで一時的にフェストウムが撤退

しかしマークザインと一騎が行方不明となった。

第三十話 「再始動する作戦」

「あれ、ここは」

「気がついた。ここ医療ブロックの病室」

「気を失った亮介が目を覚ました。」

「敵はどうなった」

「退いたよ、美羽ちゃんが『お話し』したんだって」

「『お話し』ってフェストウムと会話したのか」

美羽ちゃんは弓子先生と2年前亡くなった日野道生さんの娘さんで。竜宮島で初めて自然受胎で生まれた子どもでもある。

「会話はしてないよ。私達でいうクロツシングに近いことをしたんだって」

「…凄いな美羽ちゃん」

「うん」

「ごめんな恵」

「謝らないで、お父さんから聞いた。すぐに応急措置してくれたって、そのおかげで今ここにいれるんだって。私こそごめんね。気が動転してキツく当たっちゃった」

「いや、恵に頼まれたのに約束を果たせなかった。ごめん」

「だからいいってば」

「おじさんは」

「表情は元氣そうだけど、無理してる気がするの心配かけまいと」

「そうか…」

「目が覚めたか」

溝口さんが病室にやってきた。

「溝口さん。すみません勝手に跳びだしました」

「氣にするな、あの時点で交渉は決裂してた。むしろA i v i sに向かったのは適切な

判断だ」

「俺を見張っていた二人がやられました」

「…ああ聞いたよ。しつかりと吊ってやらないとな」

「はい」

重苦しい空気が流れる。

「それでだ。さっきのブリーディングで『第2次蒼穹作戦』を執行することになった」

「第2次蒼穹作戦…どんな内容なんですか」

「ざっくり言うと、攻撃部隊と防衛部隊に分かれ美羽ちゃんに奴等と対話してもらって

戦いを止めるって感じだ」

(ざっくりと言う割りには割としつかり目的がわかる説明だな)

「対話は諦めた訳では無かったんですね」

「美羽ちゃんが実際に敵の撤退を促したからな。今度はこっちが奴等の本陣に乗り込んで。美羽ちゃんに停戦を呼び掛けてもらおうそうだ」

「上手くいくんでしょうか」

「失敗すれば島は滅ぶ。成功させなきゃならん。絶対にだ」

「俺はどうすれば」

「俺は真壁が美羽ちゃん連れて攻撃に行く関係で防衛部隊を任されたからよ、亮介も頼むぞ」

「わかりました」

作戦開始直前Rボートに攻撃部隊が乗り込んで行く。

溝口さんや亮介に紛れて立ち会った私。ふと美羽ちゃんへ目がいった。

美羽ちゃんは亮介をじっと見ている。

「どうしたの美羽」

「そうなんだ……。ダメだよそれは私からじゃなくて亮介お兄ちゃんからもらわなきゃ」
困惑する弓子さん。当然周りも美羽ちゃんの言動を理解出来なかった。

「美羽ちゃんを感じるのか、コイツの存在」

「うん。亮介お兄ちゃんと仲良くなりたいたって」

「……そうなのか」

謎の会話を大人達が強引に引き離して終わらせた。

「溝口。そちらは頼んだ」

「任せろ真壁。お前の方こそしくじるなよ」

島の存亡をかけた蒼穹作戦が再び発動した。

第三十一話 「甦る存在」

「よーしこつちだついてこい…今だマークジーベン」

「了解」

第2次蒼穹作戦の真つ只中、俺は愛機セイバーと共に竜宮島の空を飛んでいた。

「マークジーベンフォローサンキュウ」

「セイバーへ、マークドライツエンのフォローをお願いします」

「了解」(遠見はフアフナーに乗ると凄く淡々とした口調になるな…)

指定されたポイントではマークドライツエンが敵に囲まれていた。すぐにミサイルを撃ち込むと、攻撃されたフェストウムはこちらを向いた。

「さあ、来い」

スピード全開でその場所を立ち去る。たまらずフェストウムは追いかけてしようとしたが、すぐにマークドライツエンに攻撃された。

「援護感謝する。セイバー」

「おう…どうしたカノン」

「ヤツが来た」

(彼が来ました)

アイツの声に反応し周囲を見渡すとヤツがいた。

「マーク…ニヒト」

最大の敵は圧倒的な破壊力を見せていた。

マークジーベンが直ぐに迎撃に向かうがやられてしまった。すぐにマークニヒトのもとへ向かい攻撃するが。此方には見向きもしない。側を通り過ぎる時に感じた殺気(やはり通常兵器は意味無しか。ハッ、マズイ)

急上昇して回避を試みたが、マークニヒトが苦しみ出し墜落したので事なきを得た
「どうしたんだマークニヒトは」

(彼の中で葛藤があるようです)

(葛藤…)

(それが動きに躊躇いを生んでいます)

墜落したマークニヒトにマークドライツエンが接近し攻撃を仕掛ける。

ルガーランスを壊され激しい殴打の連続を浴びるマークドライツエン。抵抗虚しく膝から崩れ落ちる。

マークニヒトは破壊したルガーランスを同化し自分用のルガーランスを生み出した。

マークニヒトの攻撃が動けないマークドライツエンを襲う

「避けるカノン」

間一髪でマークフュンフが防御した。

(あれは確か陣内さんの恋人堂馬舞さんの弟広登君か、やるな)

マークフュンフが防御で耐えている隙にファフナーが1機マークニヒトに突撃する。

(あれはマークファイアー…春日井甲洋)

マークファイアーが必死に島からマークニヒトを突き放すが、バラバラにされてしまった。

再び島に降りたつマークニヒト。バラバラにしたマークファイアーにとどめの一撃を放とうとしたその時

マークニヒトが発光しました。もがくマークニヒト、眩い光と共に発光体が目が追いつかない早さで戦場を駆ける。

徐々に形が表れる発光体マークニヒトを空へ抱えだした時に姿を見せた。

「マークザイン…還ってきたか一騎」

「亮介」

焦り声の溝口さんの通信が入る。

「敵のミールが島を同化しようとして動き出した。今マークフュンフがカバーしているが身動きがとれん。マークフュンフに近づく敵を退ける」

急いで巨大な円柱が見える場所まで急行すると身動きの取れないマークフュンフにフェストウムが群がる。

「どうすれば…」

（私がやりましょう）

ふと聞こえたアイツの声に反応すると激しい同化現象に襲われた。必死に耐えていると俺が近くを通過するとフェストウムが徐々に距離を取り出した。

（俺…いやアイツの力に怯えているのか。よし）

俺は同化現象に耐えながらマークフュンフに近づくとフェストウムの周りを跳び回った。俺の身体も限界が近づき出した頃。島を乗っ取るうとしたミールの円柱が粉々に砕けた

「皆、良くやった攻撃部隊から作戦成功の連絡が来た。一段落だ」

溝口さんの労いの言葉が通信から聞こえる。俺は力を使い過ぎたためか意識を失いかけた。それに気づいた外部から遠隔操作で墜落することなく着陸出来た。安堵の空気が流れる竜宮島しかし喜びも束の間であった。CDCから衝撃の通信が入る。

「人類軍の爆撃機が接近。こちらへミサイルの発射を確認」

奈落の底に落とされたかのような絶望的な状況。誰もが悲観していたところで驚くべき光景が目に入った。

「さつきまで戦っていたフェストウム達が自分達を犠牲にして、島を護った」
(貴方達の希望の聲が届いたようですね)

「でも爆風が島に…これはベルシールドかこれなでない強力なシールドだ」
(新しいミールが乗り越えたようです)

間一髪のところまで竜宮島の新たなコアが成長期を乗り越え島を護った。

ここ暫く覆っていた不気味な雲が晴れ、久しぶりの蒼い空が姿を魅せた。

「終わったのか…彼らとの戦いが」

久しぶりに見る蒼い空は眩しかった。遠くから俺を呼び誰かが走ってくる。

「恵」

力強く抱きしめられる

「無事で良かった。あの船どこかいくの」

目を向けると対峙していたフェストウムの船がどこかへ旅立とうとしていた。

「また戦うことになるのかな」

「どうだろうな。でも美羽ちゃんやんがアイツらに伝えたことがしつかりと伝わったなら
きつと大丈夫だろう」

「うん。そうだね、あつ太陽が」

擬装鏡面が展開され太陽の位置が変わる。竜宮島を壊滅寸前に追い込んだ戦いは、新

たな希望を芽生えさせ幕を閉じた。

第三十二話 「共に歩む」

「お父さん…」

第2次蒼穹作戦が無事成功で幕を下ろして1ヶ月。私はA l v i sの病室にいた。

「恵。おじさんはどうだ」

訓練を終えた亮介が駆けつけた。

「…今も目覚めないまま」

「そうか…」

千鶴さんから聞いた世界と戦った時の後遺症。成長期を乗り越えたコアのお陰で症状に苦しんだ人達は日常生活に支障なく戻っていた。父以外は…

「失礼してもいいかしら」

千鶴さんが病室を訪ねてきた。

「二人に話しておかないといけないことがあるの」

「もう…長くはないんですね」

亮介はある程度覚悟していたかのような口調だった。

「持ってあと1週間です」

千鶴さんは悔しさを滲ませながら静かに呟いた。

「千鶴先生どうにかならないですか」

「落ち着け恵。おじさんが他の人達より重症だとは聞いてたし。先生達も最善を尽くしてくれただけ。」

言葉ではそう言つて励ましてくれる亮介だが、表情には悔しさが滲み出していた。

「お父様を助けて挙げられずごめんなさい」

千鶴さんは深々と頭を下げた。亮介がとつさに千鶴さんの顔をあげさせる。なにも出来ない歯痒さが病室を包み込んだ。

そんなことがあつた日の夜。夕食を終えた静かな居間

「恵ちよつといいか」

お茶を飲みくつろいでいた亮介から声をかけられる。

「どうしたの」

「俺達のことしつかりとしておこうと思つて」

「えっ」

いつの間にか後ろにいた亮介が抱きついてきた。

「ちよつとお皿割れちゃうよ」

「俺とずっと一緒にいてくれないか」

「ちよつと、えっ」

「俺と結婚してください」

「ちよつとストツプ」

皿を置き思わず突き飛ばす。

「…もう少し言うタイミング無かったの」

「ごめん」

「もう。亮介ったら…もちろんよ。一緒にこれからも支えあつて生きていこう」

「ありがとう」

翌日。病室に報告にに言った。まだ目覚めない父にせめて伝わつて欲しいという想いを込めて。

「お父さん。お嬢さんと結婚させてください」

静まりかえる病室。私達はそれでも真剣に話を進めた。

言いたいことを伝えきり病室を出ようと立ち上がった時

「言いたいことだけいいやがつて、返答待たずに去るのか」

1ヶ月ぶりに目覚めた父。私達の目からは自然と涙が溢れた。

「恵苦しい」

「だって。お父さん」

「ははは、そんなに泣くな。亮介腹を括ったのか」

「はい」

「娘を……よろしく頼むぞ」

「ありがとうございます」

島の皆様のご厚意で急ピッチで結婚式の用意をして頂き、父の余命宣告を受けた日の前に鈴村神社で式を挙げた。島の多くの人達が祝福に来てくれた。

父も真壁司令に車椅子を引いて頂き私達の門出を祝ってくれた。そして式の成功を無事見届けて安心したかのように翌日。

私達に見守られながら息を引き取った。

「まるで眠ってるように逝ったな。おじさん」

「そうだね。亮介」

「どうした」

「亮介は勝手にいなくならないでね」

「ああ……約束だ」

晴れて夫婦になった私達。まだ見ぬ明日へ希望を抱きながら互いの手を取り合った。

蒼穹のフアフナー EXODUS

第三十三話 「掴み取った平和」

「いらつしやい。あつ亮介君今日も来てくれたのね」

第2次蒼穹作戦作戦から約2年が経った。竜宮島はあれから敵に襲われることなく平和な日々を謳歌していた。

「舞さんこんには、空いてます。」

「うん。こことつておいたわ」

「いつもすみません。すぐに揃うと思えますんで」

俺が席に座つてまもなくして、生まれたばかりの赤子を連れた女性が入店した。

「遅くなつてごめんね。この子ぐずつちやつて」

「俺も今着いたところ」

「いらつしやい恵ちゃん。きやあー連れてきてくれたの」

「はい。この子一人には出来ないの」

「夫婦揃つてこればいいのに」

「それが、この時間はあの一団の…」

扉が空くとむき苦しい集団が店に入ってきた。

「舞。席空いてる」

「佐喜ちゃん空いてるよどうぞ」(そういうことか)

(席なくなつちやうんですよ、あの人達来ると)

「おつ。誰かと思えば育休男子霧島亮介くんとその奥さん恵さんではないですか」

「どうも陣内さん。やめてくださいよそのあだ名」

「そうよ貢くん。からかわないの」

「からかつてないさ。むしろ誇らしいんだ」

「いやからかつてるね絶対」

「うん。からかつてる」

「佐喜に舞まで…信じてくれよ」

笑いに包まれる堂馬食堂。すると

「あつ。ごめんね、大きな声で怖かったね」

俺達の子が泣き出してしまった。皆で必死にあやすとスヤスヤと眠りについた。

「まさかこんなにも早く二人の子どもが出来るなんてね。なんか幼い頃から知ってる身

としては感慨深いは」

「佐喜は早く見つけないとな」

「うっさい」

佐喜さんの肘打ちが陣内さんのお腹に直撃する。

「そういえば、二人とも最近はこつちが多くなつたね」

「『樂園』は俺達の知らない若い子が増えて行きにくくなりましたね。『堂馬食堂』の方が顔馴染み多くて今はこつちの方が居心地がいいんですよ」

「二人も歳とつたな」

「まだ20代前半なんですけどね。：そういえば溝口さんは」

「溝口隊長はまだ真矢ちゃんと訓練中よ」

「遠見とですか…」

「なんだ。嫉妬か」

「そんなんじゃないですよ」

それは1年前のある日だった。俺と溝口さんが打ち合わせをしていた時だった。

「溝口さん。お願いがあります」

遠見が真剣な眼差しで歩いてきた。

「どうしたお嬢ちゃん」

「私を弟子にしてください」

突然の申し出に俺達は戸惑った。

「お嬢ちゃん。そんなことしなくてもファフナーパイロットっていう大事な責務があるじゃねーか」

「でもいつかファフナーに乗れなくなります。乗れなくなった時に何も出来なくなるのが嫌なんです」

「そんなことはない。お嬢ちゃん程の実績なら後輩育成の教官やCDC勤務だつてあるだろうに。あつ楽園の専属ウエイトレスでもいいんじゃないか」

「…」

「冗談だよ。冗談…なんでそこに拘るんだ。今は昔と違いだいぶ選択肢も増えた。平和な日常つてのを過ごせるんだ」

「ファフナーに乗れなくなつた時の自分に何が出来るのか考えてたんです。私は咲良や近藤くんみたいに面倒見がいいとはいえないし。カノンみたいに手先が器用じゃないし。皆城くんみたいに頭良くないし。一騎くんみたいに料理上手じゃないし」

「お嬢ちゃん…」

「せめて私の経験を活かせることつて力を持つて大切な人達を護ることなんじゃないかなつて」

「遠見そんなことはない。きつと遠見にしか出来ないことが…」

「わかった。丁度一人欠員が出たんだ最近」

「溝口さん」

「恵ちゃんが妊娠して色々大変なんだからお前に暫く育児休暇をやろう。恵ちゃんの側においてやりな。亮介が抜けた穴にお嬢ちゃんが入る、これで一件落着だ」

という経緯で俺は島の防衛部隊を一時的に離れ、自宅の花屋と恵のサポートをした。

「ごちそうさまでした。また来ます」

「はい二人ともいつでもいらっしやい」

帰り道

「気になるの、さつきから空ばかりみて」

「まあ、少しな。いざというとき役に立てるか不安になる」

「大丈夫だよ。これまでの亮介の経験がブランクの穴を埋めてくれる。きつと」

「そうだね。今は折角もらった3人の時間を大事に過ごそう」

「うん」

ずっと抱っこをしていた恵に代わり高く持ち上げる。俺達の赤子はとても嬉しそうにはしゃいでいた。

家に帰宅した頃であった。暫く聞かなかつたサイレンが鳴る。

「まさか…フェストウムなのか」

「亮介…」

「大丈夫。戦場には出ないよ。ちよつと様子をみてくる。この子を頼んだ」

この時、竜宮島はとある人類軍の部隊を島に迎え入れた。そして島は再び混沌とした世界に誘われることとなった。

第三十四話 「世界で生まれし人類の希望」

「ただいま」

サイレンを聞いてから情報収集に出た亮介が戻ってきた。

「お疲れ様。どうだった」

「やはり現れたみたいだなフェストウム。ファフナー部隊がやつつけたそうだ」

2年ぶりに現れたフェストウム。それは島に訪れた来訪者が起因していた。

「人類軍の輸送船を島に迎え入れたの」

「なんでも、美羽ちゃんに用があるそうだ」

「人類軍がなんで美羽ちゃんを……」

「輸送船の部隊に美羽ちゃんの力と近い力を持つ少女がいて、ずっとコンタクトしてたそうだ」

美羽ちゃんの力：フェストウムと対話が出来る力。ふと前に弓子さんとお会いした時に美羽ちゃんが空想の少女とお話しをしますと不安を相談してくださいったのを思い出した。

「なんでもその部隊が所有しているミールと美羽ちゃんを会わせて備えるんだそうだ」

「備えるつてなにな」

「新たなるミールの襲来。なんでも『アルマイル』と呼ばれる北極ミールに匹敵する純粋ミールが地球に接近しているらしい」

「そのミールをどうするの」

「美羽ちゃんのような『エスペラント』と呼ばれるフェストウムと対話が出来る人達の方で人類に有益な存在に変容することを目指すんだつてさ」

「エスペラント…もし失敗したら」

「なんでも世界は『アルマイル』に吞まれて消滅するらしい」

「そんな…」

「さらに。消滅した北極ミールから派生した『アザゼル型』というミールに匹敵するフェストウムが現れて、そいつらも『アルマイル』と接触しようとしてるそうさ。そいつらが先に接触しても人類に敵意を向ける相手だからいけないということだそうさ」

「アザゼル型…」

「人類軍の輸送機を迎え入れた時にアザゼル型に一体遭遇しているみたいなんだ。資料を見たけど確かにこれまでのフェストウムとは全然違ったな」

「なんだか2年で随分状況が変化したね」

「事が事だから真壁司令はその人類軍が所有するミールへの接触をはかることに前向き

「だそうだ」

「どうやって接触するの」

「派遣部隊を結成して美羽ちゃんと一緒に人類軍のミールがある場所に向かうそうさだ。」

「それで俺も志願しようと思う」

「えっ…」

予想外の言葉に私は耳を疑った。

「なんで」

思わず語尾がキツくなる私

「前々から気になってた外の世界を見るいい機会だと思ったから」

「この子はどうするの」

「この子と君を置いて今行く訳にはいかないのはわかってる。でも外の世界を知る絶好の機会だとも思ってる」

「…」

「現状は島の外にファフナー部隊を派遣した場合に島を防衛する戦力が足りないから。すぐに行くことになるとはならないと思う。でも俺が今したいことはあらかじめ君に伝えておくよ」

その頃、竜宮島では来訪した人類軍のエスペラント『エメリー』ちゃんと美羽ちゃん

が邂逅を果たしワルキューレの岩戸へ向かいエメリーちゃんが島のコアと接触。

エメリーちゃんの要望に島のコアが応え、島の外に派遣しても問題の無い量のファフナーのコアが急激に誕生。

更に既存のファフナーの戦闘力も急激に上がり。島の外にファフナー部隊を派遣する体制が急遽整った。

私の想いとは裏腹に竜宮島は新たな希望を掴むための準備に取りかかった。

第三十五話 「家族会議」

「なに考えてんだ亮介。恵とこの子を誰が面倒見るっていうんだよ」

佐喜さんの怒号が響く堂馬食堂。俺が派遣部隊に参加したい意思を表明したところ、俺達家族を堂馬食堂に呼び出し急遽堂馬食堂を貸し切つて家族会議が行われていた。

「佐喜ちゃんもう少し静かに、赤ちゃんが驚いたちゃう」

「舞はこの子を裏であやしててくれよ」

「亮介。わざわざ君が行く必要はない。君の今の役目は恵ちゃんと君達の子どもを護ることだ」

陣内さんも自分の感情を抑えながら淡々とした口調で俺を制止した。

「身勝手なのはわかってます。子どもにとつて親がいな寂しさもここにいる人達の中では一番理解しているつもりです」

「だつたら…」

「ただ、子どもが成長し大きくなって色々なことに興味を持った時に、興味があることを教えて挙げられないのは嫌なんです。俺達夫婦は外の世界のことお話しを聞いただけで実際に見たり感じたりしたことはないですから。それに教える世界の現状が絶望的

なのも嫌なんです。子どもには多くの夢や希望も持って欲しい」

「今の世界は少し前に比べたら随分マシになったんだ」

「それもわかってます。俺が教えて挙げたいのは竜宮島だけではなくて世界が平和になった姿なんですよお二人とも」

「…」

「その可能性が今示されて手伝えるというのなら、俺は力になりたいそう思っています」
俺が力説していると店の扉が開いた。

「じゃまするぞ」

「おやつさんどうしたんですか」

「客を連れてきた」

後から二人の男女が入ってきた。

「私はナレイン・ワイズマン・ボース。人類軍南アジア艦隊所属ペルセウス中隊大将だ。先の君達の働きには大変感謝している。ありがとう、この子の護衛を兼ねてお邪魔させてもらった」

「エメリー・アーモンドです。霧島亮介という方はどなたですか」

「自分ですが、なにか」

「…」

エメリーと名乗った少女はじつところちらを見続けた。

「貴方達のコアからの伝言です。貴方が信じる道を進みなさいと」

「島のコアが目覚めたんですかおやつさん」

「いや、まだ眠ってるよ」

「エメリーはエスペラントで、先程この島のコアと接触していてね。その時に伝言を預かったそうだ」

「つまり、お前の道はお前が決めるというのが島のお告げだ亮介」

「俺は…俺は派遣部隊に志願したい。この世界を一度自分の目で見て肌で感じたい」

「亮介あんた…恵も言いたいことはないの」

「私は正直、亮介が側にいて欲しい」

「だってさ亮介」

「でも、これまで色々やりたいことをやれなかった亮介には。やりたいことをやって欲しい」

「恵…」

「2年前に島が襲われた時、相手の都合でやりたいことを出来なかった。適正はあるのに今だに原因不明のイレギュラーで乗れないファフナー。この世界の現状もあの日が来るまで知ることが出来なかった。同級生の親友達が島の為に命懸けで戦った『L』計

「画』ですら、私達は知らずしばらく過ごしてきた」

「…」

「そんな自分の置かれた環境の理不尽な理由でこれまで何度もやりたいたいことを諦めてきた亮介に、そんなチャンスがあるのなら。私は背中を押したい」

「恵…ありがとう」

「うん。だから亮介必ず帰って来て。帰ってきてあの子に見せてあげて。貴方が携わったことで来るであろう世界の未来を」

「わかった。約束だ」

「このお気楽夫婦が現実はそう甘くはないんだよ」

俺達の眼差しに佐喜さんは溜め息をついた。

「しょうがない亮介。恵とお前達の子どもは私が責任持つて面倒見るから行つてこい」

「佐喜さん…」

「俺も見るぞ」

「陣内さん…」

「決まりだな」

「はい」

こうして俺は派遣部隊に志願した。まだ見ぬ世界に希望があると信じて俺は自分の

信じた道を進んだ。

第三十六話 「船出のとき」

「いよいよだね」

正式に派遣部隊の一員として登録され出発の準備をする亮介の背中を見ながら、私は語りかけた。

「ああ。君とこの子が明るく幸せに過ごせる世界を必ず掴みとってくる」

「すみません誰かいませんか」

「お客さんか」

「そうみたいね」

店に戻ると赤髪の少女がやって来ていた。

「カノンじゃない。いらっしやい」

「どうも、こんにちわ」

カノンが挨拶すると背負っていた我が子は嬉しそうにはしゃいだ

「どうしたのお墓参りの日だっけ」

「いや、霧島亮介と話しがしたくて」

「ちよっと待ってて、亮介ー」

「おう。カノンかどうしたんだ珍しい」

「派遣部隊に参加するんだってな」

「ああ、止めに来たのか」

「当たり前だ、お前には恵と産まれたばかりのこの子がいるじゃないか……って言っても
もう遅いか」

「カノン……」

「ならば必ず生きて帰ってこい。皆と一緒に」

「変わったな、お前」

「なっなんだ突然」

「島に来た時はぶつきらぼうで表情固くて一匹狼みたいな感じだったのに」

「なっバカにしているのか」

「いや、凄いなって。人間ってここまで変わるんだなって思った」

 褒められて頬を赤くするところは相変わらずのようだった。

「私が今の私になれたのはこの島のおかげだ。この島には凄く感謝している」

「一騎にもな」

「何故そこに一騎が出てくる」

「お前の自殺を止めたの一騎なんだから」

「それは、そうだが…」

からかわれているカノンをみて思わず笑ってしまった。

「恵、お前まで私を」

「ごめんごめん。なんか可愛くって、ねー」

我が子を抱くカノン

「赤子を使うなんて、反則だ」

「でもカノンの印象が大きく変わったのはあの頃の貴女を知る人達は皆同じことを思っている。きつと」

「…そうか、言いたいことはそれだけじゃあな」

店を出ようとするカノンがラベンダーの花を見て止まる。

「店に来て何も買わずに出るのも失礼だな。これを貰いたい」

「カノン…ありがとう。そういうところは変わらないね」

「!?。またな」

頬赤くし立ち去る彼女を二人で見送った。

「ラベンダーか…」

「どうした」

「人ってね、その時の感情や気持ちによって魅力を感じる花が変わるってお母さんが

言ってたの。思い出して」

「そうなのか。確かラベンダーの花言葉は不実…」

「多分もう一つの意味だと思うな」

「もう一つ…」

「期待」

「期待か…」

「本音を花に託す不器用さがカノンらしいなって。カノンの想いを裏切らないようにしっかりと勤めあげないとね」

「そうだな」

沈む夕陽を背に口づけを交わす二人。翌日亮介は派遣部隊と共に妻子に見送られながらまだ見ぬ世界へ旅立った。

第三十七話 「初めて見る世界」

輸送機に乗って幾分か経った。

「どうした霧島」

「なんか自分が操縦しない飛行機って落ち着かないですね」

「なんだビビってるのか」

「そんなんじゃないですよ…」

「まあ俺達戦闘機乗りにとつちや物足りなかったり、他人に任せて空を飛ぶのは確かに不安になるよな」

「先輩は竜宮島の外を見たことありますか」

「俺はギリギリ知ってる世代だな、俺の代以降は見たことないヤツが多いと思うぜ。

まああんまり期待するなよ、メモリージングの知識より現状は酷いかもしれん」

「そうですね…」

ときより視界に入る窓の外、人類軍のファフナーがずっと並走している。

「あれが人類軍のファフナー…」

（ファフナーに乗れるようになるわ）

ふいに忘れかけていた事を思い出した。かつて島を離れた者から言われた言葉

「どうした亮介。人類軍のファフナーじつと見て」

「いや、人類軍のファフナーの性能は大丈夫なのかなと」

「昔は全然対抗出来なかつたみたいだが、真壁一騎が一時的に竜宮島を離れた時に提供したっていう『マカベ因子』によつてここ最近では人類軍のファフナーもフェストウムに対抗出来るようになったみたいだな。亮介も見たる彼らが島にやつて来た時に共同戦線を張つたのを」

「そうでしたね」

「自分達を守る戦力が派遣部隊にはあるはずだ。心配することもないだろう。溝口のおやつさんはそういう判断に優れた人だ」

「俺もそう思います」

期待と不安を胸に俺達はダツカにあるペルセウス中隊の拠点エリアシユリーナガルの地に降り立った。

「ようこそエリアシユリーナガルへ、君達を改めて歓迎するよ」

ナレイン將軍と溝口さんが今後の行動について美羽ちゃんを交えて協議していると、あることが気になった。

（この兵士はずつとこちらを警戒してるな、この中に敵はいないのになんで。…遠

見も違和感に気づいたのか)

彼女は視線で周囲を警戒していた。

よく見るとにこやかに話す溝口さんや笑顔で談笑する竜宮島防衛隊所属の先輩達はリラックスを装いつつ鋭い目を光らせていた。

(なにに警戒しているんだ…)

その答えは『アシヨーカ』と呼ばれるこの町にある大樹のようなコアがある建物に向かう途中でわかった。

「先輩…大下先輩」

「どうした亮介」

「これってフェストウムというより、人間を警戒してますか彼等は」

「そうだろうな。装備を見る限り対人戦用のようだ。まあ人類軍も一枚岩じゃないってことだろ」

(人に襲われることがあるのか…)

竜宮島でならば考えられない光景。俺は身を引き締めた。

「亮介。お前はここの建物周辺の警備をしてくれ」

『アシヨーカ』を祀る建物に到着し、中に入ろうというときに俺は溝口さんからそう命じ

られた。

「そんな、俺も中に」

「ダメ。貴方がアショーカに接触すること、それは新たな災いを生んでしまう」

エメリーからの強い制止もあり、俺は建物を警備することになった。

（気になりますか）

中的人工智能が話しかけてくる。

（竜宮島以外のコア：気になるに決まってる）

（私に身を委ねれば、見れるかもしれないですよ）

（むしろお前の存在が原因で入れない気がするが）

（…私の存在、私の願いが妨げになっていると）

（かつて皆城乙姫が『力』と言い表したお前の『願い』が判れば…）

「亮介。集中しろよ」

いつの間にか大下先輩に話しかけられていた。

「すみません」

「いいか、常に警戒を怠るなよ」

「どちらをですか」

「…両方だ」

美羽ちゃんが『アシヨーカ』を通じて地球に接近している新たなミール『アルマイル』とコンタクトを取ったその夜

エリアシユリーナガルはフェストウムの攻撃を受けた。

第三十八話 「目覚める力、目覚めた命」

派遣部隊が竜宮島を出発し旅立ったある日、3人の幼き戦士達がお店にやって来た。

「こんにちは恵さん、お久しぶりです」

「…慧くん。久しぶり大きくなったね、いらっしやい。零央君もいつも家の花御鼻屑にしてくれてありがとうね」

「この花育てた人の想いを感じられて好きなんです、父にもよく買ってきてくれ頼まれるんですよ。てか慧この人と知り合いなのか」

「この人、姉ちゃんの同級生で昔よく遊んでもらってたんだ」

鎗木慧。今回派遣部隊の結成にあたり竜宮島の防衛力強化のために新たに選抜されたファフナーパイロットで、かつて竜宮島の防衛作戦として展開された『L計画』に参加した同級生鎗木早苗の弟さん。

御門零央。鎗木慧と同じく今回新たに選抜されたファフナーパイロットで、実家であるお菓子屋さん、よく家の花を御鼻屑にしてくれている。

そして…

「はじめまして、水鏡美三香です。わー綺麗なお花がいっぱい」

ツインテールの可愛いらしい少女は水鏡美三香、初対面だが彼女の素直な笑顔と明るさと親しみやすさですぐに打ち解けた。

「今日はどうしたの」

「里奈先輩に立上神社で貰った御守りに自分の気に入った花を入れてを入れておくと御守りの効果が高まると聞いたんです」

「えっ、そんな迷信だよ」

「いいんです。例えばそれが里奈先輩の迷信だとしても、僕らの願いが叶う可能性が上がるなら。騙されたと思ってやってみようと3人で話して決めたんです」

「そう…」（里奈ちゃん前に「私もこのお店の宣伝に協力します」って言うてくれてたけど、もしかしてこういうことなのかな…）

「なので恵さん。お邪魔してもいいですか」

「ここはお店なんだから出入りは自由だよ。どうぞ貴方達が気に入る花が揃ってればいいけど」

「ありがとうございます」

3人は無邪気な子どものように店内の花を見て回った。

しばらくして、3人は自分の気に入った花を持ってきた。

「彗くんがピンクのカスミソウ、零央くんがアンズリウム、美三香ちゃんはマツバボタン

ね…フフ」

「何か変ですか」

「ごめんなさい。昔母が言っていたことを思い出してね『人はその時の心情で花を選ぶ』って3人が選んだ花と花言葉を照らし合わせたら。なんかしっくりきちやって」

「そうなんですね。大切にします」

ウーン…。響き渡る警報音

「2人共行こう」

「おう」

「ラジャー」

「…この島をよろしくね。生きて帰ってくるんだよ」

「はい」

笑顔で店を去る3人、自分よりも年下の子達が最前線に赴く中で何も出来ない自分…悔しさが込み上げてきた。そんなことを考えていると

（貴女の役目は前線に出ることじゃない。その次の世代を育てること。悲観しないで
恵）

懐かしい声が頭に響いた。

第三十九話 「突きつけられた現実」

「溝口さんこっちはです」

美羽ちゃんが『アルマイル』とコンタクトを取ったその夜、フェストウムの襲撃を受けた。

俺達派遣部隊はナレイン將軍のご厚意で宿舎に宿泊していたため、応戦出来ず自分達の乗ってきた輸送機に急ぎ避難した。

「全員無事か」

「溝口さん達で全員です」

「まさかこんなにも早く襲撃を受けるとはね、ここのミールのご加護で襲撃は無いようなことを聞いたから驚きですわ」

「そうだな…敵さんは余程俺達の接触を阻止したいらしい」

俺はある違和感に気がついた。

「その子…美羽ちゃんですか」

「ああ、なんでもここのミールが『アルマイル』と接触させる為に成長させたんだと」

「大丈夫なんですか美羽ちゃん」

「大丈夫。今はただ眠っているだけだから」

美羽ちゃんを抱き抱える弓子さんに何故か違和感を感じた。

「弓子先生…大丈夫ですか」

「先生…私は大丈夫よ」

「そうですか…」

「とりあえず、全員無事で何よりだ。襲撃が止むまではここで待機する」

「助けに行かないのですか」

「恐らく奴等は俺達はまだあそこにいると思ってる。わざわざ見つかりに行く必要は無いからな。……この連中に任せよう」

「しかし溝口さん」

「亮介。俺達の任務は美羽ちゃんを守ることだ、目先の状況に囚われて本質を見失うな」

「…了解」

「よし、見張りの人選をするそれ以外はあまり休まらないかもしれんがここで休んでいてくれ」

「霧島先輩」

俺も話し合いに参加しに行こうとすると遠見真矢に呼び止められた。

「どうした遠見」

「お姉ちゃん…やっぱり変ですか」

「やっぱりって遠見もそう思うのか」

「なんとなくですけど」

「本人が大丈夫って言ってるし大丈夫だろ」

「そうですよね、すみません変なこと聞いて。溝口さん私も見張りやります」

（貴方の感覚は正しい）

（なんのことだ）

（今いる遠見弓子は貴方の知っている遠見弓子では無い）

（…じゃああそこにいる人は誰だ）

（それはわからない、一つ言えることはあの遠見弓子はミールの祝福を受けているとい

うことだ）

（ミールの祝福…）

「亮介、こつちにこい今後について話し合うぞ」

溝口さんに呼びとめられアイツとのコンタクトが途絶えた。

俺はアイツの言葉の意味を考えながら、話し合いに参加した。

その翌日から俺達は町の復興の手伝いをしていた。

「Dアイランドの方ありがとうございます。ここは大丈夫ですので、よろしければ他の場所を手伝って挙げてください」

「そうですか。また困ったら呼んでください」

街中を歩いているとある子ども達の集団に目がいった。

「おいお前達何してる」

子ども達の集団は1人を残し慌ててバラけた。

「大丈夫か」

「余計なお世話だ」

生意気な態度に苦笑いになる。

「アトムここにいたのかい」

年配の女性がその子のところへ走ってくる

「母さん：外で止めてくれ人が見てる」

「またそんなにボロボロになって：貴方が息子を助けてくださったのですか」

「えっ、まあ：そんなところですよ」

「ありがとうございます。この子人付き合いが苦手によく喧嘩になってしまってます」

「他所の人にそんなベラベラ話さなくていいだろ母さん」

「アトム。：すみません助けていただいたのに」

「いえ、そんな気になって声をかけただけです」

「外ではなんですから家に来てくださいお礼もしたいので」

「母さん」

「そんなお気になさらず」

「そんなこと言わずに」

結局アトムという少年の家にお邪魔することになってしまった。

「すみません。お茶まで頂いて」

「息子を助けて頂いたんですこれくらいさせてください」

「母さんコイツそんなの必要無いって言うてるんだからさつさと帰ってもらえよ」

「アトムいい加減にしなさい」

「…母さんの馬鹿」

少年は自室に引き籠ってしまった。

「すみません」

「お気になさらず…息子さんの人嫌いは深刻そうですね」

「父親を人の裏切りで亡くしてまして。本当に信じられる人があの子には…いないんです」

「…差し支えなければ教えて頂けませんか」

「2年前、あの子が6つの時です。私達3人はこことは別の場所で暮らしていました。その場所がフェストウムの襲撃を受けました。その場所は人類軍の方々の防衛も虚しく無くなりました…人の手によって」

「?!どういうことですか」

「防衛を諦めた人類軍が無差別な核攻撃を行いました。ここに来て知ったのですが『交戦規定α』と言うそうです」

無差別な核攻撃…ふと2年前の『第2次蒼穹作戦』を思い出した。

「私達は輸送機で無事脱出出来たのですが、定員オーバーで次の便に乗るはずだった夫はその核攻撃に巻き込まれて…死にました」

「…」

「あの子は言っていました『父さんはどうして助けてに来てくれたはずの人に殺されたの』とフェストウムから人類を守る人類軍に憧れていたあの子にとって、それは深い傷になりました」

返す言葉が無かった…俺の知らなかった世界の現実。人が人を殺すという竜宮島にいたら起きることの無い非情な行為

「それ以来あの子はあらゆる人から距離を取るようになりました」

「彼にはそんな過去があっただんですね…」

「すみません。こんな重たい話になってしまい」

「いえ、私が聞きたいと望んだことですから」

(…亮介、応答しろ亮介)

緊迫した溝口さんの無線が入った。

「こちら霧島。どうしましたか溝口さん」

「どうしたじゃねえ、今どこにいるすぐに戻ってこい。島に来たのとは別のアザゼル型がこここのミールを襲い出した」

窓の外を見ると…見たことの無い巨大なフェストウムが『アシヨーカ』と呼ばれているシュリーナガルのミールを襲っていた。

第四十話「希望を求めて」

その時、私は花に水をやっていた。

「椎名先輩。こんにちは」

2人の男性が店を訪ねてきた。

「総士くんと一騎くんじゃない、いらつしやい」

「こんにちは」

「珍しいわね、どうしたの」

「追加の派遣部隊として出発することになりましたので、挨拶に伺いました」

「…あまりよくないの」

「島のコア曰く、このままでは派遣部隊ごと全滅するそうです。なので僕らが『存在と無の力』と共に支援に行くことになりました」

「『存在と無の力』ってまさか…」

「はい。封印は解かれ今発進準備中です」

「二人とも大丈夫なの」

「正直わかりません。どこまで僕らの身体が持つか、ただ仲間の危機が迫っているとわ

かっついていてじつとしていいことも出来ません」

「そうよね…あの人は大丈夫かな」

「霧島先輩はこれまで幾度となくあつた理不尽な現実を克服した人です。きつと大丈夫ですよ」

「そうよね…ありがとう総士くん」

「オススメの花ないですか、皆を勇気づけられる花」

「一騎」

「一騎くん…ちよつと待ってて」

私は一輪の花を差し出した

「ネリネの花…確か『また会う日を楽しみに』でしたね」

「流石総士くん。そうよ」

「いい花ですね。俺この花を持って行きます」

「僕はこの花を届けたい」

「ラベンダー…」

「世界を助けることその先がより良い未来を創る可能性を持っていると
なるほど」

「どういうことですか」

「花一つ一つが持つ意味がわかる者同士のテクニカルな会話だ」

「そうなのか…」

首を傾げる一騎くん。私は苦笑いするしかなかった。

「手伝って頂きありがとうございました。もし霧島先輩に伝えたいことがあればお伝えしますが何かありますか」

「そうね…じゃあこれを渡して欲しいかな」

薔薇の花にピンクのカスミソウ。椎名先輩の思いのこもった素晴らしい届け物だ」

「届くのか霧島先輩にその花達の意味」

「失礼だぞ一騎。霧島先輩はお店の手伝いをされてるんだ椎名先輩の思いのこもったプレゼントが伝わらないなんてことはあり得ない。…あつ」

声に驚いたのがズブってしまった。直ぐに抱っこし落ち着かせる。

「失礼しました」

「気にしないで、すぐ機嫌治る方だから」

「可愛いですね」

「ありがとう」

「俺達の戦いがこの子達の未来のためになるんだよな」

「そうだ。その為に僕達は限られた生命を全うする責務がある」

「二人ともそこまで背負わなくてもいいのよ」

「ザインとニヒトというとてもない力を手にするんです。これくらいの覚悟は当然です」

「…気をつけてね。皆をよろしくね」

「では、行ってきます」

翌日。二人はエリアシユリーナガルに向けて飛び立った。私はそれを幼い我が子と共に家の窓から見送った。

第四十一話「救世主」

「すみません。遅れました」

「亮介か、無事で良かった。輸送機を飛ばす準備しろ」

「この状況下で飛べますか」

「むしろ今しかない。パイロットの3人がファフナーで出撃しているが敵の数が尋常じゃない、いつ狙われるかわからんからな」

「了解」

崩れゆく町、迫り来るフェストウムに必死に抵抗するペルセウス中隊のファフナー達、派遣部隊のファフナー3機マークジーベン・マークフュンフ・マークツェンも奮闘しているが状況は…劣勢であった。

（お前…ずっと助けてくれていいのか）

（日野美羽が接近する我々と対話を繰り返しているおかげで私は最低限のことしかしていませんが）

輸送機の周囲にフェストウムがあまり近づかないのには『アイツ』の力が干渉していたようだ。

(…礼を言つとく。退けそうか)

(まず困難でしょう。『彼等』が間に合えば話は変わってきますが)

(『彼等』…)

「おい、あれはどうなっているんだ」

乗員の指を指す先を見ると、人類軍のファフナー同士が撃ち合っていた。

「味方と撃ち合いしてる場合じゃないだろ」

(あれは…我々に同化された者達ですね)

よく見ると同士討ちをしている人類軍のファフナーのコックピットにフェストウムが同化していた。

「フェストウムにコントロールを奪われたのか」

「全員何かに捕まれ」

突然溝口さんの緊迫した機内通信が入る。離陸を始めていた輸送機が激しく揺れる。

「なんだ、何が起こった」

「離陸直前にフェストウムが現れて進路を妨害された、翼が折れて離陸出来なくなったな(こりゃ)」

「全員無事か」

「大丈夫そうです」

美羽ちゃんが泣いている、慰める弓子さん。

（『存在と無の力』が来た）

再びアイツの声が響く。

「溝口さん大気圏外から急速に接近する物体が」

「何だところんな時に」

「該当シグナル有照合…キャリアー・スラスター」

「キャリアー・スラスターだと…まさか」

キャリアー・スラスター。Alvisの所有する巨大なロケットで本来はフアフナークラスの巨大な物体を大気圏外に運搬するためのもの。

分解されるキャリアー・スラスター、中に入っていた物体から強力なレーザー光線が放たれる。

目にも止まらぬ速さで空を駆けるその姿…俺は一度見ている。その光景をハッキリと肉眼では確認出来なかったが着陸した姿を見て確信した。

Alvisの誇る『存在と無の力』がエリアシユリーナガルの地に降臨した。

「データ照合。マークザインとマークニヒトです」

「ザインとニヒトの封印を解いたのか、パイロットは」

「一騎と総士でしょうね。あの機体に乗れるとしたら」

「彼奴ら無茶しやがって」

マークザインとマークニヒトは第2次蒼穹作戦後その特異な力から真壁一騎と皆城総士にしか扱えず、2人がこのまま乗り続けると死んでしまうこと、分解しようにも今のAlvisの技術では機体の抵抗に遭い解体出来ないこともあり

竜宮島で封印されていた。その封印が解かれた：

(もう大丈夫でしょう)

マークザインは同化されたファフナーや人間を次々に元に戻した。マークニヒトは竜宮島を何度も窮地に追いやったその力で襲撃してきたフェストウムを滅していった。

派遣部隊とペルセウス中隊で劣勢にたたきされていた状況が

空から舞い降りた2機によって劇的に変化した。

「これが…ザルバートル・モデル」

他のファフナー部隊が建て直ったと判断したのか、2機はターゲットを親玉に変える。

目にも止まらぬ速さで周囲の敵を薙ぎ倒しながらアザゼル型『ロードランナー』に突撃してゆく

そこから始まる戦闘は最早未知の次元へと昇華していった。

第四十二話「還ってきた少女」

その時は一騎くんと総士くんが出発して暫くして訪れた。

「…いらつしやい。乙姫ちゃん」

かつて竜宮島のミールに『生と死の循環』を学んでもらうために島と一つになった少女が店にやってきた。

「…」

少女は何も返してくれない

「乙姫…ちゃん」

「椎名先輩すみません。その子は『皆城織姫』ちゃん。乙姫ちゃんではなく、新たな人格を持ったコアなんです」

慌てて走ってきた立上芹ちゃんが経緯を説明してくれた

「…わかったかしら」

「乙姫ちゃんの娘さんになる訳だ」

「…貴女達の概念で言えばそういうことね」

「ごめんなさい織姫ちゃん。椎名恵ですよろしくね」

「知ってるわ。…いいお店ね」

「ありがとう。一度クロツシングしてくれてたよね」

「ええ。あの時は目覚めていたわ」

「その時の言葉で少し救われたよ、ありがとう」

「それが島の為になることだもの当然よ…それよりも聞きたかったことがあるのでしょ。芹、席を外しなさい」

「大丈夫よ立上さんも居てくれても、秘密にしたいことでもないし」

「椎名先輩…」

「どうして派遣部隊に亮介が行くことを許したの織姫ちゃん」

「どうしてだと思う。…考えて答えは出ているのでしょ」

「亮介や乙姫ちゃんが言った『力』が関係あるの」

「霧島先輩の『力』…」

「そう。その『力』を自らのモノにするためには、より多くを学び、感じ、悩み、そして決断しなければいけない。この島で学ぶことは大方学びそして正しい判断を下してきた。貴女と共に…」

「…」

「でも、この島のことだけではダメなの。亮介はこの世界のことを知り学ぼうとしてい

る。彼が学ぶことで彼の目指すべき道が見えてより良い『力』の使い方が出来るようになるのよ」

「でも…」

「貴女の気持ちもわかるつもりよ、私は貴方達の子と近い境遇にいるのだから」

「…織姫ちゃん」

「だから信じて待ちなさい。亮介のことを」

「わかった。信じるよ亮介と織姫ちゃんを」

「それで良いわ。芹、行くわよ」

そそくさと歩いて行く織姫ちゃんに振り回されているようについてゆく立上さん

だが

「忘れ物をした」

そう言つて織姫ちゃんは店に戻ってきた。

「恵、この花をよこしなさい」

「織姫ちゃん言い方悪いよ」

「私はこの島そのものなのよ。当然よ」

織姫ちゃんの指指す先にはヤブテマリの花と葉牡丹があつた。

「この2つでいい」

「ええ、ありがとう恵」

「どういたしまして、また来てね」

「いいわよ。また来るわ、さあ行くわよ芹」

「待ってよ織姫ちゃん」

再び店を去る2人。その後ろ姿はどこか微笑ましかった。

第四十三話 「旅の始まり」

「お疲れ様。二人共よく来てくれたな。ありがとう」

アザゼル型『ロードランナー』を倒しなんとか危機を間逃れたエリアシユリーナガル。派遣部隊の皆との会話を終えた二人を個人的に労った。

「肝心のアザゼル型は逃げられました残念ながら」

「ザインの攻撃の直前にあのアザゼル型のコアは何処かへ跳びました」

「そうだったのか」

「当分は襲ってくることは無いでしょうが、油断は出来ません」

「そうか…」

「霧島先輩もご無事でなによりです」

「一騎。大丈夫か」

「まだ、機体に喰われたりはしませんよ」

「総士は遂に乗れるようになったんだな、ファフナーに」

「島を何度も滅ぼしかけた怪物ですがね」

「…良かったな」

「…ありがとうございます」

「…すまん。変な空気にしてしまった」

「問題ありません」

「霧島先輩これを」

一騎から薔薇とピンクのカスミソウを渡された。

「椎名先輩から預り物です」

「恵から…ありがとうございます」

不意に笑みが溢れた。

「この後どうするか聞いてるか」

「恐らくナレイン將軍と今後どうするか話し合いをするでしょう」

「まあ、そうだよな」

「どこか行くんですか霧島先輩」

「町の様子を見てくる。溝口さんに会ったらそう伝えてくれ」

「わかりました」

俺はあの親子を探し回った。

「アトムって誰だい」

「知らないな」

「そんな子ども見てないよ」

ここは竜宮島よりも何倍も人が多く住んでいる。こうなるのはむしろ自然だった。するといつぞやの少年達を見つけた。

「アトム、見てないよ」

「そうか…」

「僕、あつちで見たよ」

「そうか、ありがとう」

急いでその少年が指さした方へ向かう

「アトム」

彼を見つけた。

「無事だったか、お母さんは…」

そこには亡くなった方々が沢山横たわっていた。アトムは1つの横たわった人を指す。

「…僕を庇って死んだ」

かける言葉が無かった。

「母さんはまだ幸せ者だよ、フェストウムに襲われたら姿・形も残らない人も居るんだから」

少年のその目には魂が宿ってない…そう感じた。
思わず力強く抱き締めた。

「いきなりなんだよ」

「ごめん」

「なんでアンタが謝るんだよ」

理由は自分でもわからなかった。ただ後悔とアトムの心情を察するとこうせずには
いられなかった。

「止めろよ、みつともないだろ」

「…」

自然と涙が流れた、やがて今置かれた現状を小さい身体で必死に受け止めていたアト
ムの目からも雫が落ちる。

「やめて…くれよ…」

「泣いていいんだ。こういう時は」

ポーカーフェイスを装い。いつもぶつきらぼうな表情の少年はこの時ばかりは人目
を憚らず大声で泣いた。

俺はその小さな身体を精一杯受け止めることしか出来なかった。

その夜、溝口さん達がナレイン将軍と話し合い決定した内容をメンバーを集め教えてくれた。

(エリアシユリーナガルを放棄して新天地を目指す旅か…)

「なんだ悩み事か亮介」

「大下先輩。なんかえらいことになりましたね」

「そうだな。遠見の娘さんがこのミールと対話して宇宙から接近しているミールとコ
ンタクトするだけのはずだったのにな」

「そうなんですよね…」

「目的地のダツカ基地だったか、大丈夫なのかね」

「どういうことです」

「今俺達はたまたま人類軍の穏健派グループと行動してるから忘れがちだが、人類軍は
そう信用出来る組織じゃねえ」

「そうでしたね」

竜宮島はかつて何度も人類軍に攻撃されている。そんな人々と手を取り合い行動を
共にする…不思議な感覚である。

「嘆いたところで状況が変化する訳じゃないな。切り替える亮介。生きて島に帰るぞ」
「勿論です」

明朝、新たに『アシヨーカー』を根付かせる新天地を目指す旅が始まった。

第四十四話「見守る者達」

「あれ、恵先輩珍しいですねA l v i s内にいるなんて」

とある用事でA l v i s内を歩いていると、要咲良に出会った。

「息子が熱を出しちやつて、千鶴先生に診てもらってるの」

「お子さん大丈夫そうですか」

「大きな病気にはかかってないと診断受けたから安心してらわ、今寝てるから久しぶりにこの中回ろうかなつて散策してるの」

「良かったですね」

「ありがとう。ところでパイロット教官から見てもうなの新戦力は」

「各々の得意分野は全盛期の一騎や総士並のレベルの子達なので期待値は高いですね、初期の私らと違って連携もしっかりとれてますし、実戦を積みば化けると思います」

「期待の世代な訳だ」

「…はい」

「咲良ちゃんどうしたの」

「あの子達が戦うことが無いように戦ってたはずなのに、いつの間にか守られる側にい

るんですね…」

「咲良ちゃん…」

「一騎や総士、剣司みたいに戦果を挙げたパイロットならまだしも、ろくな戦果も挙げないまま引退した私が教官っていうのもなんか虚しくなってしまうて」

「…」

「能力値でいったらあの子達の方が当時の私より上ですし…」

「そんなことない」

「恵先輩」

「今より性能で劣る当時のノートウング・モデルで戦って生き残った。同化現象にあつて生命の危機に陥ったときも立ち直った。」

「…」

「『生き残った』という事実が咲良ちゃんの戦果だよ。それは戦場に赴く後輩達にとって途轍もなく大きな『希望』になっているはずだよ」

「ありがとうございます。恵先輩」

堪える涙、優しく身体を包み込む。

『私は何を残したのだろうか』

答を出したはずのジレンマが再び私の脳裏をよぎった。

「熱もだいぶ下がったし、もう大丈夫よ」

二元气に笑う我が子を見て不安は一気に消え去った。

「ありがとうございます。千鶴先生」

「どういたしまして、あつ恵ちゃん」

「はい」

「良かったら夕飯食べていかない」

「お邪魔してもよろしいのですか」

「ええ、ちよつと作りすぎちゃって一人で食べきれないの」

「…真壁司令もお招きしますか」

顔を赤くする千鶴先生

「なぜ真壁司令を」

「時々一緒に夕飯食べているって噂で聞きましたけど」

「…時々ね」

「じゃあお招きしに行きますね」

「えつ。待つて恵ちゃん」

「…いつもご馳走になってしまいすみません。遠見先生」

真壁司令に千鶴先生に私と我が子…なかなか無い組み合わせの夕食会が遠見家で開かれた。

「いいんです。1人で食べるより、皆で食べた方が美味しいですし」

「お子さんは順調に育っているようだね。椎名君」

「はい。ここ数日は体調崩してましたが、元気に育つてくれています」

「それはなによりだね」

「どうかされました。真壁司令」

「いや、こうして誰かと食卓を囲むことがいかに素晴らしいことかと感慨深くなってきました
まいまして」

「そうですね。平和な時は当たり前で意識することがないですけど、こういう当たり前
のことを当たり前に出来る日々が一刻も早く来てほしいです」

『『平和という文化を残す島』なんですよね竜宮島は』

「そうだと」

「私達の戦いに意味があるのでしょいか」

「この子供達がフェストウムの脅威とは無縁の日々を過ごせるように戦う。そう考えれば
この戦いも意味があるのではないかな」

「そうですね…」

「恵ちゃんどうかした」

「大丈夫ですよ、派遣部隊の皆」

「信じよう。彼等は幾度も困難を乗り越え、生き残った者達。今回も無事に帰ってくる
と」

何度も息子を戦場へ送り帰りを待つてきた方からの言葉には、重みがあった。

「さあ、せつかくのお夕飯ですし冷めない内に食べましょ」

三者それぞれが想いを馳せながら和やかな夕飯会が進んだ。

第四十五話 「相手を知ること」

「全部隊第5キャンプへの到着を確認しました」

「ふう、今回は襲撃は無さそうだな。どうだ皆の様子は」

「各々が大分精神的にダメージを喰らっていますね。特に深刻なのは暉です。目の前で助けられなかったことが、尾を引いているようです」

「まあ…そうなるよな」

「新たなアザゼル型…非常に厄介な敵です」

「人間の精神的な脆さを徹底的に突いてくるからな、なんとかして対策を練らねーとペルセウス中隊や避難民だけじゃなく。俺達のメンバーからもリタイアするヤツが出てきちまう」

「ええ、なんとかしないとイケません。そういえば少し前から霧島先輩の姿を見ませんが」

「ああ、亮介なら…」

「すまない。キリシマ見張り役をかって出てくれてありがとう」

俺はフェストウムの襲撃が起きてから自ら志願し派遣部隊の隊列を離れ、後方の避難民の警護部隊に加わっていた。

「えっと、ミツヒロだったか。気にするなゆつくり休んどけ。次の移動は4時間後だったか」

「そうだ、それまでには戻る」

「あまり無理するなよ」

「ありがとう。ビリーお前も休め」

ファフナーパイロットの負担を少しでも減らす…それが今の俺に出来る精一杯のことだと自分に言い聞かせた。

「なあ軍人さん。移動するのに時間がかかるなら一時的にバスの外に出てはダメか」

避難民の要望にダメだとは言えなかった。長時間の乗り物移動で何十時間も拘束され避難民達の乗るバスには尋常ではない重苦しい空気が蔓延していた。

「それはダメだ」

話を聞いていた人類軍の兵士が語尾をキツく制止しようとする。

「たまには外の空気を吸わせてくれ」

「いつ敵が来てもすぐに避難出来るように万全の態勢にする必要がある。すまないが安全が確保されたエリアに到着するまで我慢してくれ」

「どんだけこの狭い箱に居ればいいんだよ」

避難民の人々の鬱憤は暴発寸前であった。

「なああんた、5分だけでも外に出してあげられないか」

「そんなことをしても避難民に何かあったらお前責任取れるのか」

「それは…」

「余所者が口出しするんじゃない」

「余所者って今は同じ苦難の道を通り越える仲間だろ」

「自分達だけ浮かれ遊び呆けてた連中が仲間だ、ふざけるなお前達がお気楽してた間俺達とどれだけ苦しんだことか」

…思わず感情が高まってしまった。その兵士の胸ぐらを掴む

「言いたい放題言ってくれやがって、お前人類軍が俺達が苦しんでる時に何をした。お前達の一方的な理由で俺達の親は故郷を失った。ノートウング・モデルを奪うために俺達の島を占領して荒らし、フェストウムと和解をしようとしたら一方的に核攻撃までしたんだぞ」

「…」

「挙げ句の果てに俺達が築いた平和をお前達の信じる希望の可能性の為に壊されてるんだ。それをわかってて言ってるんだよな」

相手の兵士は萎縮していた。

「落ち着けキリシマ」

異変に気づいたミツヒロ達が仲裁に入る。

「……めん」

お陰で冷静さを取り戻す、皆の視線が痛かった。

「10分間、避難民の人々の外出許可が將軍より出た。各隊員は避難民のバスの半径5kmを円形に陣を敷き防衛せよとのことだ」

喜びを爆発させ避難民の人々がバスから出てきた。

「ごめんなミツヒロ」

「キリシマ。疲れが溜まってたんだなきつと休んでくれ」

「でもお前達のほうが……」

「大丈夫だ。さあ」

情けない。彼等の助けをしに来たはずなのに、結局彼等に負担をかけてしまった。

「あと、人類軍にも色々な思想がある。さっきのヤツは我々がDアイランドにしてきた所業を知らなかったんだ。許してやってくれ」

「俺も感情的になつて言い過ぎたごめん」

軽く会釈して、ミツヒロはその場を去った。

俺はバスの座席で休んでいると見覚えのある少年を見つけた。

「外でリフレッシュしないのか、アトム」

窓の外を眺めながら黄昏る少年に声をかけた。

「人が居なくなつて逆に居心地が良くなつたからいい」

「そうか」

「あんた達も色々苦勞してんだな」

「まあな、でも初めて外の世界を見て俺達の島が恵まれていることを身に染みて体感した」

「なあ、あんたはフェストウムが憎いか」

「…わからない。フェストウムが原因で沢山の大切なモノを失くしているはずだが、憎いとは思わない」

「人類軍は、さつきすごい不満が出てたけど」

「許せないと思う。けど憎いとまでは思わない…かな」

「なんで、そんなに冷静でいられるんだ」

「…なんでだろうな、アトムにとつては憎いかフェストウムも人類軍も」

「俺も…よくわからないんだ、フェストウムがいなければ父さんも母さんも死ぬことは無かつたと思うけど、別にフェストウムに対して憎いとは思わない。人類軍も信じられ

なくなっただけ、ここの人達みたいに俺が憧れた人類軍を体現した人達もいる。だからよくわからないんだ」

「俺も手伝ってやるよ、一緒に探そう。この複雑な感情の答えを」

自分の成すべきことを探す青年と自分がどうしたいのか見えなくなった少年は互いの答えを導くために手を取り合った。

第四十六話 「東の間の安らぎ」

「恵先輩お待たせしました」

その日、私は西尾里奈ちゃんと会う約束をしていた。

「こんにちわ」

笑顔で里奈ちゃんの顔を触る我が子。

「相変わらず可愛いですね。お子さん」

「ありがとうございます。佐喜さんから聞いたよ。最近大活躍なんだってね、ファフナー部隊」

「そうですねですよ。SDPっていう力が使えるようになってからフェストウムの討伐がすごくスムーズになりました」

「そんなに凄い力なの」

「はい。鎧木はなんか遠くのモノを引き寄せたり、御門は瞬間移動したり、水鏡の乗るツクヨミのイーゼスはヴェルシールドに匹敵する強度を得て、芹なんて自己再生するんですよ」

「なんか凄いわね…」

「私なんて一騎先輩みたいに武器の火力を底上げして撃てるようになりました」

「皆すごいじゃない。これなら派遣部隊の人達も安心して帰って…里奈ちゃん大丈夫」
気がつくくと、里奈ちゃん今にも寝てしまいそうな勢いだっただ。

「ふえ、すみません恵先輩。最近凄く眠たくなるんですよ。今みたいに急に睡魔が襲って来たりして」

「寝不足なの」

「むしろ日に日に睡眠時間が増えてるんですけどね、原因が全然わからなくて」

「大丈夫なの、ファフナーに乗って」

「不思議とファフナーに乗ってる時は全然眠くならないですよ」

「…」

「この前なんか、お風呂入ってたのに気がついたら鏑木の部屋に居て…」

顔を赤くする里奈ちゃん。なんとなく状況を想像したら赤面の理由がわかった。

「大変だったね…」

「ほんと、次同じことやったらあいつぶっ飛ばしますよ…あつそろそろ時間だ」

「どこか行くの」

「近い内にファフナー部隊の合宿をします。その打ち合わせを鏑木や佐喜さんとするのになってまして」

「佐喜さんも」

「今回の合宿の宿舎として、甥っ子さんが昔住んでいた空き家を貸してくださるんです。そういうえば恵先輩その甥っ子さんと同級生だったんですっけ」

「ええ、そうよ」

「どんな方だったんですか」

「里奈ちゃん覚えてないかな、生徒会長だったんだよ『将陵僚』」

「『将陵僚』……あつ、そんな名前の生徒会長いたかもしれないです。佐喜さんの甥っ子だったんですね。あまり学校で見かけたことはないですけど」

「生まれつき身体が弱くてね、学校自体来ない日が多くて、来れても早退してたりしたからね」

「そんな調子で生徒会の仕事とか出来たんですか」

「他の生徒会のメンバーで必死にサポートしたって聞いてるよ、総士くんも確かその時書記だったと思う」

「そうなんです、びっくりする位覚えてないです」

「1年の時はそんなものじゃない」

「でも、なんでその僚さんが生徒会長だったんですか」

「確か僚が欠席してた日に役員選挙があったのよ、誰も生徒会の立候補者がいなくてね推薦って形でなったの」

「それって…酷くないですか」

「その時やたら推薦してたのが亮介なのよ」

「霧島先輩酷い」

「その後なんでそんなに推薦するのか尋ねたら『学校になかなか来れない僚に居場所を作ってあげたかった』って」

「怪しいですね」

「でも実際、亮介が推薦で僚の名前出すまで『その人誰だっけ』って反応結構あったのよね」

「そうなんです…」

「当の本人はどう思ってたかはわからないけど、少なくとも亮介にとっては大切な友達だった」

「僚さんって確か…」

「そう『L計画』に参加したわ」

「『L計画』って確か隼のお姉ちゃんも参加したんですよね」

「『鏑木早苗』ね、早苗ちゃんも皆のアイドルって感じの子だったわ、今の美三香ちゃんみたいにいつもニコニコして明るい子だね。よく小さい頃は隼くんも交えて遊んでた」

「恵先輩、隼のことそんな頃から知ってたんですね。あとなんか思い出したんですけど。」

「凄く美人で優等生な方いましたよね」

「きつと『生駒祐未』ちゃんかな、僚の幼なじみでね副会長として生徒会を僚に替わってまとめてたわね。成績も優秀で才色兼備って言葉がピッタリの子だったわ。皆のマドンナって感じの子だったかな」

「その方ももしかして…」

「うん。『L計画』に参加したわ…」

「恵先輩ごめんなさい。そんなつもりは無かったですけど」

いつの間にか目から涙が流れていた。里奈ちゃんは申し訳なさそうに必死に謝っていた。

「私こそごめんね急に、そろそろ時間ですよ。頑張つてね里奈ちゃん」

「ありがとうございます恵先輩。失礼します」

「パイロット達への店の宣伝ありがとうね」

「いやーアハハはー。これからもどんどん宣伝しますね」

「誇張し過ぎないようにね」

「気をつけまーす」

里奈ちゃんは駆け足で次の約束へ、私はその後ろ姿を見送りつつ、暫くその場所を思い出に浸った。

第四十七話「訪れたそのとき」

「このままでは、部隊との距離が離されて予定日がずれてしまう」

その日、俺のいた後方部隊は悪天候が影響し予定ポイントから大幅に遅れた地点で足止めをくらっていた。

「通信もこの天気の良いで繋がらない。下手したら將軍達の部隊が俺達の位置を見失っている可能性もあるぞ」

「どうする追いつくため動くか」

「こんな暗闇の中では危険だ、將軍からも日が暮れた場合はその地点から無理に動かないようにと指示があつたら」

「でもよ、離されたらそれこそ追いつくのが難しくなるぜ」

兵士達はこの状況に決めあぐねていた。

「Mr. キリシマ。どう思う」

「俺は下手に動かないほうがいいと思うぞ、天候が回復して通信が出来るようになるまで待機でいいんじゃないか。それにここは暗闇の中動くのは危なそうだ」

「なるほどな…Mr. キリシマ何処へ」

「避難民の皆の様子を見てくるよ」

俺はその部隊の中心キャンプから避難民のキャンプへ移動した。

「…軍人がこんなところでサボっていいのか」

様子を見て回っているとアトムに話しかけられた。

「避難民のメンタルケアも大事な任務さ」

「あつそ」

心なしが最近のアトムは徐々に明るくなっている気がした。数日前には同じ年頃の子達と打ち解けようと輪に入ろうとする姿を見た。

「なあこの天気おかしくないか」

「ただの雨雲ではなさそうだよな」

「来るのかフェストウム」

「わからないが可能性はありそうだ」

「動かないのか」

「この山岳地でこの暗闇では下手に動いた方が危ない」

「そうか…なんだそれ」

不安そうな表情のアトムに俺はあるネックレスを渡した。

「あー、そのー御守りだ。島のごく一部の人しか知らない」

「…本当にか」

「本当さ」(ある意味ごく一部しか知らないし)

それはアトムとバスで話したその夜だった。

(心配で眠れませんか)

(あの少年の心の闇は深そうだからな)

(なぜ、あの少年にそこまで気をかけるのですか)

(親のいない寂しさを少しわかって挙げられるからかな)

(…)

(まあ、恵やおじさんとおばさんが居た分俺はマシなほうだけど、なんか放つとけないんだよな)

(力を貸しましょう)

(それはどうゆう…痛い)

俺の手の中に緑の結晶が出来ていた。

(これは私の一部、あの少年に持たせなさい。身体を共有する貴方が私の一部を通して少年の危機を感じ取れるようになるでしょう)

(いいのか…。ありがとう)

(今日は色々ありました。身体を休めなさい)
(そうだな…)

「これを首に掛けとけアトム。きつとこの御守りが護ってくれる。俺もきつと駆けつける」

「そうか…ありがとう」

「来ないに越したことはないけどな」

「…信じてる」

「なにか言ったか」

「別に、こんな所で油売ってないで仕事しろよ」

「つたく、相変わらず可愛くない口のききかただな」

しかし、敵はやはりこの状況を好機と捉えていた。

あなたはそこにいますか

「ファフナー部隊スクランブルだ、その他は避難民をバスへ誘導し揃い次第前に進め」
「前ってどこにだ」

「事前に共有した地図を頼りに次のキャンプ地を目指せ」

銃撃の飛び交う空、燃え上がる木々、捲れる大地、各々不安を抱き無事を祈りながら前だけを見て進んだ。

俺の無線にはやられていく兵士の声が絶え間なく聞こえてきた。

（どうやら親玉は例のミールと等しい存在のようです）

（アザゼル型か）

（前に襲撃してきた存在よりも遥かに強い力を持っています）

すると、少し離れたところで命の鼓動を感じた。

（なんだ今の感じ……まさか）

アトムに乗ったバスは横転し今にもフェストウムに襲撃されそうであった。

（助けて。Dアイランドの兄ちゃん）

一瞬、周囲のフェストウムの動きが止まった。

「全員、バスを降りろ急げ」

俺は力を振り絞り、避難誘導を試みる。

「無事かアトム」

「なんで、あんた違うバスの担当だろ」

「…俺の担当したバスは動けなくなった、生き残った人達が全力で走って逃げてる。お

前も行くぞ…危ない」

フェストウムの攻撃でアトムに乗っていたバスは炎上した。

アトムと共にひたすら走る、だが近くでの戦闘で発生したワームスファイアの衝撃波で俺達の身体は宙に舞い地面に叩きつけられた。

「ぐはあ、…アトム大丈夫か」

返事が無い。俺はアトムを背に抱え満身創痍の身体に鞭を打つ。

「このままじゃ死ぬ…そんなのはダメだ。恵とあの子が俺の帰りを待っている。俺は島に…竜宮島に帰るんだ」

再び戦闘の衝撃波で身体が飛ばされる。俺はアトムが地面に叩きつけられないよう抱き抱えた。

(……までなのか)

霞む視界。よく見るとファフナーが倒れていた。

(人類軍のファフナー…ハッ)

(ファフナーに乗れるようになるわ)

再び思い出すかつて言われた言葉…迷っている場合では無かった。

（人類軍のファフナーなら、もしかしたら）

ボロボロの身体を奮い起たせファフナーに近づく。

（コックピットの中に結晶…パイロットは同化されたのか、外部の損傷は見たところ酷くは無かった。もしかしたら）

椅子に腰かけ、アトムを身体を抱える

「頼む。起動してくれ」

ファフナーのモニターが起動する。

（よし、ここまでは起動試験の時も出来たんだ。問題はここからだ…マズイ）
フェストウムの一体がこちらの異変に気づいたのか接近してくる。

「生きて帰るんだ。俺は…俺達は…」

第四十八話 「決意の瞳」

「恵じゃないか、どうしたんだこんなところで」

「カノン。ちよつとお父さん達に挨拶したくなつてね。カノンは」

「私もだ、翔子に挨拶しに来た」

「偉いねカノンは、翔子ちゃんと実際に会つたことないのに。毎週欠かさずお参りして
て」

「母さんの大事な娘だったと聞いているからな。例え血が繋がらず、面識はなくても私
達は家族だ。なあシヨコラ」

シヨコラの鳴き声に反応して背中の我が子はケラケラと笑っている。

「動物の鳴き声に反応して泣く赤子を見たことあるが、笑う赤子は初めてだ。可愛い反
応するなお前達の子は」

「ありがとう。シヨコラも心なしか嬉しそうね」

「そうだな」

静かな風がなびく、私は沈黙を破らずにはいられなかった。

「パイロット。復帰するんだって」

「…情報が早いな。そうだ、咲良と共にレギュラーパイロットに復帰することになった」
「そんなに深刻な状態なの」

「ああ、今回の同化現象はこれまでと違い原因が全くわからない。各々が『人間としての自分から離れていく』感覚に陥っているらしい。その結果、『人ならざる者』になってしまいかもしれないという恐怖で、ここ最近ではSDPが発動出来なくなってしまうんだ」

ふと、里奈ちゃんがやたら眠くなると言っていたのを思い出した。

「それはそうだよね…」

「だが、それではダメなんだきつと。敵はこれからもどんどん強く厄介になる。私達が変わることを恐れてはいけないんだ」

「カノン…」

「だから示さないといけない。今一度『私達がなんの為に戦う』のか、後輩達の導き手として今、私は必要とされている。そんな気がするんだ」

そこには、かつて命令のままに行動し、自らの意思を持つことをやめていた少女の姿はなかった。

「…一騎や亮介のことをとやかく言えない私は、気がつけば『戦う』ことに目を向けている自分がある。…恵」

私は、強くカノンを抱き締めた。

「貴女の居場所はどこにある。だから必ず生きて戻ってきなさいよ」

「ありがとう恵」

「…どうして私の周りはこうも戦いたがるのかしら」

「…」

私の涙と同じタイミニングで、突然我が子が大泣きし始めた。

「どうしたんだ急に」

「大好きなカノンお姉ちゃんはどこかへ行っちゃうから、寂しいんだよね」

「また、そうやって赤子を使って私をからかう」

「からかったつもりは無いんだけど、島をお願いします」

「ああ、任せろ」

長い間、竜宮島の守護者として島を護り戦い続け役目を全うして一線を退いた二人の女神は、後輩達を奮い立たせ導くために

再び武器を持ち立ち上がった。

第四十九話 「渴望」

「……は」

目が覚めると見覚えのある天上がそこにはあつた。

「目が覚めましたか」

「オルガさん。ここは」

「派兵用超大型輸送機『凰』の中です。気を失つてるところを搜索隊の人達が見つけた」

「生き残れた…他の人達は」

「…残念ながら1人の少年を除いて全滅です」

「少年とは」

「霧島さんが連れ添っていた少年です。」

「よかつた」

「皆さんに知らせてきますね」

オルガさんが席を立てて俺は何かの糸が途切れたかもように眠りについた…

「おい、いつまで寝てるんだよ」

小生意気な声が聴こえる。目が覚めるとアトムがいた。

「無事でよかった」

「お陰様でな…ありがとう」

「おー亮介、目が覚めたか」

溝口さん達が様子を見に来た。

「溝口さん。ご心配おかけしました」

「本当だぜまったくよ、頼むからこれつきりにしてくれよ」

「はい」

「自分に課した最低限の任務は果たしたようだな」

「この子が無事でよかったです」

「僕悪い、このお兄ちゃんと大事な話があるんだあとで時間作るからさ席を外してくれ

ないかい」

「そうか…わかった。また見舞いに来てやるよ」

「ああ、待ってる」

「アトムくんだっけ、こっちにおいで」

オルガさんに引率され席を外すアトム。

「オルガさんから聞いたよ遠見ありがとう。見つけてくれて」

「いえ、霧島先輩フアフナーに乗れたんですか」

「…そうらしい」

その場に驚いた空気が流れる。

「本当か亮介」

「霧島先輩とアトムくん人類軍のフアフナーの中で見つかったんです」

「そうか…よかつたな」

「溝口さん…」

事情を知る溝口さんはまるで親のようにその事実を喜んでくれた。

「霧島先輩って適正が無かつたんじゃないんですか」

「暉、その認識は間違っている。むしろ適正でいえばあの当時一騎の次にパイロットとして選ばれる可能性があつたくらいだ」

「じゃあなんでパイロットにならなかつたんですか」

「『ならなかつた』じゃない『なれなかつた』んだ」

「フアフナーの起動試験でその当時あつたフアフナー全てで起動試験をしたが、原因不明の強制起動プログラム解除で全ての機体に乗れなかつたんだ」

「どういふことですか」

「『フアフナーが搭乗者を拒否』する反応をみせたんだ」

「搭乗者の拒否ってそんなことあるんですか」

「未だ原因不明だ、君達がパイロットになるまで定期的に霧島先輩は起動試験を実施したが、結果は変わらなかった。そして君達がパイロットに選抜された頃にパイロットになることを諦めたんだ」

「それが、今フアフナーに乗れたのはなんでですかね」

「それはわからない、ただ人類軍のフアフナーは僕ら竜宮島のフアフナーと違い万人向けに開発されていると聞く。一人一人に合わせる竜宮島のフアフナーに乗れなくても、人類軍のフアフナーのように適正さえあれば乗れるタイプのフアフナーなら。竜宮島の子ども達は全員乗れる可能性はある」

「その発言は心外だなミナシロ」

気がつくともツツヒロ・バートランドが来ていた。

「おい、今はこちらの作戦会議中だ」

「キリシマが目が覚めたと聞いたからお見舞いに来たが、出直します」

「心外とはどういう意味だ」

「確かに人類軍のフアフナーは貴方達のフアフナーに比べたら、搭乗対象者は多くなる。しかしキリシマの乗った『ドミニオンズ・モデル』は人類軍の限られたパイロットに与えられる高性能機だ」

「そうなのか、そこまでの情報は得ていなかった。安易な発言をしてすまない」
「わかっていただければいいです。失礼しました」

ミツヒロは足早に立ち去った。

「さて話を戻すか、亮介さんでお前フアフナーの中で見つかったんだ」

「あのキャンプでフェストウムの襲撃を受けて、移動手段であるバスを全て壊されました。俺は打開策を考えていた時にたまたま目の前に人類軍のフアフナーがありました。それでかつて狩谷先生に言われたことを思い出しました」

「狩谷って…あの狩谷か」

「はい、『島の外ならフアフナーに乗れるわ』とちようど溝口さんに竜宮島防衛部隊に誘って頂いた時です」

「そうか、そんなこと言われてたのか」

「それである少年を連れていたこともあり一か八かで乗りましたそれで…」

「生きて帰るんだ、俺は…俺達は…」

迫るフェストウムに銃撃を向けた。機体は右へ回避行動を取りながら集中砲火をす
る。

（フアフナーが動いた…ようやく動かせた。やれる…やれるぞ）

敵が消滅し初めてファフナーでフェストウムを討伐した。陸戦型のその機体で縦横無尽に戦場を駆ける。

(ついに、ついにファフナーに乗れたぞ恵)

地上に降り立つ敵を追い払った後、俺はソイツと対面した。

(こいつが例のアザゼル型：シミュレーションとたつた数分の今の初実戦の経験だけで、やれるのか…)

銃口を向けた途端…

「全身同化現象にあつただ」

「はい…。気がついたらここにいました」

「でも同化されずに生き残った…謎ですね」

「俺の記憶はそこまでしたくないです」

「そうか、いろいろ腑に落ちない点はあるが大体わかった。今日はそこで休んでろ」

「ありがとうございます」

「あとあの少年だが、将軍にお願ひして俺達のいる地点から一番近い避難民キャンプに移してもらった。だからお前はここに戻すぞ、いいな」

「わかりました。配慮してくださりありがとうございます。溝口さん」

「おう、じゃゆっくり休め」

皆席を外した。

(…お前がやったのか)

(…そうです。あのまま戦えば貴方が死ぬと思ひあえて『我々の同化』で同化されたように偽装しました。案の定攻撃されること無く一命を取り留めました)

(ありがとう。…なあんでファフナーに乗れたと思う)

(わかりませんが少くともこれまで乗ったファフナーと違いあのファフナーから『抵抗』を感じませんでした。)

(抵抗…)

(今まで乗ろうとしたファフナーは我々と一つになることに『抵抗』してきました。しかしあの時のファフナーは『抵抗』がさほど激しくなくあのファフナーが『我々』として存在することを『肯定』したと感じました)

(初めてファフナーと一体化したと)

(そう感じます)

(そうか…今回は助かった。ありがとうな)

(はい…)

もう一度乗れる日は来るのだろうかと考えていた。その日は意外に早く訪れた。

それは初めてファフナーに乗った日から5日経ったときだ

「応援要請だ」

「はい。フェストウムの襲来が予想より激しくこのままでは、防衛ラインを突破されてしまう」と

「こつちの主力がそこにいるだろう。」

「でもここが突破されてはこちらに一直線です」

「俺が行く」

「ダメで一騎、前回の戦闘で随分無茶をした。休息に勤めろ」

「このままじゃ皆全滅だ」

「僕が行きましょう。状況を一変させるならザインよりニヒトの方が早く済むでしょう」

「そうするしかないな」

「溝口さん。ナレイン将軍にファフナーを一機借りれませんか」

「…まさか亮介お前」

「俺が行きます。行かせて下さい」

「そりゃ、二人を温存出来るに越したことはないが」

「いいのですか霧島先輩」

「なんだ総士」

「お気持ちはありませんが、僕らの年齢でファフナーに乗り始めることは寿命を一気に減らす自殺行為に等しい行いです。ここまで乗らずにこれたのですから、このまま家族3人でこれからも長く生き続けるといふ選択肢もあります」

「確かに。でもここで全滅したらその未来は永遠に來なくなる」

「…」

「やれることがあるのにやらずに終わるのは嫌なんだ」

「霧島先輩…」

「行かせてくれ総士。ようやく『パイロット』として皆の…島の役に立てるんだ」

「わかりました。では霧島先輩よろしくお願いします」

「ああ、任せろ」

「亮介。無理はするなよ」

「溝口さん。わかりました」

「霧島先輩」

「一騎。本当に必要なときまで無闇に出撃しようとするな、俺達他のパイロットに任せろ」

「遠見達をお願いします」

「亮介、将軍から許可が出た。ポイントF—8地点で引き渡すそうだ。行ってこい」

「はい。行ってきます」

移動する車の中、大下先輩が運転手をかって出てくれた。

「良かったな、ファフナー乗れて」

「ようやく叶いました。長年の想いが」

「…頼んだぞ」

「はい」

ポイントの地点で人類軍のファフナー『ドミニオンズ・モデル【ガブリエル】』を引き取り俺は急ぎ前線へ向かった。

「数が多い、マズイです遠見先輩このままじゃ防衛戦が突破されます」

（地上部隊は持ちこたえているけど、空戦部隊が圧倒的に数で圧されている。あと一手あれば…）

「なんか、すごいスピードで一機人類軍のファフナーが接近して来てますよ、敵を薙ぎ払いながら」

「あの動き本当に人類軍のパイロットか、なんかファフナーと一体化してる感じが竜宮島のファフナーと似てるんだけど」

「あつ、あの機体マークジーベンに近づいて」

(有線通信…)

「誰…ですか」

「遠見。こちら霧島状況は」

「霧島先輩…どうしてまたファフナーに」

「俺にもやれる選択肢が増えた。なら俺は一番皆の助けになることがしたいと思うから。また乗ったしこれからも乗り続ける」

「…わかました。状況は…」

「了解した。遠見は空戦部隊を立て直してくれ、その時間稼ぎは俺がやる」

空を切り裂くように飛ぶ亮介のガブリエル。

「遠見先輩誰だったんですか」

「霧島先輩だった」

「霧島先輩って実戦これが2回目ですよ。すげー歴戦の猛者みたいな戦い方じゃん」

「なんか嬉しそうですね機体の動きが」

「嬉しいんだと思うよ。皆に先越されて、色々な理不尽な目にあってきたし、ファフナーにようやく乗れた時の気持ち。私もわかるな…私も皆より遅かったから」

「遠見先輩…」

(恐らく皆城君も…)

(凄いな、お前の力を引き出しても全然苦しくない)

(そうですか。それは良かった)

(お前の力で敵の動きを鈍らせて倒していくぞ。力を貸してくれ)

(わかりました)

亮介の乗るガブリエルが空の敵を混乱に陥れ、その隙に敵の親玉と思われるフェストウムを別のファフナーが撃ち取った。

混乱したフェストウムの群れがエスペラントの対話に答え撤退し窮地を脱したペルセウス中隊と派遣部隊。

フェストウム25体討伐にフェストウム撤退の要因となる働き。

亮介のファフナーでの初陣は、その場にいた多くの人々の記憶に残った。

第五十話「近付く脅威」

「ひとまず危機は脱したわね」

「この日佐喜さんが様子を見に店を訪ねてくれていた。

派遣部隊が出発してから佐喜さんは定期的に店に来て私達の心配をしてくれている。

「復帰した二人はどうですか」

「要はトルーパー・モデルを無限に増殖させる力を発現して、羽佐間は未来を読む力を発現させたみたい」

「未来を読むって凄い力ですね」

「でも、不完全らしくて、当たったり外れたりを繰り返しているのよ」

「そうなんです…」

「なんだか嫌な感じなのよね、敵の学習能力が早すぎて2人が復帰しても対策されるのも時間の問題かも」

「2人の新しい同化現象はどうなんですか」

「要は増殖によって出来た個体の全ての感覚を引き継いで感覚が麻痺してるらしいわ」

「どういうことですか」

『自分が複数いる感覚』らしいわ、どれが本当の私かわからないって叫んだこともあったって」

「カノンは」

「羽佐間はパツと見は変化を感じないけど、独りになりたがったり非戦闘時でもフアフナーに乗る時間が多くなってきたわね」

「非戦闘時も」

『やるべきことがある』って言って、半日近く乗り続けたこともあるそうよ」

（カノン…）

それぞれに起きた新同化現象。原因は突き止められないまま、ただ時間だけが過ぎていた。

そんなある日

「いらつしやいませ…どうされましたか香奈恵さん」

「久しぶりね恵ちゃん。今日はお願いがあつて来たの」

鏑木香奈恵さん。 隼さんと早苗ちゃんのお母さん、『あの日』以来顔を合わせるのを私は避けていた。

「なんですか」

「貴女にもこの書類にサインして欲しいの」

手渡された書類名には『第2次し計画実行提案書』と書いてあった。

「どうするんですかこんなのを提出して」

「これが実現すれば、今迫っている竜宮島への脅威は消え去るは。きつと」

「いやです」

「なぜ、この計画を実行出来れば多くの人達が助かるのよ」

「そんなわけないじゃないですか、これに似た計画が実行されて、作戦に参加した人達は全滅したということを私ももう知っています。僚くんや祐未ちゃん、亮介のお母さんや貴女の娘さんだって…」

「そうよ…皆いなくなつたわ。私達が生き残る為の犠牲になつたの、今がチャンスなのよ、死んでいった人達に報いる」

「それでは意味ないじゃないですか、皆私達が生き残るために…」

「私も行くはずだった。なのにここにいるの。おかしいでしょこんなの、なんで早苗が犠牲になつて私が生き残つたのよ」

「お気持ちは察します。でも過去だけでなく今を見てあげてください。隼くんが私達のために命懸けで戦ってるんです」

「貴女はいいわよね、原因不明のメモリージング不良でこの計画を知らずに生きていられたんだから。貴女だって本当はきつと…」

押し込んだ思いを吐き出てしまった。

「そうです。私も亮介も原因不明のメモリージング不良である作戦への参加を間逃れしました。他の同級生は卒業して皆知っていたのに、私達はそのせいで留年しました。そしてフェストウムが竜宮島に襲来してからようやくその事実を知りました。メモリージングではなく、Alvisの記録保管庫で」

「…」

「確かに、私は貴女の苦しみを全てはわかってあげられません。でも…でも貴女もわかりますか。皆が私達の友達がこの島を守るために命懸けで戦っていたときに何も知らず平和を謳歌していた事実を知った時の私達の心情を、わかってくれるんですか」

その場で泣き崩れる私。

「どうしたんだ恵」

口論の声を聞いたのか佐喜さんが慌てて店にやって来た。

床に落ちた書類に目をやる佐喜さん

「佐喜さん貴女も…」

「言いましたよね香奈恵さん。私はその書類に絶対サインしません。まだ諦めてないの
で」

「…そう。…お邪魔したわね恵ちゃん」

香奈恵さんはそう言い立ち去った。

「恵……」

「ごめんなさい佐喜さん。ごめんなさい」

「…なんであんたが謝るの。貴女は何も悪くないじゃない」

崩れ落ちた私を優しく包み込む佐喜さん。二人だけの夜の花屋に私の泣きじやくる
声
が
響
き
渡
つ
た。

第五十一話 「運命の地」

「霧島先輩凄いですね、初陣以来大活躍じゃないですか」

「まあな」

「霧島先輩と戦うフェストウムって急に動き鈍くなるときあるんですよ」

「そうか」

「第12キャンプまで到着してフェストウム討伐数205体。出撃して平均30体は倒していますよ。これまでファフナーでの戦闘未経験でこのペースは凄いですよ」

「なにかコツとかありますか」

「ないよ、そんなもの」

「二人とも静かに座れ、それ以上に多くの人達が犠牲になっていることを忘れるな」

「すみません。総士先輩」

「最近あまりフェストウムの襲撃なく順調だからな、浮かれるのも無理はない」

「美羽ちゃんやエスペラントのおかげです。彼女達の『対話』の力があるからこそです。その力が通じない敵がきたときに備えて、僕達は常に一定の緊張感を……」

賑やかな機内の中で俺達は次のキャンプ候補地へ向かっていた。

第13キャンプはフェストウムも同化された生物もない『フェストウムが来る前の世界』が再現されたような、自然に囲まれた美しい場所だった。

この頃になると、俺達にペルセウス中隊と派遣部隊という隔たりは薄れ、『一つの部隊』としての意識が皆に芽生え始めていた。

「カズキさん味見お願いします」「ああ、これは…もう少しこの調味料を…」

「マヤ、見てみてこれキレイでしょ」「綺麗だね。そうだ写真撮って挙げるよ」

「アキラ遊ぼう」「よし、何して遊ぼうか」

「ミナシロ、今後の展開について相談が」「いいだろう。あつちで聞こう」

「へえーヒロトの住むお家お店なんだ」「そうだけ、この旅が終わったら皆を招待してやるよ」

「ありがとうございます。Mr. ミゾグチ」「いいってことよ、他にも治して欲しいものあるやついるか」

「君も一緒に遊ぼう」「エメリーどうしよ」「折角だし遊んできなよ美羽」「うん」

（皆楽しそうだ。この一瞬が本当に過酷な旅の途中だったことを忘れているかのような笑顔だ。アトムも…よかった子ども達と遊んでいるな）

この微笑ましい光景をぼんやりと眺めていると、それに気がついたアトムに声をかけられた。

「なんか気持ち悪いぞあんな」

「ほっとけ」

「なんか…フェストウムに追われているのが嘘みたいだな」

「そうだな」

「Dアイランドはいつもこんな感じなのか」

「フェストウムが来ない時はいつもこんな感じで過ごしていたな」

「凄いな、こんな時代にこんな温かい暮らしが出来るDアイランドって」

「そうだな、竜宮島の外は例えフェストウムがそこにいなくても、常に緊張感を持ってな
いといついでなくなるかわからないもんな。そんな状況下で生き残るアトム達の方が
もっと凄いなと思うぞ」

「そうかな…」

「興味があるのか島に」

「いや、別に…」

「前々から考えていたんだが、アトム。君がよければ俺達の養子にならないか」

「養子…」

「血の繋がりは無いが家族になるってことだ」

「なんだ突然」

「まあ、俺の奥さん説得したり島の人達に掛け合ったりとやることは多いがな」

「あんた…結婚してるのか」

「そうだ。もうすぐ子どもも生まれる。だから養子になったらアトムはお兄ちゃんだ」

「家族…兄弟…」

「どうだ」

「…考えておく」

「そうか。…アトム呼ばれてるぞ」

「…ありがとう」

「なにか言ったか」

「なんも言ってねえよ」

アトムはそう言いつて遊び場に戻っていった。

その後も犠牲を出しながらも予定どうりのペースで進んでいき、あの日がやってきた。

「第19キャンプか敵が最後に襲って来る可能性がある地点についたな」

俺は一騎と総士と共に最後尾の部隊に周り、襲撃してくる可能性のあるアザゼル型に備えた。

「そうです。予定では先行隊は第23キャンプに着きダツカ基地に援軍を呼んでいるはずですよ」

「本当の敵が来るのか」

「襲うとしたらこのタイミングが一番高いでしょう」

「だから二人ともここにいるんだもんな」

「…敵フィールドの発生を確認。総員戦闘態勢」

分厚い黒雲に空が覆われている。雷の音が響く、不気味な光が地上に刺しヤツが現れた。

（あいつは、俺達が初めてファフナーに乗ったときの親玉か）

（そのようですね）

「霧島先輩は他のファフナー部隊と共に周囲の敵をお願いします。あのアザゼル型は僕と一騎がやります」

「わかった。気をつけてな」

空へ羽ばたく3機のファフナー。その内の2機は遥か上空へ向かう

（さあこい、お前達の相手は俺達だ）

俺はひたすら空の敵を撃ち落とし続けた。

（これまでの敵より攻撃性の高い群だな）

(あちらも、それだけ本気ということでしょうね)

「キリシマ流石だな、君に近付くフェストウムは一瞬怯むから隙を狙いやすい」
「ウォルターさん。どうですか地上部隊は」

「こちらは今のところ大丈夫だ、そのまま空の敵を引き付けてくれ」

「了解」(少年を探して下さい)

あいつの焦った声が引つかかる、そのあと少し痛みが走った。

(なんだ今の痛み。機体はどこもやられてないはずだが)

「おい、前方部隊がいるエリア、炎が激しく燃えてないか」

あるパイロットの通信に反応し目を向けると、先に進軍した仲間がいるはずの地点が燃えていた。

「ナレイン將軍からの緊急指令…：ダツカ基地が『交戦規定 a』を発令した可能性大、全軍直ちにキャンプ地を引き返せ…：だと」

『交戦規定 a』って俺達は敵扱いを受けているってことですか」

「どうやらそうらしい…：俺達は撤退してくる友軍の支援をするぞ」

(まさか…：避難キャンプが燃えてる。アトム)

「おいキリシマ、何処へ行く」

俺は、ウォルターさんの呼びかけを無視して、燃え上がる場所へ向かった、

(なんてことを…このキャンプはアトムのカンパブじゃない…あれは)

人類軍の爆撃機の部隊と思われる戦闘機群が移動していた。

目指した先は…『そこ』だった。

機体の出力を最大にして『そこ』へ向かう。

「よせ。止めろー」

機体の腕を伸ばす。無情にも炎の雨が『そこ』へ降り注いだ。

次の瞬間。俺は激しい『痛み』と共に気を失い。墜落した…

「キリシマ。おい、しっかりしろキリシマ」

誰かの声に反応し目が覚めた。

「ウォルターさん。俺は…」

「突然墜落したんだ何があった」

「人類軍の爆撃機を目撃して追いかけて、そしたら急に痛みが…避難民キャンプが」

急ぎ走り目と鼻の先にある『そこ』へ向かう。

「よせ。キリシマ行くんじゃない」

…目の前には焼け野原となったキャンプ跡が残っていた。

俺は必死に『彼』を探す。

(おい、お前はわかってるんだろ。アトムはアトムはどこだ)

(…)

「答えろよ」

(彼は…そこにいます)

アイツが示した場所には何も残っていない。ゆつくりと歩く

ジャリ…

という音と共に少し痛みが走った。

視線を下に向ける…そこには緑の結晶がバラバラになって落ちていた。

すぐそばには小さな紐が落ちている…

「あつ…あああ、ウワァー」

俺の叫びが夜空にこだました。

第五十二話 「それぞれの苦悩」

「そうか…そんなことが、すまない椎名くん」

一連の騒動を聞きつけたのか、真壁司令に呼ばれ私はA i v i sに赴いていた。

「顔をあげてください真壁司令」

「君には大変辛い思いをさせてしまった。これは香奈恵くん達のケアを十分に出来なかった責任者である私の責任だ」

「そんな、司令の責任だなんて」

「香奈恵くんのように、あの計画で身内を亡くした者達が『第2次L計画』なるものを立案しているのは把握していた。特にご子息を亡くした者達ほど今の現状をその計画で打破しようとする傾向がある」

「…実行するのでしようか」

「あの計画は二度と繰り返し返してはならん計画だ。しないことを約束するよ」

「信じています。真壁司令」

面会室を後にすると心なしかA i v i s内の空気が重苦しく感じた。

「あーくそ」

書類を破る音と叫び声が聞こえた。部屋を覗くと保さんが頭を抱えていた。

「どうされましたか」

「あー、椎名君かすまない驚かして、ちよつとね」

「…凄い書類の山ですね」

「ああ…。つくづく俺は『メカニック』であつて『エンジニア』ではないんだなと思わせるよ」

「それつて」

「どうしたら、パイロットの負担を減らせるファフナーを開発出来るか試行錯誤してるんだが、全然ダメでね。羽佐間さんとイアンにはカノンについてもらってるから俺がなんとしてもやり遂げないといけないんだが」

「でも保さんはこれまでも沢山のファフナー開発に携わってきたじゃないですか」

「俺は最終的に組み立てたに過ぎん。『テイターン・モデル』も『ノートウング・モデル』も設計したのは日野洋治とミツヒロ・バートランド。今の『ノートウング・モデル』をここまで改良出来たのも、紅音さんを模したフェストウムのくれた情報のおかげだ」

「保さん…」

「すまんね。時間をとらせてそろそろまた取り掛かるから一人にしてもらえるか」

「長々とお邪魔しました」

足早にその場を去り、我が子を迎えにいった。

「失礼します。千鶴先生預かって頂きありがとうございます」

「恵ちゃん……。真壁司令との話しはもういいの」

「はい。……それって新同化現象に関するレポートですか」

私は千鶴先生のパソコンを見ると、膨大なデータが打ち込まれていることに気がついた。

「そうよ。早く新しい同化現象への対処方法を解明したいのだけれど、これまでの同化現象と根本的に違うから息詰まってるわ」

「そうですか……」

「でも、必ず見つけてみせる。パイロットの皆に最悪の事態が起こる前に」

千鶴先生の中で静かに燃える決意。私は邪魔になると思い我が子を素早く引き取り、メデイカルルームを後にした。

「おっ恵。面談は終わった」

メデイカルルームを出るとぼったり佐喜さんと会った。

「佐喜さん。ありがとうございます。……珍しいですね。A l v i s の制服でいらつしやるの」

「敵のフェストウムの分析の手伝いをしてね。流石にあの格好は場違いでしょ」

「確かにそうですね。なにかわかりましたか」

「収穫はなし…お手上げよ」

「歯痒いですね」

「キツカケが欲しいところね」

「キツカケ…なに」

突然のアラート

「恵。急いで家に帰りなよ」

佐喜さんは制服を脱ぐ準備をしながら走り去る。それは派遣部隊の哨戒機が帰ってきたアラートだった。

第五十三話 「暗闇の旅路」

「大下。オルガを頼んだぞ」

「了解です。無事に島に連れて帰りますよ、溝口のおやつさんも気をつけてくださいね。あと亮介のやつ頼みます」

「こっちは任せとけ」

「では皆さんお先に失礼します」

出発する3機の派遣部隊の哨戒機。見送るメンバーに亮介はいなかった。

「おお、総士どうだお嬢ちゃん達は」

「遠見は一騎に任せました。暉はまだ疲弊してます」

「亮介は」

「溝口さん。大下先輩は」

「おう亮介。今出発したところだ」

「声を掛けてくださったのに気がつかなくて、申し訳ないことをしてしまいました」

「…そうか、もう大丈夫なのか」

「ご心配おかけしました。もう大丈夫です」

(霧島先輩…)

「これから僕達はどうするのですか」

「將軍曰く、エスペラント達が見つけた場所を目指すみたいだ。美羽ちゃんもそこを指すと言ってるから、俺達もそこまで行くことになるだろう」

「アイツら…人類軍はまた来ますかね」

「恐らくな、部隊を再編してまた襲ってくるだろう」

「そうですか」

「今のうちに休んどけ、ここからは今まで以上に厳しい旅になる」

新天地へ向かう準備を整えた矢先、思わぬアクシデントに見舞われた。

これ以上前に進めない…希望を失った人々が歩みを止めると言い始め、彼らを説得するの約1日かかってしまった。

仕切り直し再び進み始めた一同。しかし激しくなるフェストウムの襲来、味方だと思っていた人類からの執拗な襲撃、燃料も不足し始め、ついには飢えや寒さで命を落とす者も出始めた。

「また…歩みを止めた人々が、フェストウムのおとりになったそうですね」

「そうらしい。…亮介大丈夫か」

「なにがですか」

「ここ最近の戦闘での様子がいつもと違うとお嬢ちゃんが言ってたからよ、お前はファナーでの戦闘に慣れてないし無茶するなよ」

(お嬢ちゃん…遠見真矢のことですか)

「そうですね。お言葉に甘えて少し休んできます」

その足で私は彼女のもとに向かった。

「そこ…休まるのか遠見」

「霧島先輩…そうですね。色々と落ち着きます」

「少しは整理出来たのですか」

「…どうでしょう。まだモヤモヤしてます。霧島先輩はどうですか、かなり落ち込んでましたけど」

「私は大丈夫です。気持ちの整理は出来たので」

「…撃つつもりですか」

「…」

「一度ありましたよね、人類軍の襲撃で相手のファナーと対峙して戦闘不能になった相手のコックピットを狙おうとしたこと」

「よく…見てますね」

「ダメですよ霧島先輩。『そこ』にいつてはもう戻れなくなる」

「…覚えておきましょう」

「遠見。飯食うか一緒に、霧島先輩どうしたんですか」

「いえ、別に私はこれで失礼します」

「…一騎くんどうしたの霧島先輩をじっと見て」

「あの人…霧島先輩だよな」

「そう…だと思うよ。どうして」

「なんか、俺の知ってる霧島先輩じゃない気が…するんだ」

進み続ける一同。止まぬ襲撃、増える死者、やがて生き残っている者達の心も壊れ始める。互いを傷つけ合い特定の者に負の感情を集中させるあるまじき所業

エスペラントもそういった者達を含め全てを受け止めようとし、一人…また一人といなくなつた。

そんな中たどり着いた補給の地。そこはミールが乱立する「フェストウムの森」とも言える不思議な地であつた。

(ここ)は…そうですか、これが貴方達の見出だした答えなのですね。私は…)

その夜悲劇は加速した。鳴り響く銃声、彼女は愛する者を守るために再び『その』道を選んだ。

ここにある全ての負の感情が忍び込んだ者達に向けられる。

(溜まっていた負の感情が浄化されていくのを感じる…)

「ここは…美羽ちゃん」

「おかえり、亮介お兄ちゃん」

「俺は…そうか戻ってきたのか」

「うん。あの子言ってたよ『貴方が選ぶ道を信じて進む』って」

「俺の選ぶ道…」

「亮介お兄ちゃんはどうしたいの」

「俺は…」

俺が選ぶ道を美羽ちゃんに打ち明ける。美羽ちゃんは安堵した笑顔を俺に見せてくれた。

第五十四話 「愛すること」

「カノン大丈夫」

合同葬儀でカノンを見かけ私は声をかけた。

「恵。ああ大丈夫だ問題ない」

「最近メデイカルルームによく運ばれてるって聞いたけど」

「私に芽生えた力はどうやら心に大きな負荷をかけるみたいなんだ。休めば治る」

「そう…ならないんだけど」

背中の子がカノンに抱っこしてほしかったのか元気にはしゃぐ

「ごめんな、今はこれで我慢してくれ」

カノンの手が頬に触れると突然泣きじやくる。

「どうしたの。カノンお姉ちゃんだよ」

「これまで無かったカノンへの反応に私は困惑した。」

「…恵ごめんな」

「なんで謝るの、ほらよしよし」

「またな恵。また店に顔出すよ」

「う、うんまたね」

様々な人々の苦悩と葛藤の末、新同化現象の原因が判明したその夜カノンが店を訪ねてくれた。

「いらつしやい、よかったわねカノン。新同化現象の原因がわかったそうじゃない」

「ああ、これで私も自分の信じた道を進むことが出来る」

「カノン…」

「恵。あの子を見てもいいか」

「いいけど…寝てるわよ」

「寝ててもいいんだ」

私はカノンを家に上げ、寝ている我が子のもとへ連れていった。

「お前達の未来…私が守るよ」

我が子を見るカノンの後ろ姿に私は寂しきを感じた。

「ありがとう恵。私のわがまま聞いてくれて」

「わがままだなんて、いつでも会いに来てよ、この子も喜ぶわ」

「そうか。ならよかった、あと花を買いたいんだいいか、店閉めているだろう」

「大丈夫。ちょうど閉めようかなって思ったところだから」

「よかった。ありがとう」

珍しくいつも悩みながら花を選ぶカノンがこの日はすぐに決めてきた。

「この2つを買いにきた」

「珍しいわね、花を決めて買いにくるなんて」

「そうか」

「赤のポピーとカンパニユラね、誰かにお礼でもしに行くの」

「そんなところだ…。ありがとう恵、またな」

「うん、またねカノン」

なにかスツキリしたようなカノンの笑顔。私はその笑顔が凄く頭に刻みこまれた。

この年の盆祭り。私は我が子と二人で三人の灯籠を流した。

「これはね灯籠って言って、亡くなった人を弔ってるの、貴方のおじいちゃんとおばあちゃんを弔ってあげてね…って言われてもわからないよね」

にっこりと笑う我が子。上がり始める花火、眺めているとシヨコラが泣き叫ぶ。それに反応して泣きじやくる我が子…

その日、1人分の魂の質量分、竜宮島で生まれた新たな力の結晶『ゴルディアス結晶』が増えた。

そして、喫茶『楽園』のとある席には見覚えのある麦わら帽子が置かれていた…。

第五十五話 「旅の終着」

「溝口さん本当ですか、島のバードが飛んできたって」

「間違いない。俺達が目指している場所へ向かってそうだ」

「ようやく。この旅も終わるんですね」

「そうだ。だから最後まで油断せずに、必ず帰るんだ。俺達の島に」

「はい」

終わりの見えない旅路にようやく光明が注した。そう思った。

世界の現状。ここまでの出来事、出会いと別れ……。これまで知ることの無かった多くのことを感じて感じて学んだ。この体験を次の世代に語り継ぐ。それが俺のこの旅に自ら課した最後の任務。

俺の視線は、この極寒の海の前で待っているであろう竜宮島に向いていた。

「各員に告ぐ。皆も聞いていると思うがこの先でDアイランドの人達が我々を待っていてくれる可能性が判明した。ここまで多くの困難と多大なる犠牲のもとに今の我々がある。これが私からの最後の命令となる。『生き残れ』」

ナレイン將軍の合図のもと部隊が出発した。

(恵。今帰るぞ)

(敵が来ました)

(ああ。行くぞ)

「ホークアイ5行きます」

「亮介機の『ガブリエル』出撃しました」

(死ぬなよ。亮介)

「俺はここにいるぞフェストウム」

俺はひたすら空をかき回し、輸送機へ目がいかないように暴れ回った。

(一つ……二つ……三つ)

やがてこれまで執拗に俺達を追ってきた人類軍の部隊が戦場に現れる。

対峙するファフナー。敵の銃撃を冷静にかわし、相手の裏をとった。そのまま両腕を

撃ち落とす。

「なんのつもりだ」

「去れ。俺達の善意でお前を見逃してやる。これ以上続けるというのなら容赦しない」

「…なっなんだ。なんだお前は、ウワーやめろ。わかったから、わかったからヤメてくれ」

パイロットは機体から脱出しすぐに機体を破壊した。

入り乱れる戦場。

(皆大丈夫なのか)

見たことのないアザゼル型と交戦するマークニヒト、マークザインはあのアザゼル型『アビエイター』と一騎討ちをしている。

マークジーベンとマークツエンの姿は見えない：二人の状況が気になった。

(美羽達が危ない)

あいつの言葉に反応し輸送機を探すと、墜落している。

(そんな…なんで)

輸送機へ人類軍のファフナーが数機近づいているのが、目に入った。

「させるかー」

急いで機体を向かわせる。

「へっ、あばよ同化されたDアイランドの人間共」

「溝口隊長マズイです人類軍のファフナーがこちらに」

「皆の避難を急がせる」(くそ…ここまで迫り着いたのに最後の最後で任務を果たせないのか、ちくしょうが)

「ここに居るのは。お前達と同じ人間だ、お前達は本当に人間か」

「なにか喚いてるが聞こえねーよおっさん…なんだこのファフナー突っ込んで来やがった」

「人類軍のファフナー…この機体は亮介」

「やらせるかよ」

（2方向からの同時攻撃。避けたら後ろの溝口さん達がやられる）

被弾する『ガブリエル』好機と見た1機が再び視線を輸送機へ向ける。それに気がついた『ガブリエル』はすぐさま砲撃し武装ごと撃ち落とす。

しかし

もう1機がルガーグリップを突き刺し突撃を敢行…『ガブリエル』の胴体を貫いた。

「亮介ー」

溝口の悲痛な叫びが響き渡る。無情にも『ガブリエル』は海の底へと沈んでいった…

第五十六話 「悲しき合流」

カノンの遺した新設計のファフナー『エインヘリアル・モデル』に改修したファフナー部隊は、アザゼル型『ウオーカー』による大規模襲来を、剣司くんのパイロット復帰、美三香ちゃんの結晶化そして『春日井甲洋』の奇跡とも言える復活で守り抜くことが出来た。

「申し訳ないわね恵さん。子育てで大変なところで」

「大丈夫ですよ千鶴先生。島の危機に私も一人の島民として役にたちたいと思っていたので良かったです」

ウオーカーの大規模襲来の際に、竜宮島が大きなダメージを受けたことで島の環境維持装置が機能不全となり、過去に核の後遺症に悩まされた人々の症状が悪化したため人員不足となった。

その関係で私にも医療スタッフとして手伝って欲しいと連絡があり、我が子と共に A l v i s 内部で一時的に部屋を借りて生活していた。

私が事中はアルベリヒト機関出身のスタッフの人達に預けている。

竜宮島が派遣部隊を迎えに北へ移動することを決めた時、私はお墓参りに行って

た。

お墓に着き、目的の墓石に行こうとすると一人の男性が立っていた。

「春日井くん……こんにちは」

彼は軽く会釈を返すと

「守るよ、この島を」

と目の前の墓石に言いその場を去った。彼が立っていた場所は私の目的の場所だった。

（カノンありがとう。貴女のおかげで竜宮島は危機を脱したわ、これから貴女が示した座標へ島を移動させることになったの。亮介……皆は無事だよ。きつと無事だよ……そうだよ。ね、私、信じてる。皆と亮介を）

それから暫くして、カノンの示した座標に近付いた際に、私はブルクを訪ねていた。

「恵さん、どうしたんですか」

「なんか、皆を労いたくなつて来ちゃった。彗くんどう調子は」

「新ファフナーのおかげでだいぶ楽になりました」

「よかつたね……ご両親との仲戻せて」

「恵さんも母さんに色々言ってくれたと聞きました。ありがとうございました」

「そんな…私は愚痴を溢したただけだから」

「少なくとも、母さんになにかしらの影響はあったと思います。本当にありがとうございます
いました」

「うん…皆をよろしくね」

「はい。今度こそ救ってみせます」

「恵先輩、いいんですか。ここに居て」

「里奈ちゃん。うん千鶴先生にも許可はもらってる」

「労いに来てくれたの初めてじゃないですか」

「そうかな…皆をよろしくね」

「はい」

「劍司くん。大丈夫」

「恵先輩。はいカノンのおかげでジークフリートとスレイプニール両システム起動して
も問題ありません」

「そう…よかった」

「…亮介先輩は強い人です。きっと大丈夫ですよ」

「うん…そうだね」

「帰ってきてもらわないと、貴重な父親談が聞けなくなっちゃいますし」

「そうだね。あの人帰ってきたらそう言っとく」

「では、いつてきます」

ファフナー部隊は座標へ進撃した。

「どんな状況ですかね…」

「フェストウムだけでなく、人類軍にも追われているそうだし、あまりいい状況ではないのは確かだね。私はいつでも派遣部隊を受け入れられるように準備するわよ」

「はい」

「CDCより各員へ、派遣部隊の救助を確認。直ちに手当て及び保護にかかってください」

「行くわよ恵ちゃん」

「はい。千鶴先生」

救助者の手当てが始まる。多くの人達が怪我を完治出来ず、またともに食事が摂れていないのか衰弱していた。

ここまでの道のりの凄まじさを肌で感じる。

ある程度手当てが終わった時、

千鶴先生は既に、美羽ちゃん達を出迎えに行っていた。

「遠見先生より『恵さんもここまで終わったなら引き継いで出迎えに行ってもいいよ』と伝

言を預かっていきます」

「わかったわ、ありがとう」

私は仕事を終わらせ急ぎ出迎えに向かう。

溝口さんを見つけると、舞さんが今にも泣き崩れそうな表情でそれを陣内さんが支える形でこちらに歩いて来ていた。

私は陣内さんに声をかけられた気がしたが一目散に溝口さんのもとへ向かった。

「溝口さん。ご無事で良かったです」

「…恵ちゃん」

どこか表情の冴えない溝口さん。

「亮介はどこですか」

「亮介は…俺達を庇ってやられちゃった…」

「えっ…」

急に気が動転し、足下がふらつく。溝口さんの丈夫な身体で受け止められる。

「恵ちゃん。すまん」

私の目の前は真っ暗になった。

第五十七話 「遺された者」

「ハハハは…」

気がつくとは私はメデイカルルームのベットの上にあった。

「気がついた、恵」

「佐喜さん…」

「…溝口さんに会って亮介の居場所を聞いて倒れたんだよ。覚えている」

「えっ、あつ…本当なんですか、亮介がやられたつて」

「…本当だ、俺の目の前で俺達を庇って敵にやられた」

「溝口さん今は」

「そんな…なんで、戦闘機で出てたんですか」

「フアフナーに乗ったんだあいつ」

耳を疑う言葉が溝口さんから出た。

「亮介が…フアフナーに」

「ああ、この旅の途中、パイロット不足に陥った時にあいつが一か八かで試したら、乗れたんだ。人類軍のフアフナーに」

「亮介が…フアフナーに…そうですね」

何故だか今でもわからない。この時私は一瞬『悲しみ』というよりも『感激』していた。

「恵…」

「よかつたね亮介…ようやく乗れたんだねフアフナーに…」

「恵。もういいよ、今はゆっくり休んで何も考えないで」

「そうか…亮介…やっと叶ったんだね…やっと」

「メデイカルルームへ、恵ちゃんのバイタルが異常だ。すぐに来てくれ」

私はまたそこで目の前が真っ暗になった。

目が覚めると、少女が一人で立っていた。

「織姫ちゃん…」

「受け入れなさい、現実を。そして信じなさい、『希望』という可能性を」

そう言い残しコアは病室を後にした。

「失礼します」

その後エメリーちゃんと美羽ちゃんが来てくれた。

「恵お姉ちゃん大丈夫」

「ありがとう美羽ちゃん。もう大丈夫」

「コアはなんと」

「『希望』を信じてって」

「そうですか…」

突然エメリーちゃんが頭を下げた。

「貴方のおかげで私達は無事生き残ることが出来た。この旅を先導してきた者として皆を代表して言わせてください。ありがとうございます」

「私はなにもしてないから」

「貴女の大事な人に何度も命を救われました」

「そっか」

「多くの者が彼の決意に感謝しています。皆を代表してありがとうございます
いい」

「貴女達はこれからどうするの」

「新天地に『アシヨーカ』を根づかせます」

「新天地…」

「『海神島』と呼ばれた『第3 A l v i s』です」

その後二人はこの長い旅路がどんな旅だったのかをお話ししてくれた。どうやら辛いことばかりで無く、とても意義のある旅だったようだ。

一人が病室を離れると少しして総士くんがやってきた。

「お身体はどうですか」

「大丈夫。ありがとう」

「すみません」

「…彼が望んだんでしょ。そうすることを」

「止めることが出来ませんでした」

「貴方が責任を感じる必要は無いのよ総士くん。むしろありがとう。亮介の望みを叶えさせてくれて」

「恵先輩…」

「これからまた島を出るんですって」

「はい。拐われた遠見と広登を連れ戻しに人類軍との交渉へ挑みます」

「気をつけてね」

「必ず連れ戻します」

総士くんは再び島を離れた。囚われた同胞を救うために

(溝口さんも一緒に行っちゃったか…ちゃんとお話したかったな)

総士くん達が出発している間にも『第3 A l v i s』へ上陸作戦の準備が着々と進められていた。

第五十八話「新天地へ」

「暉のやつ、ご飯をわしづかみで食べようとするんです。本当ビックリしましたよ」

あれから数日が経ち、私はメディカルルームから退院し、A l i v i s の部屋に戻った。

「どうですか、恵先輩調子は」

「もう大丈夫よ、ありがとう里奈ちゃん」

「霧島先輩は…残念です」

「…うん。正直まだ完全には受け入れられてないかな」

「そうですね、暉が同化現象末期寸前で戻ってきた時の私が不安でいっぱいだったのに、そう簡単には受け止めきれませんよね」

「でも、いつまでもよくよくしていられないわ、あいつの分も精一杯生きないとこの子と二人で」

「恵先輩…」

「つもう、暗い話はこのままで。そういえば里奈ちゃん達また乗るんだって、『ゼロファフナー』」

『ゼロファフナー』 人類がフェストウムに対抗するために産み出した最初のファフ

ナー。正式にはファフナー・エーギルモデル。アルヴィス製ファフナー第一世代モデル。

最初のパイロットは里奈ちゃん達のご両親であったが起動実験の失敗によりご両親は亡くなり「実戦モデル」開発計画は凍結した。半摺座状態で長らくアルヴィスの補助システムとして供用されてきたが、第二次蒼穹作戦の時に封印が解かれ、里奈ちゃんと暉くんが搭乗した。

そしてこの度第3 A i v i s 上陸作戦にて再び二人が搭乗し作戦に参加することが決まった。

「はい。この前の戦いであのアザゼル型のコアをマークノインの出力では完全に破壊しきれなかったので今度こそぶっ壊してやりますよ」

「ゼロファフナーって複座式だよね、暉くん大丈夫なのファフナーに乗って」

「…本人が志願してるんでなんとも言えないです。暉のSDPも私と同じ『増幅』みたいなんで乗ることになりましたけど…自分が末期になったことわかってるんだか」

「そっか…やるせないね」

「…あつ時間なのでそろそろ行きますね恵先輩」

「気をつけてね」

「いってきます」

作戦直前。A i v i s内を歩いていると、とある部屋を覗く暉くんを見つけた。

「暉くん。そろそろ作戦じゃないの」

「恵先輩…そうです。今から行きます」

「里奈ちゃん待ってるから早く行きな。…確かここって一騎くんの治療室だよな」

「はい。一騎先輩に決意表明を勝手にしてました」

一騎くんは先の合流でアザゼル型『アビエイター』と一騎討ちをし敵の同化に成功したものの、敵の自爆行為に巻き込まれマークザインの『フェンリル』が作動。辛うじてマークザインに守られたのか身体は残ったが昏睡状態にいた。

「俺。一騎先輩のこと尊敬してますけど、負けたくないんで」

「身体は大丈夫なの。同化現象末期だって聞いたよ」

「治療受けたんで問題ありませんよ。それに決めたんです。俺も広登と一緒に竜宮島の平和を世界に伝えるんだって。だからまだ死ぬ訳にはいかないんです」

「そっか…頑張ってるね」

「ありがとうございます恵さん。行ってきます」

始まった上陸作戦。知らぬ間に別の存在の手に墜ちていたアザゼル型『ウォーカー』が、ゼロファフナーとアマテラスの活躍で撃破。ディアブロ型の出現でファフナー部隊が乗っ取られ全滅の危機に瀕したところで

一騎くんが覚醒して復活。蘇ったマークザインと共に戦場を駆け敵を退き上陸作戦は成功した。

しかし、苦悩の旅を乗り越え大きく成長した青年はもう一方の同化を引き受け旅立った。願いを込めた御守りを残して…

第五十九話「前を向く」

「どう里奈ちゃん調子は」

「恵先輩。立場が反対になっちゃいましたね」

私は先の上陸作戦で意識を失った里奈ちゃんのお見舞いに来ていた。

「暉のヤツ…いっちゃいました」

「うん。聞いた」

「…こういう気持ちだったんですね恵先輩」

「多分そうだと思う」

「あのバカ…私を置いてかないでよ…」

腕で顔を隠す里奈ちゃん。私はそつと席を外した。

メデイカルルームを出ると三人にばったりと会った。

「お帰りなさい。総士くん、真矢ちゃん、一騎くん」

「ただいま、戻りました」

「恵先輩。ただいま」

「ただいま。恵先輩」

「どこへ行くの」

「立上とある約束をしていたので、その報告へ向かいます」

「そっか、無事に皆…」

重い表情の三人。私はそれ以上触れなかった。

「ごめんね。邪魔して」

「邪魔なんてそんな」

「じゃ、私用事あるからまたね。真矢ちゃんまた落ち着いたらあの子抱いて挙げてね」

「…はい」

その時の真矢ちゃんはいつもの笑顔もなくひたすら思い悩んでいるように見えた。

私はある人を探した。

(いた溝口さん…また後にしておこう)

自室に戻り少し経った時

「恵ちゃん。ちよつといいか」

わざわざ溝口さんが来てくれた。

「溝口さんすみません。わざわざ」

「ありがたいな恵ちゃん。気を利かせてくれて」

「私がお会いしに行ったの気づいてくれてたんですね」

「ちらつと顔が見えたからな、俺に用事か」

「そうですね…」

「俺のことなら気にしなくていい。気持ちの整理はついたみたいだな」

「まだ全てを受け止めれた訳ではありませんけどね」

「広登のところよりは、落ち着いて話せそうだな」

「…教えてください溝口さん。あの人の…亮介の歩みを」

溝口さんは丁寧に言葉を選びながら、この壮大な旅での亮介を語ってくれた。

「そんな少年と」

「ああ、やたら気にかけていてな、なにか思うところがあつたみたいだったな。結局はその子は守りきれなかった」

「そうなんですね…」

「その少年との出会いがきっかけで再び亮介がファフナーに乗る挑戦を決意したんだ」

「そしてようやく、乗れたんですね。ファフナーに」

「人類軍の余りモノだったがな…凄く嬉しそうだったよ」

「ですよ、私もようやく彼がファフナーに乗れたという事実が自分のことのように嬉し…」

「…その少年の死が一時亮介を苦しめたが、それまでファフナーでの実戦経験無い中で

総討伐数は他のファフナーパイロットとそんなに差はないからな。凄い活躍だったよ、生存した避難民も亮介の活躍に感謝してたよ」

「そして最後まで生き残った」

「ああ、だが最後の最後に俺達を庇って…クソ、俺はまた亮介に助けられちゃった」

そう語る溝口さんの目は潤んでいた。

「…あれすみません。おかしいな…」

「おかしくなんてないさ、あいつは本当に幸せ者だな。こんなに自分のことを想ってくれるパートナーに巡り逢えて」

「溝口さん…」

「亮介に生かして貰ったこの命。必ず君ら親子を守る為に全力を捧げるよ」

「溝口さんは…いなくならないでくださいね」

「伊達に、日本自衛軍時代から生き延びてるからな、心配ないさ。でもありがとうな恵ちゃん」

そう言つて部屋を出る溝口さんの背中では遅しかった。

第六十話 「記憶と記録」

残りのアザゼル型『ベイグラント』と人類軍連合軍との決戦を純粋ミール『アルタイル』襲来の日と予測したA l v i sはその日に向けて準備を整えていた。

(今は一騎くん達が成人式か：私ももう1年経つのか)

「あの…真壁司令、何故成人式が私達二人なのですか。私達の同級生はまだ居ますよね」
私達も1年前の今頃成人式を祝ってもらっていた。

「実はこの成人式は君達しか受けられる対象者がいないんだ」

「どういうことですか」

「この成人式はA l v i sの全権限を開示し、成人した君達に託す儀式的な意味もある。そのためA l v i sでも中心的な役割で活動している限られた者達にしか行っていないんだ」

「それが今年は俺と恵の2人だけと…」

「そうだ…。安心してくれたまえ、かつての我々の故郷でやっていた本来の成人式もこのあとちゃんと開くその式は君達の同級生全員参加だ」

「そうですか。良かった」

「ところで彼らはまだかね」

「彼ら…」

「遅くなりました」

現れたのは慧くんだった。

「あれ、慧くんじゃないどうしたの」

「おつ、お久しぶりです恵さん、えつとなんかお願いされたので持ってきました」

白い包みから出てきたのは…

「早苗ちゃんの…」

早苗ちゃんの写真であった。

「鈴木家を説得するのが一苦勞で、慧くんにお願いしました」

佐喜さんも遅れてやってきた。

「佐喜さんどうしたんですか」

「どうしたも、こうしたもこれの為に親御さんへお願いして回ってたのよ」

佐喜さんの手には僚さんと祐未ちゃん他にもあの計画に参加した私達の同級生の写

真があった。

「彼等も我々と共に戦ったA i v i sの一員だ。君達と共に本来執り行うはずであった

式を挙げようと提案があつて承諾した」

「提案つて…」

「君達はそれを望むかね」

「勿論です」

「お気遣いありがとうございます。皆さん」

「恵…恵どうしたのブーツとして」

「佐喜さん。すみません一騎くん達成人式かと思つたら去年の成人式を思い出してしま
います」

「…早い者ね」

「良かったですね、一騎くん達大勢で祝えて」

「これも、私達が痛みを伴いながらも積み重ねた成果ね」

「はい…」

「さあ休んでいる暇は無いわ、いつ敵が攻めて来ても守れるように作業を進めましょ」

「そうですね。…この席も懐かしい」

「そういえば恵がCDCで作業するのいつ振り」

「カノン達がこの島の生活に慣れるまでちよくちよく」

やってたので5年振りですかね」

「久しぶりだからって容赦なく作業与えていくからね」

「程々にお願ひします。佐喜さん」

「ほんと…佐喜さん容赦なく仕事与えてきたな」

久しぶりの仕事を終え自室に戻ろうとすると

「恵ちゃん。ごめんなさい手空いてる」

「千鶴先生。どうしましたか」

「ちよつと手伝ってほしいの」

「大丈夫ですよ。ちようどうちの子も引き取りに行こうと思ってましたし」

「そう。ありがとうこのメディカル資料をまとめて欲しいの、私は今いる患者のメディ

カルチェックがあるからそちらのフォロー出来ないけど、よろしくね」

「わかりました」

その資料は核の後遺症に悩まされている人々の診断記録が中心だった。

だが1つ他の記録とは一線を引く記録が混じっていた。

『霧島亮介のファフナー不適合によるフェストウム因子の因果関係』

（亮介あの頃本当に毎日のように起動試験してたんだ。1日おきに検査記録がある…千

鶴先生に突然同化現象に襲われること結構早くに相談してたんだ。家出した頃には千鶴先生もそのこと把握してる)

読み進めると千鶴先生の立てた1つの仮説が出てきた。

【当人の要望により同化現象のリスクがありながらも起動試験とメデイカルチェックを行っているが、相変わらずファフナーは起動せず、身体にも異常は見当たらない。適性検査は問題なくパスしているのに起動出来ないのは何故か。考えられるのは、我々のファフナーは高度な機体との同化で一個人の専用機化される傾向があるため機体と強固な同化が出来なかった。或いは彼が持つフェストウム因子に機体との同化を妨げる因子が形成されている可能性である】

(同化を妨げるフェストウム因子：亮介が言っていた『力』と関係あるのかな)

「恵さん。ありがとうね、助かったわ」

気がつくとき千鶴先生は作業を終えて戻って来ていた。

「すみません。勝手に」

「大丈夫よ特別秘密にすることももないし」

「こんなにも起動試験繰り返し返してたんですね。亮介」

「ええ、結局彼の望みを叶えて挙げることが出来なかったわ」

「きつとき千鶴先生の想いは彼に伝わったと思います」

「だといいわ…原因も仮説は立てたけれども突き止めるまでは出来なかった」
「前に亮介言っていました。乙姫ちゃんに亮介に備わった『力』が原因でファフナーに乗れないんだと言われたと」

『『力』…SDPの発現と関係があるのかしら」

「どうですかね」

「調べようにも本人がいないのでは…はい私です」

CDCから千鶴先生に通信が入った。

「こちらは彼女のおかげで大丈夫です。…はいわかりました、本人に伝えます。…千鶴さんCDCで佐喜さんが呼んでるわ。こちらは大丈夫だから行ってあげて」

「わかりました。失礼します」

その後はCDCに付きつきりとなり、決戦の日を迎えた。

第六十一話「決戦」

竜宮島と海神島の周辺に展開するアザゼル型『ベイグラント』と人類軍の連合軍。

「これより第4次蒼穹作戦を開始する」

真壁司令の号令のもと展開するファフナー部隊

作戦の要である西尾里奈と鎬木棼の乗る『ゼロ・ファフナー』が鎬木棼のSDPで上空にいる『ベイグラント』を地上に落とそうと試みる。

押し寄せる連合軍もエインヘリアル・モデルに改修されたファフナー部隊に返り討ちにあい。『ベイグラント』に同化されたアザゼル型『クローラー』も真壁一騎のマークザイン。皆城総士のマークニヒト。春日井甲洋のマークファイア。来栖操のマークドライツウエンの最強4人衆が撃破に成功した。

その時私はA l v i sの右翼艦Rボートである作業の手伝いをしていた。

それは第4次蒼穹作戦が始まる半日前のこと

CDCで作業をしていると、佐喜さんにある資料を読んでおくように言われた。

「佐喜さん『プランδ（デルタ）』ってなんですか」

「『プランδ』はね、正式名称「PLAN DIVISION PHASE EXODU

S」。A i v i s がメインボート、Rボート、Lボートにより構成されている性質を利用して、RボートとLボートに島民を乗せて一時的に撤退して、体制を整えた後に島を奪還する、「L計画」とは逆の性質を有するプランよ。」

「…竜宮島を棄てるのですか」

「そうじゃないわ。今回襲来するとされる純粹ミール『アルタイル』の力は未知数よ。万が一今の現有戦力で竜宮島を守りきれない場合の危機回避策。私と澄美さんが中心となって立案したんだけど、私は作戦時CDCに付きつきりで澄美さんは核の後遺症が重度になって動けないじゃない。だから作戦時に恵、貴女がプラン進行準備のリーダーとして進めて欲しいの」

「…わかりました。『プランδ』遂行されないことを願っています」

「ありがとうございます」

「佐喜さん。Rボートの『プランδ』実行準備完了しました。これからLボートの最終チェックに向かいます」

「了解。ありがとうございます報告ではLボート側の進行率80%と聞いてるわ。焦らなくていいからね」

「わかりました」

佐喜さんの通信のから随時流れる作戦状況。どうやら『ゼロファフナー』のSDPが『ベイグラント』を捉え海神島に落下させることに成功したようだ。

更にこれまでの竜宮島の研究成果の情報を乗せた島のバードが人類軍の艦隊に到着し情報を開示。多くの部隊が竜宮島への攻撃を止め、フェストウム群へ攻撃対象を切り替えた。

しかしここから不穏な情報が流れてきた。

敵のザルバートル・モデル『マークレゾン』が海神島に上陸し海神島を守っていたファフナー部隊が全機戦闘不能に追い込まれた。

緊迫した情勢：『アシヨーカ』が海神島に根付いたと一報が入る。マークレゾンを上空に追いやり異次元の戦闘を繰り広げるザルバートル・モデルの3機

そしてその時が訪れた。

『アルマイル』と思われる飛翔体が大気圏を突入。この海域に接近してきました」

CDCのその一報から急に情報が入らなくなる。どうやら通信を遮断してしまう程の強大な力を持っているようだ。

CDCからの通信途絶から30分後に入ってきたのは、最高レベルの機密情報網を使つて入ってきた。

『『プランδ』を実行する』

「恵聞こえる。手筈通りに進めて」

「佐喜さん。どうしてですか」

「…コアが今の我々の力では『アルタイル』を有益な存在に変換することが困難だと断言したわ」

「そんな…織姫ちゃん」

「だからコアが『アルタイル』を竜宮島で眠られて、『アルタイル』を変えることの出来る『力』が芽生えるまで潜航して封印することになったわ」

「織姫ちゃんは…」

「…島に命を還すそうよ」

「そんな…そんなのって」

「彼女が視た一番可能性がある未来なのこれが、無駄にしないためにも急いで」

「わかりました…」

手筈通りに島民を各ボートへ避難させる。

全島民の避難が完了し間もなくして最後にCDCの面々がボートに乗り込んだ。

「椎名くん。素晴らしい手際であった。ありがとう」

「いえ…真壁司令。帰ってこれますよね。竜宮島に」

「勿論だとも。椎名くんはゆっくり休みたまえ、お子さんが待っているだろう」

「はい」

「恵さん。お疲れ様」

「千鶴先生。ありがとうございます。面倒を見て頂いて」

「力になれたのなら良かったわ」

「ボートが起動する音が艦内に響く。暫くして真壁司令の艦内通信が入る。」

「全島民に告ぐ。これは滅びでは無い、我々は必ず故郷に還る」

「竜宮島の防衛圏内から出ようというタイミングで『ベイグラント』の残党が接近しているという不穏な情報が入る。」

「しかし…その情報のあと何事も無かったかのように艦内が静かになった。」

「不意になる通信音。千鶴先生が応対する。」

「恵さん。将陵さんが呼んでるわCDCに来て欲しいって…お子さんと一緒に」

「はっ…はい」

「我が子連れてCDCに向かうことに疑問を抱きながらもCDCに入る。」

「失礼します」

「凄く静かな艦内」

「あの…どうかしましたか」

「恵。ただいま」

「えっ…」

モニターにはいなくなつたはずの彼が映っていた。

第六十二話「追憶：叶」

(ここ)は…どこだ。俺はそうだ溝口さん達を庇ってやられたんだ。溝口さん達は無事に島についたかな…)

広がる真つ暗な世界に亮介はいた。

(アイツの声も聞こえない。…何度も奇跡的に助かったけど今回は流石にダメかな)

(つたく久しぶりに顔を見れたと思っただけならなんて情けない顔してんだい亮介)

どこからか懐かしい声が聞こえる。

(ここだ、ここ)

振り返ると一人の女性がいた。

(もしかして…母さん)

(あつたりー…じゃないわ、母の顔忘れてんじゃないわよ)

(いや、だって母さんは…)

(ここはあんたも何度か来たことのある場所よ。『存在と無の地平線』あんたは今そこにいる)

(『存在と無の地平線』ってことはあいつは)

(あいつ…もしかしてこの子のこと)

母の隣に1つの緑の結晶が現れた。

(私の行いがこんな副産物を産み出していたとはね)

(どういうことだよ、何がなんだかわからないよ)

(うーん。そうね、それもそうねじゃあ亮介あんたが聞きたいこと整理して質問しなさい)

(相変わらず自分勝手だな…まず俺とこいつ、あと母さんはどういう状況なんだ)

(まずはあんたも私も皆のいる世界で肉体は既に消滅してるわ、あんたは乗ってたファナーで機体ごと海の底。私はだいぶ前に脱出挺で潰されたわ)

(母さんはあの計画でギリギリまで生き残ったの)

(ええ。でもそこで想定外の事態が起きてね、当時はまだ海の中では活動出来ないと言われていたフェストウムがいたのよ。僚と祐未のファナーはだいぶ離れてたからね。間に合わずやられたよ…二人は元氣)

(二人とも島には戻ってないよ…結局誰一人帰って来なかった)

(そっか…私はその時運が良いのか悪いのかフェストウムに同化されてね気がついたらこの世界をさ迷ってた)

(なんで)

（んなもん私にもわからないわよ。まあ考えられるとすれば私もあの人と近い考えを持ってたからなのかなとは思うわ）

（あの人…）

（真壁紅音。あの方は『フェストウムの気持ち』を理解しようとして、理解したと聞いたわ。私は『フェストウムを知りたい』という探究心が強かったからね。フェストウムを理解は出来なかつたけど強い探究心にフェストウムが興味を持ったのが、私がここにいる理由かもね）

（フェストウムを知る…）

（私はアルベリヒト機関出身で A i v i s での任務は『フェストウムの同化現象の究明』だったから、必然的にフェストウムを理解する必要があつたのよ）

（なんで『L計画』に参加したの）

（それは…贖罪かな）

（贖罪って…）

（あなたのメモリージングが上手く行かなかつた理由が大きく関係してるのよ）

（なんで知ってるんだ、俺のメモリージングが上手くいかなかつたの）

（それは…）

（なんで黙るんだよ）

(霧島叶が生まれる前の人工子宮にいた貴方の遺伝子を改竄したからよ)

突然俺の後ろから声がした。振り向くと少女がじつとこちらを見ていた。

(皆城乙姫…)

(それは違うわ亮介。皆城乙姫はもういない。その子は皆城乙姫によって『生と死の循環』を学んだ島のミールから新たに生まれた竜宮島のコアよ)

(島の人々は私を『皆城織姫』と呼んでるわ。貴方もそう呼びなさい亮介)
(知ってるのかその出来事)

(私は島のコア。当然よ。霧島叶が話すのを躊躇うのなら私が見せてあげるわ)
(いや、ちゃんと話すわ、私の口から)

そうして母の口から俺に起きていた現象の真実が語られた。

第六十三話 「追憶：真実」

（貴方が生まれる前ね、私はアルベリヒト機関の子ども達が生まれる人工子宮の管理責任者をしていたの）

（どうすればファフナーのリスクを無くすことが出来るか、それが無理でも最低限のリスクで済む方法はないのか日々研究してその結果を人工子宮の子ども達に反映させていったわ）

（そんな時に貴方の情報を記録する日がきてね…驚いたわ貴方の適正はその当方で最高値を叩き出した）

（…）

（そのあと真壁一騎が記録をすぐに塗り替えることになるんだけどね。自分の子どもが戦場に行くことが確定した中で育てやがて戦いへ送り出さなきゃいけない。それがその時の私には耐えられなかった）

（そして記録を改竄した…）

（記録どころじゃないわ、貴方の遺伝子も徹底して修正しようとして結果として適正はパイロットに必要な平均レベルまで落ちたわ。私は安堵してそれ以上のことを

行うのを止めた。けどそこで1つの誤算が発生してしまった)

(誤算って)

(遺伝子を弄り過ぎて貴方のメモリージングが全く機能しない可能性が出てきた)

(実際それは貴方を育てる過程で確信したわ。貴方は遅くても本来15歳になって開放されるはずのメモリージングが全く機能しないことに。メモリージングが発生しない誤作動はその頃には全く起きない体制が整ってたからね。これではマズイと思って私はもう1人同じ子どもが出来れば疑われずに済むと思って実行を決めたわ。そして選んだのが…)

(恵なのか…)

(そう。あの子の両親とは古い付き合いだったからね。その為に1番貴方と長い関係を持つ可能性がありお互いを助け合うことが出来るであろうと考えた私は恵の遺伝子も弄ったわ、彼女の場合は特に他の影響は無かったみたいでホッしたわ)

(なんだよそれ…全ての原因が母さんだなんて。)

(当時の私が貴方を守る為に行ったことが貴方を苦しめる結果になったことは悪かったと思うわ。でも私が貴方を守りたかったということだけは知っていてほしい。例え理解されなくても…とところでさ、島のコア貴女は何故このことを黙認したの)

(それは私ではなく皆城乙姫が行ったことだから私に聞かないで、でも皆城乙姫の記憶

を借りて言えることは霧島亮介の中で目覚めた存在と霧島亮介を向き合わせるのはいと判断したからよ)

(俺の中で目覚めた存在…それは)

(そう。もともと貴方の因子でしかなかったその結晶は霧島叶が遺伝子を弄ったことで不要となった因子や遺伝子の集合体。『存在したい』という強い想いが因子でありながら自我を持つ存在になった。そしてその『存在したい』という願望が『力』となった)(どういふことだ)

(貴方が適正があるのにファフナーに乗れなかったのは、その強大過ぎる力が他の存在を呑み込み消失させる可能性を秘めていたから。ファフナーにあるそれぞれのコアが『自分が呑み込まれる』ことを拒絶した。だから貴方はファフナーに乗れなかった)

(それが俺達の力…)

(そう。貴方が時より他者から恐れられたのも、これまで多くのフェストウムが貴方の同化を躊躇ったのも貴方に『支配される恐怖』を感じ取ったから。マークザインが拒絶し、皆城乙姫が距離を置く程の強大な『力』)

(『支配』…)

(『支配』。それはその者の意志によって相手を服従させる力。凄く強い力だけど。使い方によっては相手だけじゃない。貴方の大切な人達を恐怖に陥れる可能性を秘めた力。

だから皆城乙姫は貴方が貴方のぶつかる数々の困難と向き合い乗り越えることで力を制御出来るようになることを望んだ。私もそれに同意した。だから霧島叶の行いを咎めるつもりはない。

(そう…ありがとう)

(貴女は自らの行いに罪の意識を常に持っている。これからもち続けなさい永遠に。それが私が貴女に与える罰)

(わかった。島のコアの心使いに感謝するわ)

(亮介。そろそろいいかしら。貴方がここにいるのは選んでもらう為なの)

(最後に聞かせて欲しい。僚や祐未、母さん達の戦いを)

(…いいのかしら)

(…手短にしなさい)

(ありがとう)

そうして語られた。旅立った親友達の戦いそこには記録には遺しきれない多くの人達の葛藤があつた。

第六十四話「追憶：去る者」

『L計画』本当に実行するんですね司令」

霧島叶は皆城公蔵と面会をしていた。

「叶くんか。まだ迎撃体制の整っていない今の竜宮島を敵に見つけられてはいかんだよ。それを防ぐのに今出来る最も有効な手段として承認した」

「このような計画本当に成功すると思いますか」

「…立案者である生駒は自分を含めた全ての作戦参加者が生きて帰れるプランを提唱している。だから私も許可をしたんだ」

「その生駒さんも亡くなられたんです。今一度作戦の変更をした方がよろしいのではないですか」

「今の我々ではこれが限界なのだ。君にその代替案があるのかね叶くん」

「…それは」

「そういうことなのだよ。今の我々には『どの地獄へ進むのか』という道しかないのだ。刻一刻と迫るその日を阻止しようと、叶は走り回った。

「なあ真壁さん。あんたからも司令へ提言してくれよ、こんな作戦間違ってるって」

「…最終的な決定権は皆城にある。その決定を成功させる為に動くのが今の俺の仕事だ」

「遠見先生。どうにかならないかね、『テイターン・モデル』の激しい同化現象に耐えられるパイロットがいないって報告すればこの作戦しなくて済むんじゃないか」

「叶さんお気持ちは察しますが、選抜されたパイロットは皆、問題無く『テイターン・モデル』に乗れるパイロット達です。データ上も問題ありません。彼らの無事を祈りましょう…」

「そんな…」

遠見千鶴と面会を終え部屋を出ると

「おばさん具合でも悪いんですか」

「僚か…。いや私は元気だぞ、お前は」

「最近調子がいいんです。…やっと皆の役に立てるって決まってから」

将陵僚は叶の反対する『L計画』に参加するファフナーパイロットであった。

「さつき、亮介に会ったんですよ『先にあっちで待ってる』って言ったら『俺もすぐにそっちに行くからな』って」

「あのバカ息子は」

「なんか安心しました。亮介はこの島に居続けてくれるんだなって。あいつがもしこの

世界の真実を知ってたらこの計画に参加することになりそうな気がしてたんで」

「…」

「俺あいつに凄く感謝してるんです。学校になかなか行けない俺の為にあいつは居場所を作ってくれた」

「生徒会長か…いやじゃないのか」

「いやではないです。向いてると思えませんが、でも生徒会長って肩書きのお陰で俺は皆に存在を認めてもらえてるって思うんです。だから今度は俺があいつの居場所を守る番だなって」

「行かない選択肢もあるんだぞ」

「さつきも言ったでしょ。ようやく皆の役に立てるんです。どんな運命でも俺は行きますよ」

「そっか…」

「俺としてはもう一人ここに残ってほしいやつがいたんですけどね、結局彼女の意思を変えられませんでした」

「…お前らだけにそんな過酷な運命を背負わせわしないさ」

「おばさん…」

『L計画』発動前日。叶は再び皆城公蔵のもとを訪れた。

「計画への参加志願とは、何かあったのかね叶君」

「あの子達だけにこんな過酷な運命を背負わせたくないんです。だから私があの子達が生き残る為の精一杯のサポートをします」

「君の任務は『フェストウムの実態解明』だ。わざわざ島を出ることもなからう」

「直接触れ、感じないことにはいつまでもフェストウムのことはわからないと私は思います。そして解明が進めばすぐにあの子達へ反映することも出来ます」

「…いいのかね。君が指摘していた通り。この計画は極めて危険な作戦となる」

「構いません。私があの子達を生還させます」

参加志願を終えて叶はすぐに椎名家を訪れた。

「叶ちゃん。どうしたのこんな時間に」

「私、明日行くから。亮介のことよろしく頼みます」

「行くつてまさか…。そんな、残させた亮介くんはどうするの」

「だから頼みに来たの」

「計画事態に反対だったお前が急遽参加を決めるとは、何かあったのか叶」

「じじい…別になんもないよ。計画実行が決まった以上、私は1人でも多くのやつが生還するために手伝いたいって思ったただけだ」

「…何に焦っている」

「焦る。私が」

「そんな綺麗事を並べてまで覆い隠す本音。お前の言葉の節々から滲み出ている」

「なんも：ねえよ。これは私が果たさなきゃならない責任。ただ：それだけだ」

「：亮介は預かる」

「お父さん」

「必ず。連れて帰ってこい」

「当然だ。じじい：ありがとうな」

『L計画』発動当日。

「急な出張って大変だね。母さんしかも1ヶ月は帰って来れないって」

「悪いな亮介。恵の両親に困ったことがあったら頼れ、話しはつけてあるから」

「わかった。気をつけてな母さん」

「ああ：必ず帰る」

「どうしたの母さん」

「なんもねーよ。じゃあ行ってくる」

『L計画』にて叶は襲撃してきたフェストウムの残骸から破片を採取し研究、成果をLポートに反映させることを主に、医療、メンタルケア、作戦立案あらゆる作業に従事した。

「特に問題無し、お疲れさん。戻っていいぞ」

「ありがとうございます。叶さん」

「この計画の責任者任されてるお前の方が大変だからな。これくらいなんともないさ早乙女」

「私は任務を全う出来ているのでしょうか」

「早乙女。お前は十分任務を勤めているぞこの島の命と竜宮島の想いをお前はしっかりと背負ってここままでやれてる。弱気になるな。むしろすまない。若いお前達にこんな過酷な任務を任せてしまつて」

「叶さん。なにか思い詰めてませんか」

「…なんだよ急に」

「私の勘違いならいいのですが、その…死に急いでいるように見えるんです」

「んなことねーよ。皆を無事に島に返すために私のやることは一杯あるから慌ただしくみえるだけだろ、きっと。問題ないからよ、さあ戻つた戻つた。敵は直ぐに学習して私らを襲つて来るぞ」

「そうですね。失礼しました」

作戦が進むにつれ閉鎖されていたLボートのブロックが開放されて行く、計画参加者の旅立ちと共に…

「霧島さん。同化現象末期の二人が」

急ぎメデイカルルームに向かう叶、既に1人は緑色の結晶となりバラバラに砕けていた。

「早苗。弟がお前の帰りを待つてるんだろ、逝くな」

「霧島さん危険です。離れて」

もう1人も叶の叫びも虚しくバラバラに砕けた。

「…私は結局。誰も守れないのかよ」

重苦しい空気に日々包まれる艦内。残されたパイロット同士が喧嘩をするのを目撃した。

「なんでこんなこと書いた。言え」

「やめて。もうやめてよ」

叶はそれをどうすることも出来ず見守るしか無かった。

作戦時間のタイムリミットが近づいた頃、Lボート最後のブロックが開放され脱出挺が用意された。

(ここ)まで生き延びた。帰ろう島へ…償いはまた別の機会だ)

「フェストウム襲来」

「やはり来たか、これが最後の出撃だ…二人共頼んだ」

「はい」

(僚…祐未…。死ぬなよ)

「よし、彼らが敵を誘導してくれている間に行くぞ」

「迎えに来てますかね竜宮島は」

「…」

「あたりめーだろ、島の人達を信じて私らは進めばいいんだよ」

「叶さん。そうだ我々は信じて進もう」

「Lボートのフェンリルを確認。2機の『テイターン・モデル』も無事です。」

(二人ともよくやった。よくやったぞ)

「そんな…バカな」

「どうした」

「脱出挺の航路にフェストウムです」

「そんなバカな、フェストウムは海の中では動けないはずだろ」

「学習したってことだろ、フェストウムが」

「叶さん…彼らのファフナーは」

「後方から接近していますが、間に合いません」

（すまない皆。結局私は何の役にも立てなかった。亮介お前は幸せに生きろ）

脱出挺はフェストウムにより破壊され、残ったファフナー2機もフェンリルを使用し結果。誰一人竜宮島に辿り着いた者はいなかった。

第六十五話 「追憶：祝福」

（これが私から見たL計画の全てよ。少しは整理出来たか亮介）

（母さんは結局何がしたかったんだ）

（…1人でも多くの人達が島に帰れるよう手伝いたいと思ったのは確かだ。でも本音では早乙女の指摘通り私は生き急いだかもな）

（そうか…）

（話は済んだ）

（皆城織姫…待たせたな、もう大丈夫だ。確か俺がまだここにいるのは選ぶ為だったな）

（そう。島のミールが貴方を祝福しようとしている）

（祝福…）

（貴方と『もう1つの貴方』を島のミール祝福がすることで、貴方はもう一度あの世界で生を得られる）

（本当かそれは…）

（貴方はそれを望む。それとも望まない）

（俺は島に…恵のもとに帰りたい）

(そう。ならこれに手を触れなさい)

俺はアイツに手を伸ばさず。

(…何も起きないぞ)

(当然よ。貴方は『もと1つの貴方』の望みを叶えていないから)

(コイツの望み…)

(それは1つの存在をよりそのものとして確立するための大事なもの、貴方にあり、私にもある。けどそれにはまだない)

(…)

(なんだそれは、何が言いたい)

(自分で見つけなさい。これまでのように貴方は自分で答えを見つけていることが出来る)

(俺と皆城織姫にあつて、コイツに無いモノ…なんなんだ)

(私は芹にそれを貰った。貴方は霧島叶に、他の皆も誰かから貰っている)

(誰かから貰う…)

俺は思い返しふと気がついた。『コイツ』には『それ』がないことに

(なんだよ、最初に言えばよかったのに)

(自分でそれを求めるのは恥ずかしいと思いました)

(そうだな…お前の『名前』は…)

『名前』を得たアイツから眩い光が溢れだした。

(島のミールが貴方達を祝福する。けど貴方達に1つまた苦しみを与えなければならぬ)

(今度も乗り越えてみせるさ。二人で)

(そう。一応言っておくは、貴方達が島のミールの祝福を受けた時の代償を)

(…そうか。わかった)

やがて反対側で懐かしい面影が俺達を支えていることに気がついた。

(僚に祐未、早苗…おじさんとおばさんまで。そうか皆、竜宮島にいるんだな。護るよ皆のいる島を)

かつてない激しい光が俺達を包みこみ、真つ暗な世界に残ったのは俺達と皆城織姫、母さんの3人だった。

(終わったのか)

(終わったわ。そして直ぐに行きなさい私達の島に)

(どういふことだ)

(『純粹ミール』がもうこの星に迫っている)

(『純粹ミール』…『アルマイル』か)

(貴方達の力があるわ。行きなさい)

(わかった。…母さん)

(なんだ亮介)

(母さんは島に還らないの)

(私は…)

(直ぐにでも還れるわ)

(ありがとう。私は島のミールが許してくれても、私自身が許せないから、まだここにいます。私自身が許せるようになった時、まだ私を覚えていてくれたら。還るわ…それが私が私に与える罰)

(そう。わかったわ)

(行きなさい亮介。恵と幸せにな)

(母さん…行つてきます)

(霧島叶が同化された時に持っていた『器』と貴方達が使っていた『器』を島のミールが祝福し再構成した『器』がある。それをを使いなさい)

(わかった)

こうして俺達は皆の待つ島へ向かった。

最終話 「約束」

「これが、俺達がここに来るまでの全てです」

亮介はここに来るまでの出来事を皆に話した。

「その機体は」

『マーク・ネベル』。フェストウムに同化された俺達の母：霧島叶が持っていた『ティターン・モデル』の情報と僅かに残った残骸を俺達が乗っていた『ドミニオンズ・モデル』『ガブリエル』に島のミールが機体を祝福することで再構成し完成したファフナーです。この機体のコアは『アトム』で形成されているので、実質俺の専用機となります」

『アトム』とは」

「俺の中にいる『もう一つの俺』の名前です。『アトム』は俺のフェストウム因子がベースで生まれたフェストウムに近い存在で、俺は『アトム』と一心同体になることでファフナーを動かせるようになりました」

「つまり、『人の心を持ったフェストウム』が君と一心同体になっていると」

「はい。皆城織姫曰く俺は『人とフェストウムの間に位置する存在』になったようですよ」

「『マーク・ネベル』の性能は」

「『ドミニオンズ・モデル』の性能に『ティターン・モデル』の性能が上乘せされているので問題ありません」

「ナレイン将軍から頂いていた情報によれば『ドミニオンズ・モデル』は量産型ザルヴァートル・モデルのようなものと記録していました。つまり」

「そこに『ティターン・モデル』の性能が上乘せされている…マークザインやマークニヒトに匹敵するののか」

「恐らくは…」

「亮介くん。我々は今『プランδ』を実行している。だが先の戦闘で現存する全てのファナーが使用不能となった。護衛を頼まれてはくれないか」

「もちろんです真壁司令。その為に俺はここへ来ました」

「ありがとう。すまんがよろしく頼む」

『マーク・ネベル』は敵意を持って近づくフェストウムを意図も簡単に倒していった。たった一機で

（ベースは『ドミニオンズ・モデル』だが、人類軍のファナーで標準装備のルガーグリッブが左腕のみ『ティターン・モデル』の鋭利な手になっている。しかもその腕はイージスを展開出来るため攻守一体となったことで巨大化した左腕のハンドが見事に消えて

いる。右手にはベヨネット。臨機応変に素早く対応するにはあのコンパクトな銃剣を装備した方が良いという判断か、背面は『テイターン・モデル』か…機動性を重視しているようだ。そして最大の特徴は『マーク・ネベル』のSDP『支配』。範囲内全ての敵を支配下に引きコントロール出来るようだ。範囲は丁度竜宮島を全てカバー出来る程の広範囲対象はディアプロ型クラスの上位種をも支配下に置けるほど強力な効果。対象は効果範囲内ならば何体でも支配出来るが、数が増える程1体への効力が弱まり、支配下においたフェストウムの種類によっても一度に支配出来る数は変わるようだ)

『マーク・ネベル』凄まじい戦闘力です」

(これが、亮介の本当の力…)

「亮介くん。こちらは間もなく竜宮島防衛圏内を抜ける。君も帰還したまえ」

「了解。…皆城織姫は還りましたか」

「ああ、我々が必ず島に還ると信じ島に命を還した」

「そうですか…」

無事、竜宮島防衛圏内を抜けたRボートとLボート。しかし『マーク・ネベル』は歩みを止めた。

『マーク・ネベル』が竜宮島防衛圏内で停止しました」

「亮介どうしたの、さっきの戦闘でどこかやられたの」

「恵すまない。俺はここから先へは行けない」

「えっ…どうして」

「俺達の命は竜宮島のミールの祝福によって生かされている。だから竜宮島のミールの
大気が十分漂う竜宮島でしか生きていけないんだ」

「そんな…」

ようやく再会出来た矢先の突然の別れ、私の目は涙で溢れていた。

「佐喜さん。二人を頼みます」

「亮介…。任せとけこのバカ」

「ありがとうございます。」

「皆さん。皆さんが帰還するまで、俺達が必ず島を護ります」

「…戦力としては実質『マーク・ネベル』1機のみとなる。潜航モードに入り偽装鏡面も
展開されるため、まず襲撃は無いであろうが、困難な任務となる。すまんが島を頼んだ」

「了解。…ごめんな恵、一緒に行けなくて」

「亮介…」

「俺達は、何年経とうが何十年経とうが必ず皆のこの島を護り皆の帰りを待つてる。だ
から恵も皆と必ず生きてこの島に帰ってきてくれ」

「うん。わかった…」

「約束だな」

「約束だよ」

そう言い残すと『マーク・ネベル』は海と同化し反応が消えた。
私達は各々が結んだ『約束』を胸に愛する故郷をあとにした…。